

〈JMMA第17回大会〉

目次

【特集】

〈会長挨拶〉第17回JMMA大会開催にあたって	日本ミュージアム・マネージメント学会長 大堀 哲	4
〈大会趣旨説明〉	大会実行委員長 高安礼士	5
〈特別講演〉社会におけるミュージアムの価値	公益財団法人大原美術館 理事長/倉敷芸術科学大学 客員教授 大原謙一郎	7
〈指定討論〉		
『社会のためのミュージアム～心に残る新たな表現～』シンポジウムの趣旨	小川義和	15
市民と博物館の多様性が認められる社会の構築にむけて	吹田市立博物館 学芸員 五月女賢司	16
人を育て、人をつなげ、文化を育む～科学文化の担い手育成事業～	静岡科学館 次長 長澤友香	19
応用発展研究部会からの問題提起	東日本大震災後のミュージアム・マネージメントの役割 社会をデザインするミュージアム	
一心に残る新たな表現とは、	弓場哲雄・塚原正彦	21
〈会員研究発表〉	山内利秋	26
	常磐大学 塚原正彦/和紙会館館長 福田弘平	28
	一般財団法人北海道開拓の村 中島宏一	33
	滋賀県平和祈念館 北村美香	35
	三重県立博物館 布谷知夫	37
	東京大学大学院教育学研究科 博士課程 都甲友理絵	39
	三重県生涯学習センター 所長 河原 孝	42
	山梨県立博物館 学芸員 高橋 修	46
	『震災からよみがえった東北の文化財展』実行委員会 若月憲夫	48
	文化環境研究所 高橋信裕・鈴木和博・山城弥生	51
	公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館 小林みか・田代英俊・中村 隆・木村かおる	54
	江本是仁・濱田沙子・山本広美・竹内 恵	56
	独立行政法人国立科学博物館 小川義和・渡邊千秋・永山俊介・岩崎誠司・久保晃一	59
	坂倉 真衣	60
	共栄大学国際経営学部 専任講師 平井宏典	64
	慶應義塾大学 システムデザイン・マネジメント研究所 研究員 本間浩一	67
	常磐大学 塚原 正彦	70
	京都国立博物館 栗原祐司	73
	子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会 代表 川人よし恵	76
	Learning Innovation Network 代表/子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会 副事務局長 黒岩啓子	79

【新刊紹介】

『さわっておどろく！ 点字・点図がひらく世界』/『さわって楽しむ博物館 ユニバーサル・ミュージアムの可能性』	神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員 奥野花代子	82
--	----------------------------	----

【インフォメーション】		84
-------------	--	----

特集

2012年6月2日(土)・3日(日)に東京家政学院大学にて開催いたしましたJMMA第17回大会を特集して報告します。

日 程：平成24年6月2日(土)～3日(日)
場 所：東京家政学院大学（東京都千代田区三番町22番地）
共 催：学校法人東京家政学院
テ ー マ：「社会のためのミュージアム—心に残る新たな表現—」
参 加 費：会 員…個人・法人会員 1,000円、学生会員 500円
非会員…一般 2,000円、学生 1,000円（但し当日入会者は会員扱いとする）
懇親会費：一般 3,000円、学生 1,500円
参加者数：217名

■プログラム

第1日目

総 会【4階・1407教室】

- (1) 会長挨拶
- (2) 平成23年度事業報告
- (3) 平成23年度収支決算報告
- (4) 会計監査報告
- (5) 平成24年度事業計画案
- (6) 平成24年度収支予算案
- (7) 学会賞受賞者の報告
- (8) 役員改選について
- (9) その他

開会式【4階・1407教室】

- (1) 開会挨拶 大堀 哲（JMMA会長、長崎歴史文化博物館館長）
- (2) 挨拶 山口 孝・東京家政学院理事長
- (3) 大会趣旨説明 高安礼士（JMMA副会長・大会実行委員長、財団法人全国科学博物館振興財団）

学会賞授与式【4階・1407教室】

- 受賞挨拶〈学会賞〉 木下達文（京都橘大学）〈代理出席：北村美香〉
黒岩啓子（Learning Innovation Network）
平井宏典（共栄大学）
〈特別賞〉 高橋信裕（文化環境研究所）

特別講演【4階・1407教室】

「社会におけるミュージアムの価値」 大原謙一郎（公益財団法人大原美術館理事長）

シンポジウム（指定討論）【4階・1407教室】

テーマ：「社会におけるミュージアム ～心に残る新たな表現～」

パネリスト

- 「市民と博物館の多様性が認められる社会の構築にむけて」 五月女賢司（吹田市立博物館）
「人を育て、人をつなげ、文化を育む ～科学文化の担い手育成事業～」 長澤友香（静岡科学館る・く・る）
「東日本大震災後のミュージアム・マネジメントの役割
社会をデザインするミュージアム—心に残る新たな表現とは」
弓場哲雄（小林工芸社）、塚原正彦（常磐大学）

司 会：小川義和（国立科学博物館）

情報交換会【ローズホール】

第2日目

会員研究発表 第1部

第1会場【4階・1407教室】

- ①地域コミュニティ再生の核としてのミュージアムの役割 山内利秋（九州保健福祉大学）
- ②ミュージアムマネジメントによる伝統文化産業の再生モデル
—鳥山和紙会館の経営モデルを検証する— 福田弘平（鳥山和紙会館）、塚原正彦・山崎 淳（常磐大学）
- ③野外博物館の無限性を活かす社会的な取り組み
—野外博物館北海道開拓の村のむらびと登録制度事業— 中島宏一（一般財団法人北海道開拓の村）
- ④地域と共に発展する場の形成をめざして —滋賀県平和祈念館の事例より— 北村美香（滋賀県平和祈念館）
- ⑤博物館の社会的な役割について 布谷知夫（三重県立博物館）
- ⑥ミュージアム・ボランティアの学びに関する研究 —美術館ボランティアの語りからみる活動に注目して—
都甲友理絵（東京大学大学院博士課程）
- ⑦ミュージアムをつなぐ試み ～生涯学習センターがハブ機能を発揮する～ 河原 孝（三重県生涯学習センター）

第2会場【5階・1502教室】

- ①小学生向け古文書解読プログラムの開発・実践とその意義 高橋 修（山梨県立博物館）
- ②被災地の心を伝える展示をめざして「震災からよみがえった東北の文化財展」の概要と展示のポイント
若月憲夫（「震災からよみがえった東北の文化財展」実行委員会）
- ③「震災からよみがえった東北の文化財展」実施報告
来場者アンケート調査からみる効果測定 ～より良い新しい表現を目指して～
高橋信裕・鈴木和博・山城弥生（文化環境研究所）
- ④科学系博物館における継続型教育・学習プログラム実施状況の実態調査
小林みか・田代英俊・中村隆・木村かおる（公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館）
- ⑤科学コミュニケーターとしての勤務経験による職業観への影響について ～日本科学未来館の事例より～
江水是仁（東海大学）、濱田沙子（日本科学未来館）、山本広美・竹内 恵（元日本科学未来館）
- ⑥博物館と学校をつなぐ人材の養成 ～教員のための博物館の日を通じて～
渡邊千秋・小川義和・永山俊介・岩崎誠司・久保晃一（独立行政法人国立科学博物館）
- ⑦「子どもが博士と出会う体験」の一考察 —コドモ to サイエンスカフェの事例を通して—
坂倉真衣（九州大学大学院）

会員研究発表 第2部

第1会場【4階・1407教室】

- ⑧博物館経営における共創概念の意義 ～参加型プラットフォーム構築に関する諸要件を中心として～
平井宏典（共栄大学国際経営学部）
- ⑨共通チケットによる複数の博物館への関心の喚起についての考察
—東京都におけるぐるっとパスの事例を用いて—
本間浩一（慶應義塾大学大学院附属システムデザイン・マネジメント研究所）
- ⑩地域資源を活用した暮らしのデザインミュージアム構想
～一年の暮らしを彩る知恵の出会いみんなが主役になれるコンテンツ開発研究～
弓場哲雄（小林工芸社）、塚原正彦（常磐大学）

第2会場【5階・1502教室】

- ⑧絵本にみるミュージアム 栗原祐司（京都国立博物館）
- ⑨ミュージアムにおける学びを通じた子育て支援の実践
川人よし恵・内田みや子・黒岩啓子（子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会）
- ⑩ミュージアムにおける乳幼児連れ利用者対応に関する一考察
黒岩啓子・川人よし恵・内田みや子（子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会）

閉会式【4階・1407教室】

閉会挨拶 沖吉和祐（JMMA副会長、東京家政学院専務理事）

アフタヌーンミュージアム

「突入！ ソラマチ・スカイツリー」

〈会長挨拶〉

第17回JMMA大会開催にあたって

日本ミュージアム・マネージメント学会長
(長崎歴史文化博物館 館長)
大堀 哲

本日は全国各地から多くの会員の皆様次第に第17回大会にご参加いただき、誠にありがとうございます。日頃は、利用者、地域住民、市民の目線に立った博物館運営に当たられたり、博物館運営の在り方等に関する研究にご努力されている人、或いは博物館へ強い関心をお持ちの方々に改めて敬意を表したいと思います。

本大会開催に当たりましては、会場のご提供につきまして東京家政学院の山口理事長先生及び専務理事であります沖吉JMMA副会長には格別ご配慮を賜り、また教職員の皆様、それに多くの学生の方々にも大変ご尽力をいただき、本日を迎えることができました。学会を代表して心から御礼を申し上げたいと存じます。土曜日のお休みのところ山口理事長先生にはご出席をいただきまして、後ほどご挨拶を頂戴することになっております。大変恐縮に存じますが、どうぞよろしく願いいたします。

さて、昨年3月11日に発生いたしました東日本大震災、東京電力福島第1原子力発電所放射能漏れ事故による人的物的被害は甚大であり、1年3か月になる今日もなお、その復興、解決の道は遅々たるもので、課題山積の感は否めません。この間、会員の皆様の中にはその支援のための活動に積極的に尽くされてこられた方も少なくないとおもっております。私自身が目にした岩手県釜石市の被災地を例に挙げますと、市街地はともかく、海岸近くになるほどその復興にはまだまだ相当の時間を要する状況にあると感じました。今後とも私たちができる最大限の支援活動をしていかなければと考える次第であります。

ところで昨年第16回大会は、東京以外の地として初めて九州産業大学を会場に開催させていただきました。吉武九州支部長をはじめ、支部会員、九産大の学生の方々にご尽力いただき、予想以上の参加者を得て大変盛況裡に終了することができました。改めて感謝したいと思います。

本大会は、17回を数えることになりました。わがJMMAが日本の博物館界にとりまして存在感が大きくなっていることは申し上げるまでもありません。会員皆様のこれまでの博物館運営、博物館経営につ



いて幅広く、多分野に亘り実践、研究活動をされ、その成果を情報発信してこられた積み重ねによるものでありまして、大変有難く、ご同慶の至りであると思っております。

JMMAは博物館運営・経営に関する学術研究、実践研究を深化させつつ、それをふまえたわが国のミュージアム・マネージメント学の確立というヴィジョン、方向性のもとに活動を展開しております。そのプロセスにおいて多様な課題にチャレンジしているといえます。その中で本学会は地域社会に根ざした、地域に開かれた博物館の運営・経営に向けて幅広い“連携協働”の重要性を強調しております。つねに利用者、地域住民、市民の視点から、地域の各種団体・グループ、企業、学校、マスコミ、病院や福祉施設、他の生涯学習関連施設、機関等との連携協働を大切に考え、博物館活動の内容、方法を含む運営・経営全体について学問的にも、実践的にも研究し、博物館界の進化・発展、地域振興、地域文化の向上に寄与しようとする方向は変わることがありません。そのために、これまでJMMA年間研究テーマを設定して多彩な活動を行ってきたところであります。

今年度からは、「社会のためのミュージアム～心に残る新たな表現～」を研究テーマに掲げました。この意味するところはそれぞれにお考えがあらうと思いますが、私はつぎのようなことも考えられるのではないかと考えております。

いま、わが国の博物館に求められているのは博物館数や入館者数など量の問題もありますが、博物館活動の“質”の問題があると思います。博物館の質をいかに高めていくかにもっと重点を置くべきではないということでもあります。“質”と一口に申ししましても、コレクションの質もありますし、調査研究や教育プログラムの質もあります。そして博物館運営・

経営、マネジメントの在り方、質の問題も欠かせません。

その中で社会的な存在としての博物館が、社会から、地域社会から存在が認められる活動の質とはどのようなものなのか、を真剣に考える必要があると思います。それは利用者や地域住民、市民の心をとらえる博物館、心に残る博物館の運営を創ることだと思います。

博物館の常設展示について考えてみましょう。

常設展示は、“博物館の顔”でなければならないはずですが、現実にそれにどれだけ注意が払われているのでしょうか。確かに常設展が大切だという関係者は少なくありませんが、そういつつも利用者の心に残る常設展示づくり、或いはその運営に心を砕いているケースは決して多くないように思います。利用者の心に残る表現、心に残る運営に必ずしも力点が置かれているように見えないように感じられます。企画展はいかに観覧者に面白く見せられるか、解説資料や案内、ギャラリートークなど、その運営にかなり気配りすることが多いと思います。それ自体重要であります。常設展に関しては現場において見る人を感動させたり、楽しい学びにつながるパネル解説になっているか、学芸員やボランティアの説明案内はマンネリ化していないか、などについて省みる必要があるのではないのでしょうか。地味な仕事ではありますが、そうしたところから見直してることが必要だと思います。利用者の心に残る展示方法、表現技術や質の工夫が求められていると思います。

これは研究者についてもいえることだと思います。ややもすると、理論研究、机上論としては成立しても、利用者の心をとらえる表現の問題にもう一步踏み込んだ研究が不足しているように思われます。利用者にとって難解な内容であったり、市民のニーズと乖離していて学習意欲を減退させるものであってはならないと思います。常設展示に着目した心に残る展示の内容・方法ともに、運営の在り方についての研究に一層の努力が必要だと思います。市民に強く印象に残るプログラムとはどういうものか、社会にとって必要な教育プログラムは何か、課題は少なくありません。また、教育イベントにしましても、集客力を考えることはわかりますが、それだけでなく利用者、市民の生活の向上や文化度の向上、市民に間違いのない世界像を形成する材料の提供に結びつくような、まさに心に残るプログラムの工夫と展開に配慮することが強く求められると思います。そのためにもJMMA会員が各博物館の学芸員はじめ職

員の皆様とのネットワークを広げ、相互に活動の交流を通じて新たな展開をされることを期待したいと思います。

この機会にぜひお願いしておきたいことがあります。申すまでもなく、JMMAは会員の皆様の年会費によって運営されております。そのためにも会員の確保が重要な問題であります。新規会員には、入会時は会費を減額しておりますことを申し添えて、会員お一人お一人が少なくとも一人の会員を勧誘してくださるよう、ご協力をお願いいたします。

本日、明日の2日間にわたる本大会、皆様のご協力により、活発な議論を展開され、実り多い大会になりますようお願いいたします。

最後になりましたが、本大会開催の準備のため本日までご苦勞をおかけしております実行委員長の高安副会長を中心とした役員及び事務局の方々に心から御礼を申し上げ、会長としての挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

JMMA第17回大会開催の趣旨

大会実行委員長

高安 礼士

1. はじめに

本日は日本ミュージアムマネジメント学会第17回大会にお集まりいただきましてありがとうございます。JMMAの大会は、毎年東京で開催し、北海道、九州等の遠隔地からご参加いただいておりますが、これらの地方会員の皆様の負担軽減、あるいは支部活動の活性化を図る観点から、第16回大会は九州支部のご協力を得て、福岡市で開催いたしました。今年度は、東京で開催することとなりました。

本大会のテーマは、「社会のためのミュージアム—心に残る新たな表現—」でございます。JMMAにおけるこれまでの年間活動テーマは、平成8年度の「ミュージアムがつくる新しい文化」から、年毎に「新しい時代をつくるミュージアムの可能性」「時代の転換とミュージアム」「地域社会とミュージアム」、また平成12年度からは3年度ごとに「リレーションシップ—地域との連携—」「ミュージアム・コミュニケーション」「ミュージアム・マネジメントの再構築—継承と改革—」「—博物館法を考える—」「—博物館の課題と人材育成—」と実施し、平成21年度からの3年間の学会の活動テーマを「ミュージアム・

リテラシー」とし、その第1年目の平成21年度は、「一学校と博物館」との関係、平成22年度は「一地域との連携」、平成23年度は「一博物館職員の役割と地域連携・国際化」考えることとしていました。平成24年度からの3年間の学会活動の主テーマを「社会のためのミュージアム」とし、本年のサブテーマを「心に残る新たな表現」として、より焦点化した研究や活動を呼びかけたものです。

2. 趣 旨:

世界的な経済の不安定さが深刻さを増すなか、東日本大震災という未曾有の災害の普及・復興が大きな課題となり、また、我が国の経済・社会・行政制度の方向性が明確ではない今、ミュージアムは何ができるか、ミュージアムは何をすべきかが求められています。

こうした状況下、本学会は今後3年間のテーマを「社会のためのミュージアム」とし、研究会や紀要編集等の活動を展開することとしました。これまで、「ミュージアム・リテラシー」というテーマのもと、利用者の視点に立ったミュージアムの目指す方向性を探求し、平成23年度は「博物館職員の役割と地域連携・国際化」について多角的な検討を行いました。

これをさらに発展させようとするもので、本年度は、ミュージアムにとって最も基本的な展示の機能を中心として「心に残る新たな表現」を取り上げ、これをサブテーマとしました。

また、本大会は、日本博物館協会が実施している「国際博物館の日」（5月18日を中心とした1ヶ月間開催）の事業の一環としております。

第17回JMMA大会の役割分担

実行委員長	高安副会長
副実行委員長	田代理事、小川理事
○総会及び開会式担当	土井理事、小笠原幹事
総会・大会司会	齊藤理事、染川理事
記念講演担当	高橋副会長
○学会賞表彰担当	倉本理事、齊藤理事
◎指定討論（原稿等等）	齊藤理事、小川理事
○研究発表会担当	小川理事、高橋副会長、塚原理事、田代理事、齊藤理事 高尾幹事、中野幹事
部会・支部会報告、閉会式担当	高橋副会長、水嶋副会長（まとめ）
懇親会担当	染川理事（司会）、高橋副会長
アフタヌーンミュージアム担当	齊藤理事、塚原理事
総務担当（資料・受付含む）	高橋副会長、齊藤理事、中野幹事
経理担当	小笠原幹事、原幹事
広報担当	星合理事、齊藤理事
開会挨拶、学会表彰	大堀会長
閉会挨拶	沖吉副会長
懇親会挨拶	堀副会長
祝辞	倉本理事

〈特別講演〉

社会におけるミュージアムの価値

公益財団法人大原美術館 理事長
倉敷芸術科学大学客員教授 (非営利組織経営論)

大原謙一郎

皆さんこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました大原です。よろしくお願いいたします。

お手元にレジユメをお配りしています。これに添っていきます。「社会のためのミュージアムの価値」のさまざまな側面が今日のテーマになります。ミュージアム自身が価値がある。それからミュージアムのような非営利公益事業体というのは、社会で色々な価値をもっている。それから、ミュージアムが支えようとしている文化は色々な力をもっている、そういうことをテーマにお話を申し上げたいと思います。

(1) 「私立ミュージアム・美術館は非営利公益事業である」という事の意味と意義

まず、「非営利公益組織の意味」とは何か。新しい公益法人制度について、今多くのミュージアムがものすごく悩んでいると思います。この制度のどこが良くてどこが間違っているのか。これをまずおさえていきたいと思うのです。

非営利公益組織の「非営利」というのは、何のことであるか。この世界の研究者にとっては常識です。「非分配」ということです。だけれども、世の中の人たちにとっては、非営利というのは、「収支ゼロということである」という全くの誤解がまかり通っている。国会ですらまかり通っている。これは非常に困ったことです。

非営利ということの基本は「非分配」ということです。これはどういうことかということ、営利事業の基本は何かということ「分配」です。このことを抑えたら、非営利の基本は「非分配」ということがよく

1) 「私立ミュージアム・美術館は非営利公益事業である」という事の意味と意義

- 1-1 「非営利公益組織の意味」とは何か、新制度は何が正しく何が間違っているか
- 1-2 「非営利公益組織が社会に存在することの意義」とは何か
- 1-3 公益装置としての私立、公立、企業内ミュージアム
- 1-4 公益価値極大化経営の原理原則

2) 大原美術館の公益的使命認識と規範、規律について

- 2-1 「美術館の使命は、文化・美術が生まれ、広がり、働くお手伝い」という認識
- 2-2 「使命の宣言」と「行動規範」について
- 2-3 多文化理解の装置としての、倉敷と、大原美術館
- 2-4 それにしても、世間様は、何もわかっていない

参考文献 「倉敷からはこう見える——世界と地方と文化について——」 大原謙一郎著
山陽新聞社発行

(第17回大会当日配布資料より)

わかります。株式会社は、株主に対して“果实”を分配するための装置です。ですから、民法とか商法とかをもしご覧になることがあったら、会社のところには、株の出し方、株の種類、配当の仕方、分厚く書いてあります。「仕事はこのようにやれ」「契約はこのようにしろ」とかはほんの少ししか書いていません。株主に対する分配の仕組み。だから資本主義なのです。資本主義とはそういうことです。営利企業というのは株主に“果实”を分配するための装置です。だから「非営利事業」は出資者に“果实”を分配しないのです。これは世界の常識です。

レスター・サラモンという、ジョンズ・ホプキンス大学の先生は、非営利組織研究の第一人者ですが、非営利事業の5つの「定義的特性」を提唱しています。トップが「非分配」、2番目に「非政府」、3番目に「組織がきちんとしていること」4番目に「自発的であること」。例えば刑務所の囚人が労働するのは、非分配で非営利であるけれども、自発的ではないから、これは非営利事業とは言わない。それから「法人格の独立」です。例えば、日本生命財団というのがあります。日本生命の子会社ではなくて、独立した公益財団法人であるということに非常に気がつかっております。サントリー文化財団もそうです。「法人格の独立」です。その中のトップにあるのが「非分配」です。

非営利の基本は非分配です。営利の基本は、株主に対する分配の装置です。このことから、レジユメの4番目、1-4にある「公益価値極大化経営の原理原則」というコンセプトが導き出されます。私たちのミュージアムの経営の基本は、「公益価値極大化経営」です。営利企業は、「株主に対する分配の装置」。したがって、この原理原則は「株主価値極大化経営」です。基本的にはそうです。色々なCSR (corporate social responsibility) とか企業の社会的責任とか、あるいは色々なステークホルダーに対する配慮とか、様々な飾りがつきますけれども、基本的には「株主価値極大化経営」です。堀江貴文さんという経営者が「株主価値極大化」と言って新聞でかなりたたかれましたけれども、その限りで言えば、正しいことです。株主中心のガバナンスということはそういうことです。「株主のために一生懸命経営をなさい」ということです。

それに対して、非営利のNPOは、非分配で、公益価値極大化経営です。こういう対比をしていただければ、私たちの経営の基本がうまうまかび上ってく

るかと思えます。

そしてもう1つ。「公益」とは何か。公益というのは、「社会の価値を高める仕事だ」と私たちは考えています。これも今の制度の中で、「特別な人のための利益のために働いてはいけません。それは公益ではありません」と言っていますね。しかし単純にそうとも言えません。例えば、今日の会場となっている家政学院大学はどうですか。誰のために働いているの？主に学生さんのためでしょう。学生さんのために働いて「公益」なの？そうなんです。なぜなら、この学生さんたちを教育して世の中に出すことが、社会の価値を高めるから。そうでしょう？そういう風に考えて下さい。ミュージアムもそうです。ミュージアムは音楽ファンにとっては、何の意味もないかもしれない。あるいは、水族館は陸上の動物の研究者にとって何の意味もないかもしれないし、音楽ホールは美術の愛好家にとっては何の意味もないかもしれない。だけれども、そういったものがあれば、社会の価値を高めるじゃないですか。それが公益なのです。

「みんなに広く」ということを、今の公益の一つの要件ということを多くの方が考えています。このことにこだわりすぎると、自分の価値観を打ち出すことができなくなります。私たち「非営利公益事業」は、自分の価値観を打ち出すことが物凄く大事です。大学だってそうです。今日の会場の家政学院だって、ご近所の大妻だって上智だって、近所にあるからたまたま言ったのですけれども、全部同じではないでしょう。それぞれ自分の価値観を持ってやっていますでしょう。それならば、その価値観を打ち出していくのに、「みんなのため」といって全部を薄めてしまったら、何が何だかわからなくなりますでしょう。

そうじゃないのです。自分は自分なりに社会の価値を高める。それならば、とすぐに疑問が出てきますが、株式会社だって同じではないか。そうなのです。株式会社も社会の価値を高める製品を作らなければ、生き抜いていけません。だけれども株式会社は利益をあげる、株主に配分をする、収益を上げることを目的として公益に奉仕する会社である。私たちはそうではなくて、非営利で公益に奉仕する団体である。

今申し上げたことは、私立博物館、私立美術館だけではないのです。このレジユメ3番目に書いてありますが、「公益装置としての私立、公立、企業内ミ

ミュージアム」含めてです。色々な会社にミュージアムをお持ちかもしれない。企業内ミュージアムを含めて、公益装置です。そのことを全ての基礎において経営をしていくのが、私たちミュージアムの経営であります、というふうに私たちは考えております。恐らく、日本ミュージアム・マネジメント学会もそういった考えで全てやっておられるのであろうと思います。

ということで、新しい公益法人制度の何が正しく、何が間違っているのか。出発点はものすごく正しかったのです。これはまだ小淵内閣のころです。河合隼雄先生をトップにして、よく名前が知られている人で言えば、この前まで防衛大学の学長をしていた五百旗頭真さんなんかを主査にして、「21世紀の日本の構想」という大きな研究会が開かれたことがありました。その中で「民間が公益を担う社会をつくらう」というスローガンがたてられました。そしてこのスローガン自身は非常に正しかった。

それまではどういったことになっていたかということ、特に若い学生さんをご存知ないかと思いますが、過去にあったことを頭に入れておいてください。日本の国の制度では、公益は官が担っていました。色々な「益」がありますが、「国益」というものがあります。そして「公益」というものがあります。それから「私益」というものがあります。そして、「官」があつて「民」があります。「民」はもっぱら「私益」を追求するもの。だから株式会社ですね。民間の利益を追求し、自分で利益をあげていく、そして株主に戻していく。これだけが「民」の仕事とされた。「国益」は絶対的に「官」の仕事です。義務です。

さて、「公益」は「官」が担っていた。「民」が「公益」を担おうとする時には許可を得て担うことができる。ある程度以上の年輩の方はこれをよくご存知ですね。旧民法34条。旧といってもほんの5年前まで行われていた民法です。民間で公益を担わんとする者は、「主務官庁ノ許可ヲ得テコレヲ法人ト為スコトヲ得」とされていた。これは許可主義といわれています。これに対して、法的な仕組みができていれば法人になれる、これは準法主義です。そしてついこの前まで日本は許可主義だったのです。従って、公益法人は全て主務官庁の監督・指導に従っていたわけですね。従わなかったら許可を取り消される。許可を取り消されたら解散ですね。そういう仕組みだったのです。全て公益は「官」が担う。「民」が公益

を担おうとすれば、特別の許可を得て担う。ですから、もし国立大学に寄付をされた方がおいでだったら、「寄付願ひ」というものを出すのです。「寄付願ひ」を出して、「この団体は寄付をすることをさし許す」という許可証をもらって寄付をする。許可をもらって民間は公益に資することができる。

こんなことではダメでしょう。ダメだから、法に従って民間が公益を担うことができるようにしたのです。これが今の新しい公益法人制度です。出発点はすごく良い話でしょう。だけれども、蓋を開けてみたら、かなり困ったことがいくつか出てきた。これはこの学会の皆さんにも是非声をあげていただきたいのですが、まず、面倒・コストがかかる。2番目に収支相償。こんなことあり得ません。

面倒・コストがかかるというのは、コストがかかってもやれるところはいいですよ。だけれども、例えば、ミュージアム・マネジメントの対象になるのかわかりませんが、美術館の中には、お祖父さまがすごくいい絵を描いていて、そのお孫さんが学芸員の資格をとって一人でコツコツやっている美術館がありますね。とてもじゃないけれども認可申請書類はできません。とてもまじめにやっているたくさんミュージアム達を、これによって足きりをしてしまう結果になりかねない。ミュージアム・マネジメント学会にとっても重大な問題だと思います。

制度改革によって足きりをされるミュージアムが出てきかねない非常に難しい問題、しかもできてしまった以上は、厳密さを要求されますから、そんな厳密な経理なんかは、お孫さんが一人でやっているような美術館は出来るはずがないです。そういう世の中の現実からかなり離れてしまった制度設計になっています。ということが一つです。

それから、収支相償。これはどういった意味かといいますと、「非営利事業というのは、収入と支出がぴったり合って、余剰を出さないのが非営利事業です」という誤解です。そんなことが民間組織に出来るはずないでしょう。出来るはずないのですが、それが非営利事業ですよとお役人がお決めになった。本当は世界ではそうじゃないのです。非分配が大事なのですけれども、日本では収支相償とういことになってしまっています。

組織には、独立した事業体と与えられた予算を消化するための団体の二種類がありますね。予算消化のための団体というのはまさに収支相償で、大変なのですけれどもやっています。ですから、毎年毎年、

収入と支出が一致しなければならない。収入というのは予算ですから、予算が100万円あったら、100万使い切らなければならない。しかもややこしいのは、予算で定められたところに使わなくてはなりません。例えば、パソコンを買おうと思っていたら納期が遅れて来期になったらどうするか。その分のお金は一度返してまた来期にもらわなくてはならない。「パソコンは来年にして余ったお金で本を買おう」なんてことをしたら大変なことになります。予算消化型組織はそうなのです。

そしてお役人さんたちの目には、恐らくこの予算消化型組織しか目に入っていなかったのでしょう。だから「毎年収支相償をしなさい」なんてことを言いだしました。

こんなことをして、景気が良いときに収支相償をして、蓄えを怠ったとしますか。景気が悪くなって来年お客さんが来なくなったらどうなりますか。倒産でしょう。倒産の前に天から予算が降ってくるところはいいですよ。だけれども、事業体というのは天から予算は降ってきませんから。自前でやらなくてはなりません。そのための蓄積をしなくてはなりませんし、色々やらなければなりません。そういう事業を前提とした考えでは、収支相償というのはいりません。将来に備えた蓄積をしておかなければならない。

だから企業経営では自己資本比率を高めることを一生懸命やりますよね。自己資本比率は収支相償ではない、内部留保を厚くするということですね。だけど新制度は、それも許さない。

そういったことをやっておいて、今色々抜け道を作ってきています。抜け道の詳しいことは申し上げませんが、「間違ってたから直します」と一言言えばいいのに。それを言わないものだから、色々な抜け道を作ってやらざるを得ない。ところが、抜け道が通用するところと通用しないところがありますから大変です。そのうちに制度再改革になるでしょうね。

それから、例えば、「公益事業比率が何パーセント以上」。なるほどそうかなと一見思うのですが、実際やってみると様々な性格の法人がありますから、そんなの計算できやしないというのが随分ありますし、ものさし的にも困ったことがありますし、色々な問題があります。

基本は、手間がかかりすぎることと収支相償です。こういったことについては、マネーメン

ト学会からも是非色々な声をあげていただきたい。現場はものすごく困っています。中には、私の知っている法人で、期限内に今まで蓄積した資産を全部使い切ってしまうと、解散をしようと決めたところがありました。こんなことは日本のための損失ですよ。ここのところは是非理論的につめていただく必要があるかと思います。

さて、レジュメでいきますと、2番目の「非営利公益組織が社会に存在することの意義とは何か」を抜かしていません。公益活動によって社会の価値を高める。これは社会に存在することの意義の大きなポイントです。これは次にももう少し申し上げますが、それと同時に非営利公益セクターが社会の中に存在しているということが、社会をとても柔らかく弾力的にしてくれます。

例えば1980年代のアメリカというのは、ものすごくギスギスした社会だった。今でも銃の乱射がありますけれども、今よりも日常茶飯事でした。そういったことは所謂、市場の失敗などと言われています。

その中でアメリカはどのようなことをやってきたか。非営利公益セクターをどんどん広げていきました。先程も申し上げたジョンス・ポプキンス大学のレスター・サラモンの研究によりますと、これは1995年くらいの研究です、アメリカの労働人口の中で、95年当時、約7パーセントが非営利公益セクターで働いていました。この中にはもちろん博物館・美術館も入っています。病院とかそういったものも入っています。日本は3パーセント台です。北欧では、この比率が10パーセントを超えている国がいくつかあります。そういうふうに、非営利公益セクターを増やしてきたことによって、それだけではないですけども、アメリカの社会はカラカラと回っていくような回りやすい社会になっていきました。

日本の場合には、そういった潤滑的な役割まで企業が担っていたのです。ですから、今頃CSRだとか言っていますが、例えば村のお祭りをしようといった時には、地元の鉄工所から八百屋さんから何かから何までが少しずつお金を出し合っていていましたね。そういうような形で企業が、中小企業まで含めて、社会的・公益的な部分を担ってきた。そして企業の中の間人間関係というのは、良し悪しはありますけれども、社会を柔らかくするためにその役割を企業が担ってきた。

それがダメだよということになったのです。終

身雇用ダメ、市場原理だよ、そして株主重視のガバナンスだから株主の意向を無視して自分勝手に公益事業に寄付してはダメだよ。こうして、企業がそういう役割を果たさなくなった。アメリカはこれをとて重要視してきました。日本の場合には、ようやくこれをし始めようとして「民」が公益を担う社会を創りましょうというスローガンはできたのだけれども、実際にやってみたらとてもじゃないけれどもハードルが高くてできない。そういう仕組みになっていますので、ここは何とか変えてほしいです。

ということで、第1部をまとめますと、非営利公益組織というのはどういうことか。非営利とは「非分配」である。公益というのは「社会の価値を高める」ということである。社会の価値を高めるというポジティブな考え方を是非これからしていただきたい。

そして社会に存在する意義というには、自分たちの活動を通じて、社会の価値を高めると同時に、そういうセクターがあることによって、社会全体のバランスを良くして柔軟性を高める。そういう意味があります。

そして、公益装置としての私立、公立、企業内ミュージアム。これは全部公益装置なのです。これはよく申し上げるのですけれども、「入館者数は二番目に大事に指標だ」。是非これは各ミュージアムで主張をしてもらいたい。入館者数あるいは入館者収入は二番目に大事な指標です。一番大事な指標はどれだけミッションを達成したかということです。

大原美術館は、もちろん入館者収入は大事ですけども、入館者にウケるための企画はしません。自分の価値観に合った企画をします。そして営業の諸君が、それにどれだけ入館者を集めてくるか必死になって苦労しています。たくさん人が集まることだけを目的にしたような企画をしていたら、美術館は10年たった劣化します。

ですから、自分の価値観が一番大事。だから公益装置としての公立も企業内ミュージアムも是非これを考えていただきたい。一番大事なものはかにミッションを達成したかということであって、入館者数は二番目に大事なことです。その中で公益価値極大化の経営というのを私たちはやっていきます。株主価値極大化ではありません。公益価値を極大化する、そのことを常に頭においた経営をしていきます。

(2) 大原美術館の公益的使命感認識と規範、規律について

さてそこで大原美術館です。レジюме2番目に入っていきますが、その前に経営というのは算盤勘定とイコールではありません。これは今に始まった話ではないのです。澁沢栄一さんという方が「論語と算盤」という有名な本を書いておられる。算盤だけではないのです。論語なのです。これが日本の企業の基本的な経営です。

それでは経営とは何なのか。ミッションです。ミッションを達成するために経営資源を上手に動員すること。経営資源というのは、人とお金とモノです。私たちの場合のミッションは公益価値です。公益価値を実現するために「ヒト」と「モノ」と「お金」をどのように上手に動員するか。これが経営です。ですからミッションを達成するための「ヒト」を動かす仕組みを作って、それを動かすのです。

経営者の方は、人を動かす時には必ず3つのことを考えます。人事制度、組織形態、組織風土。経営の基本中の基本です。これは企業経営においても非営利企業の経営においても全く同じです。人事制度をきっちり考えなくてはなりませんよね。非営利事業だからといってそこをうやむやにしているのはダメです。人事制度をきっちり作らなくてはならない。それから組織形態はどういった形態が良いのか必死になって考えますよね。特に学芸と事務の間をどのように繋いでいこうか、というようなことは各ミュージアムではとても頭を痛めることだと思います。大原美術館は幸いにしてうまくいっています。それから組織風土。風土の中で風通しの良い風土なのかどうなのか。それに気配りすることは全て経営です。

経営資源つまり「ヒト」「モノ」「お金」をどういう風に上手に動員するか、言い換えれば、これがうまくいくための仕組みを作り、動かし、また作る。これが経営です。昨日うまく動いた仕組みが今日も動くとは限りません。

そのための基本、いつも頭においているのが、経営目標としての「公益価値」です。

そこで、レジюмеの2番目にあります「美術館の使命は、文化・美術が生まれ、広がり、働くお手伝い」という認識が大事なのです。自分が主役ではないのです。自分はお手伝いをする脇役です。文化あるいは学術、色々なものがありますが、それが生まれ、広がり、働くお手伝いをする。それがミュージアムというものです。

さて、ミュージアム・美術館は個人と社会と学術のために奉仕するものです。そして、文化全体も全く同じなのです。

個人と社会ということを考えてみましょう。個人にとって文化は大きな2つの力があります。一つは、自分の人生のクオリティを高めてくれる。もう一つは、文化はクリエイションのインキュベーターです。このことを教育の場で忘れては絶対にいけない。アインシュタインという人がいますが、アインシュタインは学校の成績はものすごく悪かったけれども、子供の頃から音楽少年でした。ヴァイオリンが大好きで毎日毎日ヴァイオリンを弾いていた。あの相対性理論の背景には、モーツァルトの音色がたぶん流れています。

私は倉敷レイヨンという会社にいたということを先程ご紹介いただきましたが、CMでは「ミラバケッソ」などと変なことを言っていますが、なにしろ新しいことをやりたい会社なのです。そこで世界中の研究者と色々付き合ってきました。例えばバイエルのトップはワインの大エキスパートでした。旭化成で常務をやっていた方はフルートの名手でした。クリエイティブな人には何かそういう文化的なことがあるのですね。

この間NHKの番組がありまして、「暗黒エネルギー」というのがあるのです。暗黒エネルギーを見つけるか見つかないかで宇宙が膨張しているかいつか消失しているかといったことがわかるらしい。これを見つけようということで二つのチームが必死になって争っていた。そしてほとんど同時にその正体を解明してこの二つのチームはノーベル賞をもらいました。

その競っていた二人のサイエンティストは今どうしているのか。その中の一人は、自分の家の裏庭にワインヤードをつくってブドウ酒を作っていました。もう一人はお孫さんにヴァイオリンを教えていました。やはりクリエイティブなマインドというものは、そういうバックグラウンドから出てくるのです。ですから、個人だけをとって、文化の力は自分の生活を豊かにすると同時に、一人一人のクリエイティブな力をバックアップしてくれる。

だから美術館に来なさいと私は言っています。子供の時から美術館で育った子は良い大人になりますから。社会ということを考える時に、これを考えていただきたい。

それに加え、文化の社会的な力についても2つのことを考えたいと思います。一つは文化は国の立ち位置を決めます。二つ目は、文化は世界の異文化同士の相互理解を深めます。

まず、文化は自分の国の立ち位置を決める、ということを考えてみたいと思います。例えば、司馬遼太郎さんの小説を見てみると、日本が明治から第二次世界大戦までの間、世界の中である程度尊敬される国として存在した背後には、日本人は約束を守る、ルールを守る、卑怯なことはしない、勇敢である、そういうバックグラウンドがあると思えます。司馬遼太郎さんはそのことをよく仰る。これは今に始まったことではありません。先ほど吉備真備の話をしました。吉備真備が中国に行って何をしてきたか、文化を勉強してきたわけですね。それから朝鮮通信使が日本に来まして、広島県に鞆の浦というところがありますが、この鞆の浦には日本中から学者たちが集まってきて、そこで論語を論じ、漢詩を論じ、学問的な大シンポジウムが開かれました。

国と国の交わりには文化のはたす役割が大きいのですね。

例えば、こういったことがあります。矢代幸雄先生は、美術の関係の方はよくご存知でしょうが、ポッティチェリ研究家、明治生まれの美術史家です。この方がイタリアで色々トルネッサンスの美術品を見て日本に帰ってきたらまず奈良に行くと言っておられます。そういう方が昭和10年代にボストンにおられました。その頃のアメリカの日本に対する感情というのは非常に険しかった。道を歩いても「黄色いジャップがいる」と指をさしていわれる、とても居心地の悪いものでした。そこに吉備真備が遣唐使で唐に行った様子をえがいた絵巻物（吉備大臣入唐絵巻）がボストン美術館にいて展示をされました。矢代先生は、これに対してアメリカ人がどういった反応をするかとても心配して、東洋のサルが変なものを作ったと悪口を言われたらとても悲しいと思って見に行かれたら、あの険しい対日感情を持ったアメリカ人たちが、「これは何と素晴らしいのだ」と口ぐちに話してくれていた。この一巻の絵巻物がこの険しいアメリカで、日本のために友人を作ってくれている、このことに私は胸が熱くなりました、ということを書いた矢代先生は書いておいでです。

実際にそうなのだと思いますね。こうして日本の友人になったアメリカ人は、第二次世界大戦を防ぐことはできなかったけれども、少なくとも京都や奈

良が破壊されることは防いでくれたに違いない。倉敷もたぶんそうだろうと思います。そして戦後のアメリカの占領については色々な想いがあると思います。私もあります。ただ世界史上の占領軍の中では寛容な占領軍であったと言っていいと思います。その背後には日本という国、日本文化に対する色々な思いと理解があったに違いないと思います。そのことが戦後の日本の対外文化政策にもつながります。

日本のミュージアムの大きな活動として、戦後、昭和20年と30年代の日本が戦争の荒廃から立ち直ろうとしている真っ最中に日本の文化関係者は何をやったか。日本の美術を世界に巡回させました。ヨーロッパとアメリカで日本の美術の大展覧会をやりました。だいぶ前ですが、興福寺の阿修羅像が海外に行って話題になりましたが、終戦直後のこの時期に多くの国宝を選びすぐって、世界を巡りました。そのことで敗戦国・日本に対する世界の眼差しがガラッと変わりました。

文化は本当に国の立ち位置を決めてくれるのです。そういう力があるということを私達は考えなくてはならないし、その力をものすごく利用したのはフランスです。

先ほどワインの話をしました。ワインと言ったらフランスですが、イタリア人に言わせたら、あれは俺たちが教えてやったのだと言いますね。ギリシア人に言わせれば、あれは私達が教えてやったのだと言いますけれども。美術の面でもフランスは大国ですが、実はエコール・ド・パリに集まった絵描き達にフランス人でない人が多い。だけれども美術はフランスということを世界に対して存在感を強く示していた。

文化の力を安全保障のために使ったのはオーストリアです。オーストリアという国は東西対立のころ、東ヨーロッパに飛び出していました。安全保障上、ものすごい問題がありました。そこで二つのことをやりました。まずウィーンの文化的価値というものを世界にPRしました。国立オペラ、美術館、寺院まで含めて。それと同時に国連機関を誘致してきた。ですから今、イランの原子力の問題で、IAEAが話題に出てきますが、あれはウィーンにあります。そういった国際機関と文化的価値を世界に強調したことによって、ただ一つ東欧世界を飛び出しているオーストリアは、自分の国のアイデンティティを守り、独立を守り、そして立ち位置を決めた。

文化は国の立ち位置を決めます。そのことを忘れ

てはいけません。そのために、フランスはルーヴルを作り、ポンピドゥー・センターを作りやってきたわけです。そして今、フランスは何をやっているかという、ケ・ブランリ美術館を作りましたね。ケ・ブランリというのは、「フランス人はこんなに素晴らしいものを描きましたよ」ということを見せる美術館ではないのです。世界のプリミティブ・アートを集めている美術館です。大原美術館もケ・ブランリにいくつか、芹沢けい介とか色々な作家の作品を送って展覧会をやったことがありました。

フランスは、「私達は自分たちのフランス人の作品を誇るだけではありません。イスラムの世界も、ヒンズーの世界も仏教の世界も東西南北のアメリカもオセアニアも私達は一生懸命理解しようとしています。」というイメージを発信しています。ケ・ブランリはそういう情報を世界に発信しているに違いありません。意図していたかとはともかくとして。そういうことで文化を利用して、フランスは自分の国の立ち位置を補強しています。

文化は決して国策の召使いではありません。これは私達美術館の経営者はいつも思っています。けれども私達がそういう文化的にも人類にとって価値ある活動をしているということは、世界に対して何かのアピールがあるだろう、と思います。

ですから、「文化・美術が生まれ・働くお手伝い」の働くという中には、そういうことも入っているのではないかと思います。個人のためには生活のクオリティを高める、そして、一人一人のクリエイションのエンジンになる。そして、社会のためには、世界との多文化理解を深めると同時に国の立ち位置を決める。そういう風なお手伝いをするのがミュージアムであるという認識で大原美術館はやっています。

レジュメの2-2に「使命の宣言」と「行動規範」についてとありますが、大原美術館の館員はみな、カードを持っています。このカードには使命の宣言が書いてあります。もし高階館長にお会いする機会があったら、カードを持っていますか？と聞いてみて下さい。たぶん持っておられるはずですよ。

大原美術館が考える美術館の使命は5つあります。まずアートとアーティストに対する使命。ですから、私達はアーティストに対するクリエイション支援の活動はいつもやっています。と同時にアートに対する使命がありますから、これを次の世代に伝えていく使命があります。ですから、美術館にとって収蔵

庫というのはものすごく大事です。収蔵庫をいくら綺麗にしてもお客さんは一人も増えません。お客さんは一人も増えないけれども、何億もかけて収蔵庫を作るのは、アートに対する使命があるからです。ですから先程も言ったように入館者数が一番大切な指標ではありません。使命をどれだけ果たしているか、これが最大の指標です。

二番目に全ての鑑賞者に対する使命があります。三番目に、その中でも特に子供たちに対する使命があります。四番目に地域に対する使命があります。これはものすごく大事です。うちの高階館長は、地域に対する使命についても本気ですから、面白いですよ。東京に行ったらものすごくいい先生ですが、倉敷に来られたら、子供たちとニコニコ遊んでおられます。それから五番目に日本と世界に対する使命があります。

大原美術館の使命の宣言では、私達の使命感を可視化する、見えるようにするということが大事です。使命の可視化というのは、公益価値経営の基本です。この使命を達成することが、私達の公益価値を高めることとイコールであると私達は信じています。これが私達の美術館の信念です。

この5つの使命を達成することによって公益価値は高まる、社会の価値は高まる。だからこの価値観を私達は可視化して見えるようにして、それに対してどれだけ頑張って高める実績を上げたかということ私達は世間に問うということをしします。

これがディスクロージャーです。あるいはアカウンタビリティです。非営利公益組織にとって世間に対する説明というのは、どれだけ儲かりましたかではなく、自分たちの価値観をどれだけ実現したか、ということ世間に説明をする。それを説明するために価値観を見えるようにする、可視化するということが大事なのです。その可視化したものが「使命の宣言」と「行動規範」です。

行動規範というのは、例えば政治のために利用しないとかいったことが書いてあります。ミュージアムの経営にも規律が大事です。よく、ミュージアム・マネージメントの中で問題になるのが、ボランティアの問題があるかと思っています。大原美術館ではボランティアにも規律を求めています。善意でやってくれているので自由にやってくれていいよ、なんていうことは言いません。善意であろうが、規律を守り機能をきっちり果たしてほしい、そういう姿勢でやっています。そういう意味でも行動規範を可視

化することが非常に大事です。

そして、レジメ2-3「多文化理解の装置としての、倉敷と、大原美術館」については、一つだけ申し上げますと、21世紀はもっとお互いが理解しなければ、人類にとってとても住みにくい地球になってしまう。地球が人類にとって心地良い生存の舞台であり続けるためには、今のような多文化の間の相互誤解、相互曲解で色々なところで悲惨なことが起きているような地球ではいけない。

大原美術館もささやかですが、ローマやパリで棟方志功展をやったり、あるいは先程のケ・ブランリに作品を出したり、世界とつながりを保とうとしています。ミュージアムが入場者数ばかりを気にせずに、多文化理解の装置としてどれだけ働いたか、そういうことを自分の問題意識として持っているということであれば良いのだと思います。

レジメの最後に「世間様は何もわかってくれない」と書いてあります。皆さん、入館者数はどれくらいだということに気がされますが、だけれどもそれより大事なものがありますよ、ということをもっと理解していただきたいのです。私達ミュージアムの経営者は、ミュージアム・マネージメントのプロフェッショナルは、そのことをしっかりと頭において、経営をしたいです。

入館者数は、大切ですが、あくまでも「二番目に大切」なことです。一番大切なのは、ミュージアムの使命であり、価値なのです。そのことはなかなか世間にはわかってもらえないかもしれない。けれどもその姿勢を堅持するということが、私たちのミュージアムが劣化せずに今後も経営を続けていく一つの要件だろうと考えております。

以上で私のプレゼンテーションを終わります。ありがとうございました。

〈指定討論〉

『社会のためのミュージアム ～心に残る新たな表現～』 シンポジウムの趣旨

小川 義和

【シンポジウムの背景と構成】

日本ミュージアム・マネジメント学会は、今後3年間のテーマを「社会のためのミュージアム」とし、活動を展開することとしている。これまでの3年間は、「ミュージアム・リテラシー」というテーマのもと、利用者の視点に立ったミュージアムの目指す方向性を探究してきた。本年度は、これをさらに発展させようとするもので、ミュージアムにとって最も基本的な機能として「心に残る新たな表現」を取り上げ、これをサブテーマとしている。

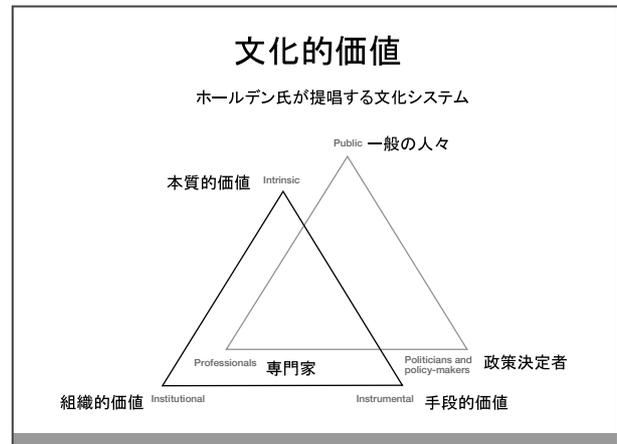
本シンポジウムでは、大原謙一郎氏（大原美術館）の基調講演「社会におけるミュージアムの価値」を踏まえ、「社会のためのミュージアム—心に残る新たな表現—」として具体的な事例と「今後のミュージアムの在り方」についての話題提供に基づく議論を展開した。特に震災後に明らかになった「地域社会の人と人とのきずなに寄与するミュージアム」や「科学技術社会におけるミュージアムの在り方」など、このような現代的課題に答える「新たなミュージアムの在り方や価値」について3氏から話題提供していただいた。

- 「市民と博物館の多様性が認められる社会の構築にむけて」五月女賢司氏（吹田市立博物館）
- 「人を育て、人をつなげ、文化を育む～科学文化の担い手育成事業～」長澤友香氏（静岡科学館・く・る）
- 「東日本大震災後のミュージアム・マネジメントの役割～社会をデザインするミュージアム—心に残る新たな表現とは」弓場哲雄氏（小林工芸社）
各パネラーの講演内容については、別途紹介し、本稿では、シンポジウムの趣旨について報告する。

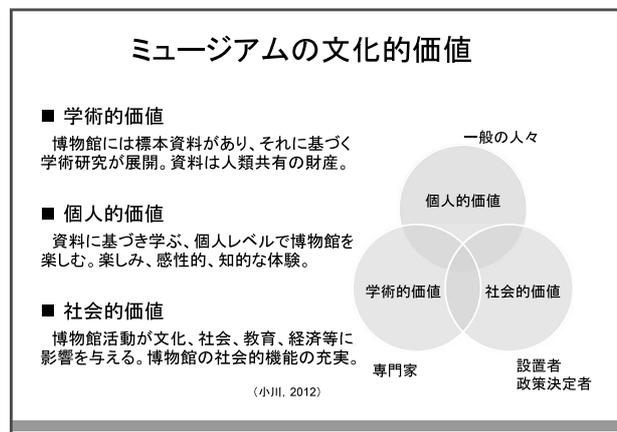
【ミュージアムの文化的価値】

大原氏の「社会におけるミュージアムの価値」を踏まえ、改めてミュージアムが社会や個人に対し、どのような価値を表現できるかを考えてみたい。社会における文化的価値については、Holdenが、三つの価値を提案している。すなわち、人々が文化を楽しむ本質的価値、専門家間で認められる文化の組

織的価値、政治家や政策決定者によって活用される文化の手段的価値である（スライド1）。



スライド1



スライド2

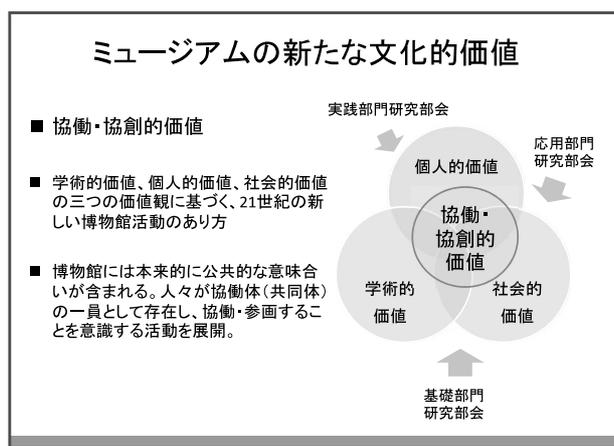
ミュージアムは、人類共有の財産である資料を収集し、保管し、将来に継承するとともに、資料に基づく調査研究を行い、これらの成果をもとにして、一般の人々に対し、資料の公開・展示と関連する教育活動を営んでいる。ミュージアムは、社会の中の、社会のための文化装置であり、自ずと文化と同様な価値構造を持っていると考えられる。つまり、個人がミュージアムを楽しみ、知的な体験をするという個人的価値、ミュージアムが貴重な標本資料を集積し、調査研究の成果を発信している学術的価値、ミュージアムの活動が社会、経済、文化、教育に影響を及ぼす社会的価値である（スライド2）。

【ミュージアムの新たな価値の表現】

震災後、私たちには社会的課題に対して、人と人、人と社会のつながりの中で協働、協創して、解決することが求められている。このような課題は、公的

な機関だけでは解決することは困難で、市民一人一人の参画とそれぞれの意見に基づいた合意形成が必要である。それは、一人一人が課題に対し、自立的に判断し、対話を通じて、合意形成し、協働して解決していく社会の実現への過程である。このような状況の中で、歴史博物館、科学博物館、美術館、動物園、水族館等のミュージアムがどのように振る舞い、社会的役割を果たすべきであろうか。

ミュージアムは三つの基本的な価値のバランスを取りながら社会的役割を果たすことが重要である。ミュージアムとその取り巻く環境によってどの価値に比重を置いていくかは異なってくるであろう。さらに、震災後の社会を考慮すれば、私は、これらの価値に加え、市民とミュージアムの協働を通じて新たな知やサービスを創造するという、協働・協創的価値が求められていると考える。私たちは、課題に対し、知を共有し、創造する。その結果、個人は成長し、社会は成熟していく。ミュージアムは、その市民の対話を促し、知の共有と創造の過程に価値を見出し、表現することで、個人の成長を社会に還元し、その文化的成熟に貢献することができるだろう。ミュージアムは、社会における知の協働・協創のプラットフォームの役割を果たすべきである。これは、従来の個人的価値、学術的価値、社会的価値の三つの価値観に基づく、ミュージアムの新たな価値の提案である（スライド3）。



スライド3

まずは、ミュージアムを取り巻く課題に対し、個人的価値、学術的価値、社会的価値を主張する、一般利用者、専門家、設置者等の関係者が対話し、協働体の一員として存在することを意識することが重要である。本学会の実践や調査研究においても、各関係者が時には批判し合い、三つの価値のバランス

を取りながら落としどころを見出したり、協働して新たなサービスを創造する事例が見られる。ミュージアムは、関係する人々が地域の協働体の一員として協働・参画することを促すことができる。その際、ミュージアムの館種、国・地方の立場、社会的立場、国境を越えて、社会と世代をつなぎ、理念を共有し、課題に対し協働し、価値を創造することが重要である。

本学会の基礎部門研究部会・実践部門研究部会・応用部門研究部会は、それぞれミュージアムの学術的価値・個人的価値・社会的価値を議論してきたと位置づけられる。今後もそれぞれの立場からミュージアムの価値を議論し、表現するであろう。そしてシンポジウムや研究会を通じて、研究部会・支部会や会員個人によって実践され、議論され、表現されたミュージアムの価値を各会員が共有し、新たな価値を創造することを期待したい。

【参考文献】

John Holden, 2006, "Cultural Value and the Crisis of Legitimacy: Why culture needs a democratic mandate".

<http://www.demos.co.uk/files/Culturalvalueweb.pdf?1240939425>, アクセス日 2012/5/31

〈指定討論〉

市民と博物館の多様性が認められる社会の構築にむけて

吹田市立博物館 学芸員
五月女賢司

1. 問題意識

博物館は、今後さらに社会のために役立つ存在となり得るか。これは、特に東日本大震災後の現代博物館学にとって重要な問いである。しかしながら、市民の価値観が多様であるばかりでなく、博物館のあり方も多様であり、よってその役立ち方も多様である。それが日本における博物館法の改正や評価などの問題を複雑化させている。とはいえ、そうした複雑さ＝多様性が認められる社会が構築されることによって、社会において多様な価値観が育まれる。

多様性が認められる社会とは、自らが何者かを知る社会＝自らの固有性や多面性を知る社会である。また、人間が総じて不得手な、他者を尊重する社会＝

他者に対して寛容な社会である。それは、個人レベルから国際レベルに至るまで、また博物館レベルでもいえることである。これらの問題をより深く認識するためには国内的視点だけでなく、国際的な視点から博物館のあり方を考える必要がある。

本稿では、アフリカ、西インド諸島、中東世界、大阪・吹田市域の、特に地域の歴史や文化の固有性を大切にす地域博物館や、それに特徴が近似する国立や国立に準じた博物館などの事例から、地域社会と博物館との関係性を概観する。そのことで、「マイノリティー社会」対「マジョリティー社会」、「途上国」対「先進国」、「市民」対「行政」、「政治家」対「公務員」といった単純な図式による対立軸ではなく、様々な立場や思考に基づいた価値観が多く存在するこの多様な世界／社会において、地域社会と博物館がいかに新たな関係性を構築することができるのか、本稿をそのあり方についての筆者の議論の嚆矢としたい。

2. 博物館にまつわる多様性についての先行研究

地方分権や地域主権、マジョリティー社会や行政等における意識や施策の変化、またそれらと影響関係にある少数民族や障がい者コミュニティなどのマイノリティー社会を含む様々な小規模社会・組織、さらに市民社会の発言力増大と自己意識の覚醒は世界的潮流である。

国立民族学博物館の吉田憲司も指摘するとおり、1980年代以降の欧米の民族学博物館での「展示される側」の参加を求めた展覧会の試みは、それに関わった当の民族のあいだに自らの歴史への覚醒をうながし、彼らの文化的アイデンティティを高める結果となった。こうした動きをうけて、近年、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカの各地で、「他文化」として「展示される側」だった個々の民族による「自文化」の展示や、民族単位での博物館建設の動きが活発化している（吉田 1999：200）。

こうした考え方は、民族博物館に限らず地域の歴史民俗系博物館にも当てはまる。つまり、「自文化」展示をする地域博物館において、市民は「展示を見る側」であるだけでなく、「展示される側」でもあったものが、近年「展示をつくる側」にも回り始めたのである。近現代史や民俗学は今を生きる人々の社会や文化をも対象とした学問である。また、近現代史を生きてきた人々や文化の担い手などの当事者達が現在も地域で生活をしていることが多い。このような意味において、企画立案から展示資料の選定を

含めた共同作業を、地域社会と共に行う住民参画型博物館を志向したり、地域住民が展示観覧などの形で博物館を利用する際に、自らの過去の経験と展示内容を重ね合わせ、より身近に感じてもらえる博物館を整備したりすることが今強く求められている。

また、国際博物館会議（ICOM）の国際委員会の一つである地域博物館国際委員会（ICR）の刊行物、『Regional Museums and the Development of Communities』で当時の委員長 Goranka Horjan は、以下のように力説する。地域博物館は小規模で職員数や予算も少ないなど、困難に直面していることが多いが、そうした地域博物館が核となって、様々な形の地域遺産を保存することで、世界の多様性の保護に貢献することが必要である。そして、そのためには、地域博物館が地域コミュニティと協力し、様々なステークホルダーとの強いつながりを構築するべきである（Horjan 2009：9）。

吉田と Horjan の主張は、小規模な社会や組織の存在が重要性を増している今の時代の要請に合った博物館のあり方を議論しているという意味において重要である。一方で、世界に広がる人々の文化や価値観の多様性を保証し尊重するためのこうした動きが、実は、自らの固有性を強く主張するあまり、自己の優位性と他者の劣位性を主張する議論にすり替わり、社会の一部に混乱をきたす場合がある。こうした混乱を避けるために、自らの固有性を尊重してもらおうとする社会や組織の動きは、世界・社会の多様性を尊重する動きと表裏一体であり続ける必要がある。また、それは自らの多面性をも尊重する動きである必要がある。自らのマイノリティー性や市民性を強く打ち出すことにより自分達の主張を強める、一部の戦略的本質主義に基づく言動は、結局のところ、自らを小さな殻に閉じ込め、身動きが取れない状況を生み出すことがあるのである。しかし、そうした状況から脱するための動きや提案も試みられつつある。以下、自らの固有性を主張する社会や組織の動きの中から多様性の尊重につながる動きが芽生えつつある事例やそのための提案を紹介したい。

3. 世界各地の博物館の事例

アフリカのザンビア共和国や西インド諸島のセントクリストファー・ネイビスなど、“アフリカの人々”が暮らす地域の博物館では、自己意識の覚醒により、近年、自らの歴史・文化を表象する権利を自らが行使する作業が進行中である。

1964年に英国から独立したザンビアでは、国家統

一の象徴として、ルサカ国立博物館（1996年開館）など4国立博物館が、国内の多様な民族についての民族誌展示や、対英国の民族解放や独立運動といった政治史展示を中心に国家主導の博物館運営を行っている。ここでは国家統一という大義があるため、展示という形で国内各民族の固有性と多様性の尊重を前面に出すことは難しい側面がある。つまり、一国家一人民という融合的な形の「固有性」をナショナルスティックに打ち出すことで、国民の精神的な国家統一の完成をもくろむ。しかし、教育担当官によって、孤児院や小規模ビジネスを営む女性などとの協働による様々なプログラム開発が行われるなど、多様な社会の調和のための試みが始まっている。

また、1983年に英国から独立したセントクリストファー・ネイビスでは、17世紀より200年以上もの間、奴隷貿易や奴隷制度が続いたため、現在でも人々の心にその記憶が強く残り、子ども世代に語り継がれている。同国は経済的には発展しつつある国ではあるが、人々の心の中には歴史や文化に対する渴望感のようなものがあり、それらを何とか取り戻したいという意識が非常に強い。そして、自分達が文化的に取り残されているのは、祖先の共通体験として奴隷貿易や奴隷制度の被害者という史実が存在するからだという気持ちが強いから、彼らは一丸となって文化運動に取り組むのである。そうした市民運動を支えているのが、国立に準じた機能を託され市民団体が運営をするセントキット博物館（2002年開館）である。2007年は大西洋奴隷貿易廃止200周年だったため、ユネスコの支援により様々な行事が開催されたが、セントキット博物館でも7月から11月まで、奴隷の歴史を振り返り、新たな歴史・文化を創造する取り組みとして、特別展「アーツ・アンド・クラブ展—我々の芸術を通じて祖先に敬意を表す—」を開催した。これも自文化を再認識・再構築する一連の文化運動の一つに位置付けられる。セントキット博物館は、ボトムアップの市民運動から博物館ができ、市民によって運営され、小さいながらも社会を動かす文化的原動力となっている（五月女 2009：14-15）。白人への恨み・妬みが、そうした原動力の根底にあることは否定できないが、善意の白人との協働をさらに進めるとともに、世界中の黒人の活躍を顕彰することで自己の黒人としての存在を肯定する動きが進むなど、前進するための萌芽も見られるため、長時間をかけて建設的な文化運動に転換する可能性を秘めた事例と言える。

大阪府にある吹田市立博物館でも特別展をつくる

際、公募によって集まった市民が実行委員会を組織するなど、市民が自らの歴史・文化を表象する本格的な市民参画型展示が、2006年から始まっている。これは、吹田市立博物館の前館長・小山修三の、市民に開かれた本格的な参画型博物館を目指す姿勢から開始されたものである。まず、2006年の「千里ニュータウン展」を皮切りに、「'07 EXPO '70 —わたしと万博—」展などが開催された。小山によれば、学芸員一人では視野が狭くなるため、多様な「うるさい市民」に開かれた博物館にすることで、時代のニーズを的確につかみ、創造的な手法が編み出されるという。企画会議の中では、市民同士の飛び交う石＝意思を避け、待ち続けると意見が5～6にまとまる。さらに待つと、それらの意見が自然にまとまり、育っていくというのである。これは、多様性を尊重する市民意識の芽生えといえるのではなかろうか。しかし、課題も見える。市民からのアイデアが枯渇しつつある一方、頭でっかちになり、市民の学芸員に対する意識が、パートナーというよりはむしろ市民が「主」で学芸員が「従」の主従関係と捉えられる節がある。時に、自己意識の高さゆえ他者を尊重する意識が遠のく傾向にあるのではなかろうか。コミュニケーションと信頼関係をより深めること、また、互いの立場と博物館活動の進め方の方向性についての相互認識を早い段階で深めておくことが必要であろう。また、多様な当事者の主体性が実現された時、展示内容の客観性・信頼性の確保や親しみやすい展示の実現が難しい側面があるなどといった課題も残る。とはいえ、これらの動きは、歴史・文化の展示の権利を当事者の側が獲得したという意味において重要である。

平和構築のために貢献しうる博物館のあり方としては、パレスチナ自治区の博物館がパレスチナ同胞のために果たす役割について考え実践するなどの取り組みが考えられる。これを中東諸国において展開させるために筆者が国際協力機構（JICA）に提言した形も一考されたい（五月女 2011：35）。

シリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ自治区には現在、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が援助及び人間開発を行うパレスチナ難民キャンプが点在している。彼ら難民の多くは、数十年もの間「祖国の地」を心理的・物理的に離れて生活をしている。「仮の地」で生まれ、子どもから大人になっていく人々の心の拠り所として、彼らが政治的意図から離れたパレスチナの歴史・文化を知ることが重要であり、そうした歴史や文化の承認無し

には真の意味での平和構築はなし得ないといえる。それ無しに政治的和解だけを求めれば、難民たちの歴史・文化が抹消されてしまうことになりかねず、逆に政治的混乱を招くきっかけにもなり得る。同自治区の博物館が、同自治区内で歴史教育に携わる学校教員やシリア・ヨルダンの博物館関係者らと直接的・間接的に連携して、博物館資料を持参する出前授業や巡回展を展開するといったことも可能ではなからうか。難民であるパレスチナの人々に、自らの歴史・文化に誇りを持つことで、反イスラエルの意識を植え付けるのではなく、むしろ他者に対しても寛容な心を持ってもらうことにつなげる展示や教育プログラムをつくっていくことは可能である。そのために、近隣諸国・地域の境界線を超えた博物館ネットワークの構築が急がれる。

4. 結論

ここまで概観してきた通り、世界には市民の多様な文化や価値観が存在し、その土地、土地で多様な博物館が存在する。だからこそ、市民も行政も博物館や博物館施策に対して一つの価値観に基づいたまなざしを向けないことが肝要である。また博物館現場の職員は、バランス感覚を持ち、ボランティアなどの市民と共に多様な博物館活動を展開することが、次世代を担う子ども達を育て、様々な可能性を秘めた多様な社会を築く上で重要となる。そのことが、市民の価値観の多様性を保証し、地域社会において豊かな文化が育まれることにもつながる。

このような視点から博物館学を考えると、博物館学とは必ずしも汎用性の高い事例を学界や現場に提示し広める学問というだけではなく、博物館と地域社会の関係の多様なあり方を研究することで、各人に一番身近な博物館の立ち位置＝固有性と多面性を認識し、今後の博物館運営に生かしていくための学問だということも出来る。

それぞれの博物館の立ち位置を明らかにすることは、ネットワークを形成する上でも重要である。博物館ネットワークの構築は、平和構築のみならず、特に小規模な地域博物館同士の相互補完性を確保する。1館1館にできることは小さく内容も限定的かもしれないが、多様な館種が集まり、それぞれができることや抱える人材などを、ネットワークを通じて「見える化」していけば、地域社会の実態や要望に即したネットワークの軽い多様な活動をボトムアップ型で展開できる。このように多様な地域博物館同士の横のつながりを大切にすることで、より効果

的かつ広がりのある多様な博物館活動が地域社会のために展開できるのではないだろうか。

社会状況の変化や紛争・自然災害によって失われた人間の絆は、様々な歴史・文化資源を有する博物館の側面支援で元に戻ったり、新たな形で構築されたりする。自己の固有性と多面性を自ら尊重し、他者のそれを認める多様な社会の構築のために、そして地域社会全体の文化的豊かさと、感情のぶつかり合いではない根拠ある批判的思考の向上のために、博物館ができることは大きい。

[参考・引用文献]

- Horjan, Goranka (Ed), 2009, *Regional Museums and the Development of Communities*, ICOM, The International Committee for Regional Museums
 五月女賢司 (2009) 「市民とともに育つミュージアム」『ミュゼ』アム・プロモーション、90：14-16
 五月女賢司 (2011) 「中東における博物館活動の現状・課題・展望について」『地域別研修「中東博物館」フォローアップ調査団報告書』JICA大阪国際センター、32-36
 吉田憲司 (1999) 『文化の発見』岩波書店

<指定討論>

人を育て、人をつなげ、文化を育む ～科学文化の担い手育成事業～

静岡科学館 次長

長澤 友香

1 はじめに

静岡科学館は平成16年の開館以来、科学する面白さや不思議さを伝えることで、市民の科学への興味・関心を大切に育んできた。当館の特徴である「Hands-on (ハンズオン)」という考え方を重視し、展示物に内在しているそれぞれの科学的意味を引き出す科学コミュニケーションプログラムを開発し、参加・体験による科学普及効果が高まるよう努力してきた。常に来館者の年齢等の発達段階を考慮したコミュニケーションを心がけ、展示物や実験・観察・工作等に内在する科学の本質を伝えている。その効果的な実現のためには職員の科学コミュニケーション能力の向上が不可欠であり、これまで職員研修においても扱ってきた。その結果職員のコミュニケーション

スキルと館運営への参画意識が高まり、様々なテーマに対応して主体的に表現・伝達のスキルを磨く機会が広がっている。「受容と共感」の気持ちを大切に、来館者の立場やニーズに合った柔軟な対応ができるよう職員研修を重ね「温かな対応と高いモチベーション」が当館の自慢にもなってきた。

こうした中、平成22年度より独立行政法人科学技術振興機構の「ネットワーク形成（先進的科学館連携型）」の採択を受け「静岡のひと・もの・ことに生命を吹き込む科学技術文化の醸成事業」の事業展開を進めている。本事業を核にして最先端の科学技術を含めた科学の不思議さや面白さを多くの市民に伝えるために、様々な立場での人材育成を目的とした事業を意図的に実施している。そして育成した人材の活動の場を、企画展、実験・工作ワークショップ、科学教室、講演会、ギャラリートーク、サイエンスカフェ等、多様な形態の事業として設定している。自然災害や高度に発達した社会基盤の脆弱さ等により、科学に対する漠然とした不安感や無力感が増し、多くの情報が錯綜し混乱や不安が生じている市民に対して、今博物館等の施設が重要な役割を担っていくときである。人材を育て、育てた人材が市民に対して積極的に科学コミュニケーション活動を行う過程で、徐々に自然な形で自然科学・科学技術が文化として地方に定着していくであろう。そのシステム形成をめざし事業を展開している。

2 科学コミュニケーターとは誰がなりうるのか ～人材育成の視点から～

今回の提案は「科学系博物館を取り巻く様々な職能・立場の方が科学コミュニケーターとして機能し得る」という考え方に基づいている。様々な立場の人を意図的に育て、社会の中において、個々の立場で機をとらえた科学コミュニケーション活動を展開していく機会を創出することが理想であると考えからである。日常生活の中に潜む科学の価値や役割を、個々の手法で、わかりやすく、身近なものとして市民に伝えるスキルを有した科学コミュニケーターの育成を行うことを目的として以下のような事業を展開している。

(1) 科学系博物館施設職員の育成

科学系博物館等の施設において、経験年数の浅い女性職員が、実験ショー等の担当になり実演している館が多い。其々個人が有するスキルの中で奮闘しているのだが、不安や悩みも多く交流や研修の場を

欲している。こうした比較的経験年数の浅い女性職員を対象に、科学コミュニケーションスキルの向上をめざした効果的なプログラムの開発と共有、個々のコミュニケーションスキルの向上、施設職員同士の相互のネットワーク形成と拡大を主たる目的とした女性のための養成講座を展開している。この研修会は本年度で3回目を迎え、全国から54名の女性参加者があり、熱気あふれ、温かみのある研修会となった。科学系博物館において、直接来館者に接する機会の多いこうした職員のスキルアップの機会が多様に確保できることが理想である。

(2) 科学コミュニケーターの育成

地域における大規模な科学イベントを定着させていくためには、科学イベントを企画し、運営できる人材が必要になる。科学を語り、伝えていくことのできる人同士が目的を共有し、協働し、企画をつないだとき、そのイベントは大きな主題を持ち市民に語りかけていくであろう。科学コミュニケーションのスキルを持ち、実践力・行動力・協調性を兼ね備えたひとを育成し、コミュニティを形成することこそ、地域に科学イベントを定着させる上で重要である。



SC育成講座の光景（科学トピックスを発表しよう）

(3) 科学館ボランティアの育成

博物館施設において、その目的を職員と共有し、主体的に科学館事業に参画する人材を育成することが重要である。科学館職員のみならず、科学コミュニケーターや科学館ボランティアを育成・活用し、市民の科学への興味・感心を伸ばすための多様な事業を展開することは、「市民参画・市民協働」の開かれた博物館運営には重視すべきことである。今後もこの理念を柱に、科学館ボランティアの科学コミュニケーションスキルの向上を目指し研修の場を設定していく。

(4) 教員の育成

教員こそ、幼児期・児童期・青年期において、その成長発達にあった科学コミュニケーション活動を展開できる重要な人材である。その主たる活動展開は「授業」において行われるため、教員の授業力向上を目指し、体験的な活動（フィールドワーク、実験・観察等）を軸にして、問題解決的な学習を実践できる教員を育成する。また博物館等の有する教材教具を効果的に活用し、質の高い授業を提供できる教員を育成する。教員と博物館の強固な連携基盤の構築を目指す。

(5) 高校生の育成

高校生が自ら企画し、科学の楽しさを子供たちに伝える活動を通して、科学への興味・理解・プレゼンテーション能力を向上させるとともに、科学コミュニケーション活動を行う高校生同士の交流を行い活動の活性化をねらう。高校生が科学と真摯に向き合い、科学的探究を深めつつ、その価値を仲間に関わりやすく伝えることで、新たな価値を発見し活動の広がりが期待できる。高校生自身にとっては進路選択に繋がるキャリア教育の側面からも意義が大きい。

(6) 小学生・中学生の育成

小中学生が博物館事業について具体的にアイデアを提案し、事業に参加することを通して、社会に主体的に参画できる人材を育成する。児童・生徒も社会に参画し提案、行動できる機会を得ることで、社会性が育ち、市民参画への意識が芽生えていく。子どもも「小さな市民」として社会での役割を与えることで、市民とともに創造・進化していく博物館を目指したい。

3 人をつなげ、文化を育むという視点から

(1) 自然・科学系市民活動のつどい

自然や科学に関する分野で、自ら楽しみながら探究・普及に取り組む活動家や市民グループが、互いに活動を発表し合う場を創出し、情報交換による活動の活性化と、人的ネットワークの構築、また一般市民に向けた活動の広がりなどを促す。

(2) 「しずおか科学技術月間」

実践者同士の連携を深める場を創出すると共に、社会・生活との関わりやまちづくりの視点を取り入れながら市民と科学技術の専門家とをつなぐ場も設

けることで、静岡における科学技術文化を醸成させる。本年度第2回目を終了し「科学コミュニケーション活動実施への意識の目覚め、活動の拡大・定着・連携」という実施側の視点、また「意識を持って能動的に参加する」という参加市民側の視点で、双方に成果が広がっている。

4 おわりに

「ミュージアム～心に残る新たな表現～」という大きなテーマの中での討論であったが、「今後いかにして市民との協働、協創が可能であるか」という視点で協議が進んだことは、今後の科学館運営を考える上でも貴重な機会となった。将来的な展望の中で、市民のニーズを的確に把握し、社会的な情勢の中でその変化に対応した博物館の役割を自覚し、市民が21世紀を豊かに生きていけるよう展望を持って、館の運営、事業展開にあたりたい。

〈指定討論〉

応用発展研究部会からの問題提起

東日本大震災後の

ミュージアム・マネジメントの役割

社会をデザインするミュージアム

—心に残る新たな表現とは、

弓場 哲雄・塚原 正彦

1 問題意識

3. 11の東日本大震災とそれを起因として発生した福島原発の危機は、日本社会に史上空前の劇的な事態をもたらした。今日、私たちには、「水と安全はタダ」で、「金銭価値」と「科学技術」を過信し、「豊かさ」と「便利さ」を享受してきた生活価値とライフスタイルそのものを劇的に変えることが求められている。近代の文明、資本主義を超える、百年を超える夢やビジョンを想起した未来デザイン、すなわちふるさとづくりに着手しなければならない。

これから先の富の未来は、身の竹サイズで、一人ひとりが、新しい暮らしのカたちをつくる社会に転換していく。「人にやってもらう」から「自分でやってみて、その価値を共有」する新しい人間像＝生産消費者が主役になる地域資源を活用し家庭を基盤にした社会を再構築する活動からコトを起こす必要がある。

私たちは、このような一連のライフスタイルを「ふるさとモデル」と定義することとした。そして、「ふるさとモデル」のコンテンツを創造し、学びを実現し、人づくりを担う中核的な役割を果たすのがミュージアムである。

私たちは、上記の問題意識をもとに、ミュージアムを核にした社会デザインを設定し、次の実践研究を展開した。

2 研究テーマの設定

今回の地震で被災を受け、津波に襲われ、まちがすべて流されてしまった宮城県宮古市田老地区及び山田町を調査地域に設定し、ミュージアム活動による「ふるさと再生モデル」を開発し、それを実証するための実験を実施した。

3 ふるさと再生モデルのアプローチ

ふるさと再生ミュージアム活動については、次の3点を中心にモデルを設定した。

- ①ふるさとを復興するためには、人々を結びつけ、結集するコト起こしからはじめる。
- ②モノが失われた地域社会に、「ふるさとの記憶」を収集し、「ふるさとの宝物」を記録し、みんなで共有するミュージアム活動を支援提供する。

- ③ミュージアム活動をとおして、「ふるさとの宝物」に気づき、ふるさとへの思いを呼び起こし、人と人を結び、未来へ向けた取り組みを育むきっかけを提供する。

4 実証実験 東日本大震災の記憶を記録するミュージアム活動

以上のモデルを検証するために、東日本大震災による、モノが壊され、流され、マチの機能を失ってしまった2つの地域を対象に、人々の記憶に刻みこまれた「ふるさとの宝物」を探す地域資源調査を実施した。

(1) 事例調査の対象地域

岩手県山田町

- ①被災概要：人口17,000人、35m～40mの津波と火災で中心市街地は壊滅。760人死亡、2,762家屋が全壊（38.2%）、山田町住宅45%が被災。
- ②中心産業：リアス式海岸を利用した養殖漁業と小規模近海魚と農業が中心。大型商業施設、大型の工場はなく産業依存が少ない。小規模工場養殖漁業が中心で、人口減少も合併の機運はなく、

■ ふるさとの宝物を発見し、デザインする事業展開

- ①ふるさとには、暮らしや学びを豊かにする宝物（＝地域資源）がたくさん眠っています。
- ②みんなの知恵とチカラを持ちよるミュージアムプロジェクトを起動し、ふるさとミュージアムをつくります。
- ③“ふるさとミュージアム”を起点に、未来のふるさとの家庭と地域社会を担う“我が家の学芸員”や“ふるさと学芸員”を養成し、富を未来を創造します。



図1：ふるさとの宝物を発見し、デザインする事業



写真1 地域資源学芸員による調査と物語プレゼンテーション

100年持続したコミュニティが生きている。

- ③暮らしのスタイル：半農半魚の生産消費型の暮らし
- ④文化：各コミュニティに独自の虎舞があり、毎年神社に奉納されている

宮古市田老町

- ①被災概要：人口4,570人、35m～40mの津波と火災で中心市街地は壊滅。約200人死亡。
- ②中心産業：リアス式海岸を利用した養殖漁業と農業が中心。グリーンピアをはじめ、リゾート計画の失敗で、財政が破綻し、2005年に宮古市に合併。
- ③暮らしのスタイル：半農半魚の生産消費型の暮らし十公共事業（高さ10m、防潮堤24kmにわたって築いてきた防潮堤な



写真2 宮古市田老地区（破壊された防潮堤防

どの土木事業)

- (3) 岩手大人文学部と常磐大学塚原研究室が共同で実施

常磐大学塚原研究室が開発した電子学習システムによる地域資源学芸員の養成プログラムを岩手大学



人文学部で実施し、基本スキルを学習した学生を山田町及び宮古市田老地区の地域資源に派遣する。そして、その成果について、地域の生活者がふるさとの宝物について再発見を促すことができるコンテンツとして共有できるように物語化する。

5 地域資源調査の成果

地域資源学芸員としてのトレーニングを実施した岩手大学の学生が聞き取り調査を実施し、編集し物語化した。それらの収集過程から次のことが明らかになり、記憶を収集することの意義や効果を検証することができた。

(1) 希望を育む家政のチカラ

水産加工業を中心に半農半漁で暮らしてきた人々の暮らしは、一瞬のうちに流し去られ、現在でも、仮設住宅で、手元にあるわずかばかりの資産を活用し、生命をつなぐための基礎的な生活を送らざるおえない状況におかれている。

避難所や仮設住宅の生活は、すべて失った被災者の絶望と明日への不安で沈んだ空気になるのはいうまでもない。希望の持てない暮らしからは、絆も規範意識も薄くなり、乱れ、規律が崩壊する。

しかし、彼らは、バラバラになってしまった人やモノを結びつけ、未来への希望を育む「ふるさと」の不思議なチカラを用いることによって、人々から

不安をとりのぞき、明日をデザインする活動に向かわせることに成功している。

山田町の避難所では、ふるさとにあった漁師や農家の「自然の恵みを活かす知恵とスキル」「振る舞い料理の知恵とスキル」を持った女性たちが大活躍する。

日頃から近所つき合いをしてそれぞれの生活を知り尽くしている彼女たちが、避難所の衣食住をマネジメントした。

彼女たちは、漁師に、いまある船を使って漁にでももらうよう差配し、懇意にしていた農家に連絡をとり、旬の食材を調達する。力自慢の男たちを集め、水汲みチームをつくる。携帯は使えないので、口コミのできるあらゆるネットワークを使って、食器や材料を調達し、彼女たちが得意としているふるまい料理にとりかかり、それをもりつけしする。

手間をかけてつくる新巻鮭、夏に食べるうどん、海の幸と山の幸を楽しむ知恵、大きな台所と大皿にもりつけるふるまい料理など「ふるさとの宝物」を話しだすと止まらなくなる。

津波に流されすべての家財を失ってしまっても、それらの営みは、文化のカタチとして暮らしの中に刻み込まれている。山田町では、目には見えないけれども暮らしに刻み込まれた知恵やふるまいが、人と人を結び、チカラを結集する源泉となる。

彼女たちが持つ「家政のチカラ」は、まぎれもなく「ふるさとの宝物」であることを発見することができた。

(2) ふるさとの掟が人を守る

田老は、津波太郎ともいわれてきた。1896年（明治）と1933年（昭和）に、津波に襲われ、壊滅的な被害を受けた。

まちの至るところに、津波の傷跡が刻み込まれ、先人たちの訓えが遺されている。科学技術のチカラでまちを守ろうとした人々は、高さ10m、24kmにわたる巨大な防潮堤を築きあげてきた。「ここより下に家を建てるな」という先人の訓えを、石碑に刻み込むことで伝えようとした人もいた。そして、津波への備えを、掟として遺したムラもあった。

「親族は海と山で住み分けなさい」という掟を持った集落がある。ここでは、科学技術や行政主導の防災に過信せず、油断することなく、掟を守り、山で暮らす人と海で暮らす人は、いざという時に備え、食料や物資を蔵に備蓄し、定期的に交流を重ねた。

行政の危機管理が想定外の出来事に機能不全に陥

っている中、掟を守って活動を積み重ねてきたムラの取り組みが、見事に機能した。グリーンピア田老に避難した被災者には、山で暮らしている親類縁者からの炊き出しが提供されます。この活動が被災者に、「ふるさと」への思いをよみがえらせ、勇気を与え、希望を育んだ。

名も知れぬ先人が遺した掟とそれを守った人々の備えには、まちが壊滅しても生き抜き、もう一度再生するためにどうすればいいか最悪の事態を想定しても生き残るための知恵がみえてくる。モノは失われても人々に情熱とカタチが遺っていればふるさとは再生できるという知恵と覚悟がみえてくる。そして、人と人の絆をつくるために必要な日頃の暮らしのありようを活かすための知恵がみえてくる。

田老の人々による津波の記憶を記録し、語り継ぎ、掟にして言い伝えた先人の営みとそれを見事に継承し、被害を最小限にいとどめることができた暮らしのありようは、「ふるさとの宝物」であることを発見することができた。

(3) ふるさとの絆を育む祭りの段取り

山田町では、毎年、9月の彼岸の時期に、町の守護神である八幡宮と大杉神社の例大祭として、大漁万作、商売繁盛を祈願する「山田祭」が行われている。それに奉納される郷土芸能が「山田境田虎舞」で、「山田境田虎舞」は、故郷を離れた人々を呼び戻す役割を果たしていた。

町の80%が壊滅してしまった山田町では、大杉神社も神輿もろとも流されてしまいました。御輿をかついだり、虎舞を担う人も亡くなったり、県外に避難してバラバラになってしまった。

虎舞どころか、祭りそのものさえも開催出来るような状況になかった。しかし、そのような逆境にあって、死者への鎮魂とふるさとへ未来への希望を育む願いを込めて、どうにか寄せ集めた道具で、遺されたわずかばかりの人で役をこなし、菌を食いしばって、虎舞は奉納された。

そして、誰からの知らせもないのに、震災以後の混乱で、それまでバラバラになってしまっていた山田町で生まれ、育った人は、虎舞の日に自然に結集し、「ふるさと」へ思いを共有する。

郷土芸能が、いま何をしたいかわからない不安におびえていた人と人を結び、規律をつくりだし、失いかけていた希望を呼び起こしたのである。

たった数日間の祭りのために、家族と地域をあげて、1年間かけて準備をする祭りは、日々の暮らし

のなかで犠牲にしなければならないこともあるからこそ、辛いことがあるからこそ、物語になり人を魅了する。

虎舞にかかわることで、参加者それぞれが物語の主役になることができる。そこでの学びをとおして人と人の絆や段取り力を身につけることができる。それらの人づくりは、まちを再建するための原動力になる。それに加え、ふるさとの人々を結集し、元気づけるチカラを持った「虎舞」は、まぎれもなく「ふるさと」の宝物であることを発見することができた。

6 結論と問題提起

社会のためとは、東日本大震災以来、また今後も可能性がある災害への不安の中で大きく価値観が変化した現在、より身じかな個人、地域、日々の生活など、地域に密着した視点に眼を向け、過去の歴史的な営みと現在の生活を考え結び、今あるコトの大切さの根源を考え見つめ直すこと、つまり、人々は広域的な文化、社会からより身じかな地域の生活、文化、社会の再学習と保存、確認を求めている。

今回の災害で失われたモノ、コトの中で、最初に活動を再開したのは、その土地で古くから行われてきた様々な「祭り」や「お神楽」であった。我々が取材した山田町の「虎舞」は、舞い手やお囃子が不足する中、被災後すぐに行われた祭りには、離散して連絡の取れなかった方々もこの日集まり、祭りのでつちかわれた「絆」を再確認する事となった。

私たちが考える心に残る新たな表現とは、過去と今ある自分の身のまわりに、古くから存在したモノやコトの記憶を記録して、その中から「ふるさとの宝物」を収集し、参加、学習、そして教育、普及することが「心に残ると言うより心に残す、そして育む再表現」であると考えている。

今後の博物館の役割と存在は、まず地域社会から、地域の生活、文化に視点を充てた博物館を考えることが必要と考える、そのために新しい施設を設置するのではなく、廃校の利用や郷土資料館の再構築、公民館の多目的利用方法など、既存施設は多々存在している。それらを活用しふるさとの宝物を収集、それらを教育・普及する施設やコンテンツの構築、デジタルコンテンツも重要な要素となる。それらを結びつけることで、地域の新しいカタチのミュージアムが、他の地域と連携する中で生まれる新しく共有するコンテンツが生れ、生活に密着した「心に残す新たな表現」を実現する事に繋がると考える。

会 員 研 究 発 表

地域社会の諸問題解決の場としての ミュージアムの役割

山内 利秋

地域コミュニティにみるミュージアムの役割

地域コミュニティの様々な案件解決にミュージアムが関与してきているが、こうした傾向は今後さらに強化されていくのではないだろうか。具体的には少子高齢化や人口減少・地方の衰退や環境問題、そして防・減災といった我が国を覆うような閉塞感の源泉とも言える社会の諸問題への対応であり、この状況において図書館とともに地方のミュージアムの役割が教育や研究の場から地域コミュニティ再生の場として求められている点である。そうした要求に応じるのは一つはミュージアムの側からは生き残りをかけた戦略的な意図もあってしかるべきだが、それ以上に、そもそも館で蓄えてきたストックを広く活用していく事はミュージアムの本質的な役割から外れたものでは決してない。すなわちこれは、短期間での集客を見込んだイベントを主体とした「まちおこし」や、観光資源の一つとしてミュージアムの活用を意図するだけではなく、縮退期の社会において展開されるべき、持続可能な施策の中に役割を位置付ける事を意味している。

今日、主に歴史民俗系の博物館や郷土資料を扱う図書館において実施されている回想法や回想法の手法を援用したアクティビティ^{註1)}は、民具や写真・地図のような比較的入手しやすく、また取り扱いやすい資料を活用しており、さらに認知症予防・介護予防に關与して医療負担を軽減していく事も視野に入れたものであって、高齢化が進行した現代社会においては極めて訴求力が強いプログラムである。また、東日本大震災で顕著なように、文化資源が「心の拠り所」として、特に土地の人々の紐帯のような役割を持っている側面からも、ミュージアムの保有する資料や情報が地域コミュニティにとって欠かす事の出来ない存在である点は疑いない。

このような考え方に立った時、住民自らが運営する自治公民館のような場が果たしてきた、地域社会のコミュニケーション空間としての意味合いがこれからのミュージアムにおいて重視される機能の一つとなるのは明らかである。自治公民館も、地区公民

館が有している生涯学習を推進していく施設としての基本的なモチーフを持っている場であり、ミュージアムの側からこれら施設に近づいていくのはやぶさかではない。

そしてこのコミュニケーションという視点にたった場合、公民館に限らず本来人の集まりやすい場において機能空間としてのミュージアムを設置する事の可能性が挙げられよう。特にここでは駅について考えてみる。

宮崎県延岡市での事例

宮崎県延岡市は人口13万人弱、企業城下町として多くの工場を抱えているが、近年は衰退し、少子高齢化が進行している。またかつて繁栄した延岡駅前を中心市街地も空き店舗増加が進展している。筆者はこの空間を活動の場とし、地元ミュージアムである延岡市内藤記念館やコミュニティで所蔵されてきた資料をまちづくりで活用する試みを展開してきた。特に地域社会の写真や地図を活用した回想法的アクティビティによる高齢者の認知症・介護予防活動では、商店街の空き店舗を活用したサロン空間を開設しての活動を実施している。その結果回想法にみられる効果である「対象者が過去を思い出す事によって得られる自我の統合」や「社会における役割意識の強化」、「コミュニケーションの増大」といった結果が得られた(山内 2010)。また、一方では対象者個人の記憶に埋もれ、文献等にも残っていない地域社会の様々なトピックやプライベートな写真等の新出情報を確認・情報収集するというフィードバックが可能であった。この成果として、スマートホン用の地図アプリケーション「ブラリ、ノベオカ」も作成している^{註2)}。

高齢化と同時に深刻である少子化の流れは中心市街地の存続を危機的なものとしているが、すでに商店街においては若年層の購買を意識した商品構成がなされておらず、さらに土地利用・交通規制の関係から子供の遊び場となる空間も少ない。また、若年層の住宅そのものが郊外化している傾向がある。従って通常子供が自分達だけで商店街に来て何か活動を行うという機会は、基本的に失われていると言ってもいいだろう。

こうした至って厳しい状況がある中でも、将来を支える若年層が中心市街地に回帰出来る切っ掛けを再構築していく必要がある。これは社会全体の縮小傾向を鑑み、効率的なコンパクトシティを目指す昨今の都市計画においては、中心市街地を主とした都

市機能の再整備が目指されているからに他ならず、従来までの単なる商店街の活性化や交流人口の増加を目的としたものではない。

振り返ってみると、宮崎県には特に山間部を中心に、伝統的コミュニティでの民俗芸能や生業技術の技術継承が以前より衰退したとは言え、今でも盛んに行われている。こうした立地環境では都市部よりも人口減少が著しい所が多いが、その反面小規模ながらも強固な結びつきを持って集落を維持し、人口増につなげている所もある。こうしたコミュニティでは高齢者が若い世代に教える・伝えるという役割を明確に保持しており、また若年層も伝統の継承に地域コミュニティが継続していく事の意味を理解し、たとえ進学や就職で地元を離れた後であっても、祭りには地元に戻って役割を担うという傾向が極めて強いのが特徴として挙げられる。

すなわち、高齢者と子供とをある目的を持って「つなぐ」点の重要性をここから確認する事ができる。この認識に立って中心市街地において、特に学生サークルを主体として実現可能なプログラムを検討した所、「(手持ちの)花火」や「昔の懐かしい遊び」といった、少し前までは当たり前に行われており、そしてこれまでも様々なミュージアムにおいて実践的に行われ、ノウハウが蓄積されてきた活動からの引用を考究し、中心市街地回帰への可能性を模索し

ている。この活動からは先の回想的アクティビティ実施の際にも活用された、利用の見込みのない古い空き店舗や現状では駐車場としてしか活用されていない空き地に、人々のつながりを促すコミュニケーション機能を重視したミュージアムの一機能を付与する事も可能性として提案するに至っている。

「駅+コミュニティ空間」、交通結節点におけるミュージアムの機能

延岡市では、中心市街地での活動の核となるJR日豊本線延岡駅のリノベーション（デザイン監修者：乾久美子氏）が計画されているが、ここでは駅を中心とし、空き店舗等を活用した「駅まち」と名付けられた空間を形成し、駅機能の中に市民活動の拠点としての場の形成を目指し、さらにそれを市民参加を主体としたコミュニティ・デザイン手法によって構築しようとしているのが特徴的である。こうした考え方は従来のハコ重視の指向からの脱却を明確に提示しているものであり、市民の主体的参加を是とした新しい公共の在り方を主導しているものである。

駅のような交通空間を核にしたミュージアムの機能が、地域コミュニティの再生という意識において果たす役割を考えてみたい。そもそも駅や空港といったターミナルにおけるミュージアムの機能はこれまでも存在した。それは市民ギャラリー的な展示の



図1 公民館とミュージアムの連携による地域社会の文化資源の活用

あり方から、一定の評価を経た資料の展示である場合もある。乗降客の出入りが多いというロケーションを考えた場合、資料保存においてはリスクが大きい側面もあるものの、期間的な展示をはじめとするミュージアムのサテライト空間として、部分的な機能が付与されているケースも多い。

この、駅のような交通の結節点において市民のコミュニティ機能が形成される場合がある。温泉施設や公民館が駅に併設されている事例ではこの機能が顕著であるが（ちなみに公民館に温泉が併設されている事例もある）、特に人口減少の著しい地方では地区や自治公民館の持つ意味が都市部と比較して依然として強く、コミュニティ自治の拠点となっている。このような場では民俗芸能等の保存・継承に関与したり、災害時における地元歴史資料のみならず、「公民館文書」として近代以前の土地関連の記録文書が保管されているなど、ミュージアム以上に文化資源と地域コミュニティとのつながりに関与している割合が強い。

こうした状況においても必要なのは、これら施設での資料の取り扱いや、資料としての地域社会の様々な情報、場をつないで何らかのアクションをとりまとめ、指導していくミュージアムの持つ専門性である。そしてこうした場において、専門家は案件解決に関与しながら、これら知識や技術を提供していく事が求められるであろう（図1）。

今後は地域コミュニティの維持継承や様々な問題解決に関与するであろう情報を収集しているミュージアムと、知識を援用できる学芸員が、いかにミュージアムから外に出る事が可能かが課題となってくるのである。

註1：回想法そのものは医療等の専門家の指示によって実施される心理療法の一つであるので、我々が実施しているのは回想法の手法を活用したアクティビティとして位置付けられる。

註2：ブラリ、ノベオカは市民団体 Kongeena のベオカが、ATR Creative と共同で開発した iPhone 用アプリケーションである。

参考文献

山内利秋 2010「地域社会の再生という観点から電子化された博物館・図書館の資料の活用を考える」『日本基層文化論叢』p.608～619 雄山閣

ミュージアムマネジメントによる 伝統文化産業の再生モデル

—鳥山和紙会館の経営モデルを検証する

常磐大学 塚原 正彦
和紙会館館長 福田 弘平

1 伝統文化産業の再生モデル

現在全国で地域ブランドや観光立国などの施策が推進され、それを保存活用するプロジェクトが展開されている。それには、これまで2つのアプローチが展開されてきた。

第1は、地場産業や地域の文化が持つ文化財としての価値を活かして、それを展示したり、建造物などは文化的な施設として活用したりすることで、学習や集客施設として発展させることである。第2は、経済産業省、農林水産省などの経済官庁などが主導して全国で展開している地域ブランド事業である。衰退しつつある地場産業や地域の文化に、ブランドビジネスのマーケティングやデザインを導入することで、ビジネスとして再生を目指すことである。

第1のアプローチでは、文化の価値は、展示として遺されるかもしれないが、集客施設として維持することは困難をきわめ、多くの自治体にとってお荷物施設となってしまっているのが現実である。第2のアプローチでは、もともと金銭価値を超える志や技を中心に継承されてきたシステムをビジネスモデルに応用することは困難であり、話題づくりのプロモーションをのぞいて、成果をあげた事例は多くはない。

私たちは、文化財とビジネス化とは異なる第3のアプローチとして、伝統文化産業の再生モデルとしてミュージアム・マネジメントを提案したい。それは、モノを保存したり、鑑賞したり、商品化するのではなく、モノに組み込まれている仕組みや技などの目に見えないカタチを遺し、人々の生活に根づかせながら、生きた記憶として永続させるアプローチから、新たなプロジェクトを創出することである。

上記の問題意識のもと、1968年より、地域の伝統産業のミュージアム化に取り組むことで、成功を持続させている那須烏山市にある和紙会館と和紙の里に焦点をあて、その経営モデルを分析した。

2 鳥山和紙と和紙のミュージアム・プロジェクトは

(1) 鳥山和紙とは

程村紙（＝鳥山和紙）は、飛鳥時代後半に帰化人

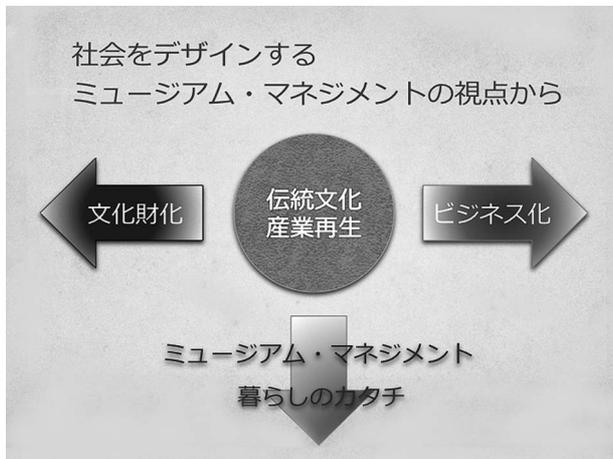


図-1 社会をデザインするマネジメントの視点から

により伝えられたとされており、1300年を超える歴史がある。那珂川の清流と楮のみを原料にした手漉き和紙は、紙肌が緻密で、ことのほか丈夫な特性ゆえ、鎌倉時代には那須奉書が漉き出され、全国に那須紙として流通した。戦前戦中は、選挙用紙や風船爆弾に活用され、現在は、宮中歌会初めにも使用され、国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に指定されている。

(2) 和紙の生活文化を創造するミュージアム

烏山和紙会館は、奈良時代から伝わる烏山和紙手すき和紙技術の唯一の継承者である福田弘平氏によって、1963年に設立された和紙のミュージアムである。

高度成長期になると、1,000軒あった半農半匠の工房の多くは、大手製紙企業の下請けとなったが、規模のビジネスで疲弊し、福田和紙製作所一軒になってしまった。福田氏は、烏山に根づいてきた手漉き和紙の文化を継承していくためには、既存の紙産業と異なる新たなプロジェクトを立ちあげなければならないことを痛感した。そして、大手製紙企業、問屋のシステムと決別し、烏山に根づいていた和紙の文化を遺し、和紙の新しい文化を創造するミュージアム・プロジェクトの可能性をめざし、地に足のついたミュージアム活動を展開してきた。

(3) ミュージアム・プロジェクトの展開

① コミュニケーションからの生活創造

大手製紙企業の傘下に入って疲弊した失敗を教訓に、福田氏は、一人ひとりの生活者とコミュニケーションすることに力点をおき、手漉き和紙職人としての技を磨きあげながら、人々の暮らしに使われ、暮らしを成長させる和紙の生活文化の普

及に取り組んだ。

独学で和紙の歴史文化・技術を学習し、烏山和紙のコレクション中心に、烏山和紙の製造や特徴を展示した。「紙は、人々に思いを表現し、思いを大切なメッセージの媒体である」ということに着目し、手漉きならでは強みが出る便箋、はがき、小さな和紙のミュージアムグッズをつくり、来館者に語りかけた。そして、来館者とのコミュニケーションから、新たに色つき和紙に挑戦し、新たなミュージアムグッズを次々に創造した。

② 和紙文化の共感者の創出：思い出を記録する手漉き和紙の卒業証書

来館者とのコミュニケーションから誕生し、和紙会館の経営をゆるぎないものにした2つのプロジェクトがある。一つは、職人が一枚一枚手づくりで漉きあげ、一人ひとりの氏名を書き、あわせて、烏山和紙の歴史や手漉き和紙の特徴を記したメッセージカードをお届けする卒業証書プロジェクトである。

和紙会館で、特別な思いをメッセージする際に、使う手紙やはがきに対する人々のこだわりあることを感じとった福田氏は、人々の思いや感動を記録する卒業証書こそ、手漉き和紙の強みを訴求できる分野であることを着想した。せめて日本有数の和紙の産地であった烏山の祖先の記憶を思い出してもらおうという発想で、烏山町内の小中学校向けに、手漉き和紙の卒業証書プロジェクトに取り組んだ。烏山町内からスタートした卒業証書プロジェクトは、話題が話題をよび、栃木県内の高等学校、そして大学の卒業証書にまで波及することとなり、手漉き和紙のミュージアムグッズとして、まったく新しいマーケットの創出に成功した。

③ 和紙文化の共感者の創出：和紙を活用した生活文化の学びと支援者の獲得

もう一つのプロジェクトは、「押絵」である。押絵とは、「和紙で、人物・花鳥などの形を厚紙でつくり、これを布で包み中に綿を入れて作る」創作芸術であり、福田氏が開発した学習プログラムである。

色つき和紙を使ってもらうためには、教育や学習教材として活用してもらう必要がある。そのためには、和紙を使って絵を描きあげていき、それに喜びを感じることが出来るまったく新しい教育プログラムが必要と考え、福田氏は、押絵という

創造芸術の学習プログラムの開発に着手した。

福田氏は、誰もが気軽に学ぶことが出来るように、押絵づくりの工程を整理し、学び方を明示したテキストを作成した。学ぶ人々が、習得したスキルやレベルを確認することができるように到達段階を明示した階位を策定した。学習成果を発表する展覧会を開催し、受講者の交流と学習意欲を喚起する年一回開催した。

和紙会館の小さなコミュニティでスタートした押絵の学習プログラムは、生涯学習を先駆けたものであった。その結果、1980年代には、全国の社会教育施設から問い合わせや要望が相次ぎ、テキストの販売、原料となる和紙の販売、受講料は飛躍的に増大し、全国規模の創作芸術に発展した。

(4) 持続するミュージアム活動

福田氏は、2007年度に新たなミュージアム施設「和紙の里」を設立している。

護岸工事がされておらず、烏山に恵みを与え続けてくれた那珂川の流れをしのぶことができる環境に立地している「和紙の里」では、庭に烏山和紙の原料である楮畑もつくられ、半農半匠を特徴としてきた烏山和紙の往事の姿が再現されている。ここは、福田氏とその後継者らが手漉き和紙をする工房である。それとともに、ミュージアムでもある。「和紙の里」は、職人の技を見てもらうとともに、職人と来館者がコミュニケーションする場として、手漉き和紙を体験することができる場としてデザインされている。

「和紙の里」は、展示場、体験学習の場、工房を超えた、創造の未来ミュージアムである。ここでは現在、「手漉き和紙と暮らし縁結び」がキーワードで「押絵」に代わる新たな学習プログラムの開発が実験されている。

3 福田弘平のミュージアム・マネージメントから学ぶべき課題

福田氏が実践してきた和紙のミュージアム化とは、大量生産から脱却し、文化によるブランド戦略を構築したことにある。

和紙会館を経営するにあたって、福田氏がとった事業展開は次の4点に集約できる。

- a) 守る：福田和紙制作所の品質保持＝手漉き和紙の製法を守る
- b) 研究する：和紙とは何か、烏山和紙の文化とは

c) 共感する＝教育、コミュニケーション：手漉き和紙を暮らしに使う

ミュージアムグッズとしての和紙の小物（財布、手紙セット）

手漉きの卒業証書＝文化価値が生きる思い出

d) 暮らしを提案する：和紙の学習システムと人づくり（リピート誘導と学芸員養成）

それはまぎれもなく、文化価値を磨きあげ、共感者を育み、それを未来に結ぼうとするミュージアム・マネージメントであり、個人立のミュージアム・マネージメントの理想の姿が展開されてきたといえるだろう。

福田氏のミュージアム・マネージメントから私たちは、これから多くの地域の伝統産業、また文化を保存継承していくための経営の未来モデルを得ることができる。

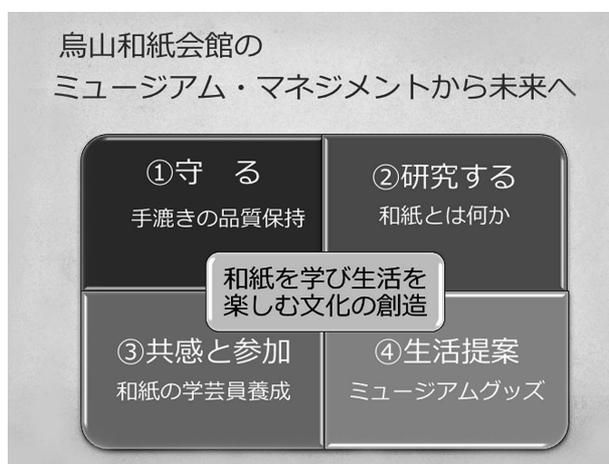


図-2 烏山和紙会館のミュージアム・マネージメントから未来へ

【参考資料】

和紙会館におけるミュージアム・マネージメント実践事例

1 烏山和紙とは

那須烏山市で和紙会館を運営している福田弘平です。私どものまち烏山は、全国有数の和紙の産地という歴史があります。烏山の和紙は、1300年もの歴史があり、独自の和紙の文化をつくってきました。

「烏山の山あげ行事」というお祭りがあります。軽くて丈夫な和紙を使うことで可能になった地球上で唯一の移動組み立て野外劇です。国の重要無形文化財に指定を受け、ユネスコの世界無形遺産の登録に向けて活動しています。

烏山には、最盛期には1,000件を超える和紙屋があり、住民の多くは、半農半匠で紙を漉いていました。ところが、1960年からの経済の高度成長がすすむと、和紙業界も大規模化、産業化がすすみ次々に紙漉き屋が店をたたみます。そして、1940年に烏山に850軒あった紙漉き屋は、1960年には、私の福田和紙製作所たった1軒になってしまいました。

2 産業から文化、芸術へ

私が福田和紙製作所を継いだ時、大手の紙産業、紙問屋の下請けシステムができあがっており、価格も、商品も決められない状況になっていました。烏山の和紙が生き遺るためには、自分で商品や価格を決める新しいシステムを作り出さなければならないことを痛感しました。

私が着目したのは、烏山和紙を商品としてではなく、文化として使っていただく。そのためには、烏山和紙を語り、共感者を育む活動をしたということです。

3 和紙のミュージアムの設立

それを実現するため、私は、大手流通業界と決別し、1963年に、和紙を学んでもらう、和紙を使った生活を文化として普及することを目指した「烏山和紙会館」を設立しました。

和紙会館はいままでいう和紙のミュージアムです。1963年栃木県にもその近隣にも、博物館はありませんでした。紙をテーマとした博物館もまったくなく、私は試行錯誤でミュージアムの経営をしてきました。



写真1：和紙会館

4 和紙会館の使命

和紙会館は、私どもの漉いた和紙をお客様に直接触ってもらい、和紙を良さを学んでもらうための施設

です。私は、お客様が、歴史や文化を楽しく学べる、ふれることができることを第一に取り組んできました。そのために、お客様が烏山和紙にふれることができるよう日々勉強を重ねながらミュージアム活動に取り組んできました。

5 ミュージアムグッズ

私は紙漉職人です。私どもの強みは、オーダーメイドで紙をつくることです。私の持つ強みを活かし、和紙会館でのお客様とのコミュニケーションから、大手和紙業界ではできない、ミュージアムグッズの開発に挑戦しました。

ミュージアムグッズは、心をこめたメッセージを記録する特別な紙、生活を楽しむ特別な紙というコンセプトでつくります。色付きの紙や柄のある紙、手紙セットや財布、名刺入れ、カバンなど、オーダーメイドのミュージアムグッズです。

お客様とのコミュニケーションから生まれた和紙会館のミュージアムグッズは、クチコミでひろまります。そして、日光、鬼怒川、那須などの観光ホテルから注文がくるようになります。



写真2：ミュージアムグッズ

6 烏山和紙のサポーターと養成する学びのプログラム

和紙館にやってくるお客様はリピーターが多くなります。私は、お客ともっと深く絆をつくることのできないかという問題意識を持ちました。

私は、アート教室に着目しました。その中でも羽子板・壁飾りなどにする押し絵細工に焦点をあててみました。

押し絵とは、人物・花鳥などの絵を部分ごとに切り離し、綿で立体感を出し、美しい布地で包んで厚紙や板にはったものです。

押し絵に、手漉きならではの風合いで作品が出来



写真3：押し絵教室作品展

栄えがちがってくる要素を強くした独自の教育プログラムを開発しました。

④初心者レベルから、紙漉きが出来て教室を開くことが出来る教授レベルまで多くのレベルを設定しました。私は、教室を開催しながら烏山和紙を語り伝えました。現在も、押し絵教室を通じ、5,000人の会員を組織しています。

7 思い出を記録する手漉き和紙の卒業証書

卒業証書は、学校の学びの思い出を記録する大切なグッズです。和紙の町、烏山でも次の時代を担う子供たちに和紙を使ってもらわねばということに気づき、烏山和紙の解説とすかしをいれた手漉き和紙をつくって小学校へお届けしました。

私は、烏山和紙の歴史文化を語り、学びの思い出を語る学芸員として、栃木県内の学校を歩き、烏山和紙を使ってもらえるよう活動をしてきました。

8 新たな文化創造拠点「和紙の里」

お客様のニーズは代わります。ゆえに、新しい事業にチャレンジしなければ飽きられます。文化は、変わり続けなければなりません

2007年度に新たなミュージアム施設「和紙の里」を設立しました。護岸工事がされておらず、烏山に恵みを与え続けてきてくれた那珂川の流れをしのぶことができる環境に立地しています。庭には、烏山和紙の原料である楮畑もつくっています。

職人と手漉き和紙を体験する工房をつくりました。手漉き和紙と暮らし縁結びをキーワードで「押し絵」に代わる新たな学習プログラムに取り組んでいます。



写真4：紙漉き

9 まとめ

全国手漉き和紙連合組合という組織があり、保存活動に取り組んでいますが、毎年仲間がお店をたたんでいます。そのような時代にあって、私は、ミュージアム活動を展開することで、ほぼ50年にわたって、烏山和紙を遺すことができました。

私どもの業界で、ミュージアム活動を中心に生き残りを成功させてきた事例は他にありません。そういう意味で、皆様にこの経験を学術的に整理いただき、文化の保存承の取り組みに活かしていただければ幸いです。

10 山あげ研究所

最後になりますが、那須烏山で行なっている「山あげ祭」について紹介いたします。山あげ祭は、世界でも珍しい「紙」を使った、「紙」がテーマのお祭りです。「紙」に「神様」が舞い降り、地域の人々に幸せをもたらします。

現在、ユネスコの無形文化遺産登録を目指していますので、是非、会場の皆様のご協力を宜しく願っています。

以上で私の発表を終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

野外博物館の無限性を活かす 社会的な取組み

—野外博物館北海道開拓の村の
むらびと登録制度事業—
一般財団法人北海道開拓の村
中島 宏一

1. 現状

野外博物館北海道開拓の村は1983年（昭和58）にオープンし、北海道内各地から移築・復元した52棟の歴史的建造物を擁する野外博物館である。昨今、地方財政の悪化、少子高齢化、利用者の減少等、当施設を取り巻く環境は厳しさを増しており、特に指定管理者制度が導入された2006年（平成18）以降は運営予算が急減し、建造物の修繕も滞っているのが現状である。

2. 使命

指定管理者として開拓の村を運営する当法人では、施設の存在意義を確立し、現在の北海道を築き上げてきた明治・大正期の先人たちの暮らしを示す歴史文化遺産と当時の人々の生活文化を末長く後世に残していくことが私たちの社会的使命であるとして、特に道民から託された歴史的建造物の保存とその活動を助長する博物館活動に対する道民の理解を促すため、建造物を有効活用した事業を開発する「むらびと登録制度事業」を2006年度（平成18）より取り組んでいる。

3. 施設の魅力の再発見と発信

具体的には、52棟の建造物に住民登録したボランティアを主体とする「むらびと」たちが、解説や演示といった基本的な活動の枠を超え、当時の服装等

を着用して日常的な暮らしを演出し、一般登録した「むらびと」をはじめとする老若男女の利用者の学びの場、居場所を整備することにある。すなわち、非日常的な空間を創出し、利用者を明治・大正期の情景へとタイムスリップさせる取組みで、北海道開拓時代の暮らしを体感的に理解することを助長し、かつ利用者のニーズ（期待感）に対応しながら、施設の魅力を発見、発信する効果をもたらすものと考えている。

4. ソーシャルキャピタルを意識した取組み

「むらびと」として各建造物で昔の日常的な暮らしを実践するためには、法人職員、ボランティア相互、利用者との学びを通して自己を高め、発生する課題に対してはボランティア仲間や法人職員と解決に努めているボランティアにおいて、主体となる人材は他にはいない。本事業の実施に至る過程においても、平成17年度（2005）に職員とボランティアがワーキンググループを編成し、両者で課題を見つけその解決に取り組み、実現に向けて協議を重ねてきた。この作業は現在に継続され、新たに発生した課題の解決に取り組みながら新規事業の開発や既存事業の再編等に取り組んでいる。

5. 資源の確認と価値観の共有

本事業の開発にあたって、相応の利用者数を維持しなければ自らの活動を発信できないことから、利用者数の確保と増加を当面の課題として掲げた。その結果、展示更新が不可能な建造物の普遍性が障害となるが、北海道開拓過程における先人たちの暮らしを示す建造物を重要な資源と位置づけ、現況の資源の歴史的価値を見出しうえで、これまでの保存第一主義から活用へと転換し、私たちの活動を発信することにした。本事業の実施に際し、実施主体者となる200余名にのぼるボランティアが趣旨を十分に理解すること、また、イベントとして大きく取りあげることで内外へ本事業をアピールするため、2007年（平成19）に農村群にある建造物をステージに見立て、寸劇や農作業風景を取り入れた「農村の一日～開拓の村にお帰りなさい」を実施した。これを機に、開拓の村を構成する市街地、漁村、農村、山村の4つの群のむらびとが各グループ単位で本事業に取り組む機運が高まり、翌年には1年余の準備期間を経て、漁村群建造物内外を舞台とした「漁場の一年」を実施し、往時のニシン漁場に携わる網元や漁夫たちの暮らしをむらびとが躍動的な芝居で演出した。



ボランティアのネームプレート



「漁場の一年」で漁師たちの仕事唄に臨むボランティア

これらの取組みは、実施者間で事後評価を行い、プログラムを一部変更しながら現在まで継続され、2011年度（平成23）には市街地群で「市街地のむらびとの暮らし」を実施し、市街地群の各建造物のむらびと（ボランティア）が建造物の住人や歴史上の人物に扮して日常的生活風景を演出した。

6. むらびと活動の現況

本事業は、日々博物館学習に取組み、各建造物の住民（むらびと）となったボランティアの主体性を促しながら、博物館運営者として当法人が有する専門性を注入した活動である。現況として、前項に取りあげたイベント性に特化した事業は本来の目的ではなく、次に挙げるような取組みの日常化を目指している。

(1) 日常的情景の演出

建造物の住民として、当該建造物に暮らした人々の日常を再現する。このため、当村で継続的な学習に取り組むボランティアが主体者となる。

(2) 主体形成の支援

ボランティアの提案を可能な限り受け入れ具現化し、自らの活動に問題意識を持たせながら実施主体者としての自覚を促し、主体形成を支援する。

例：藍の栽培と生葉染め（藍染商家）、繭細工づくりと販売、蔴づくり（蚕種製造農家）、ラベンダーポプリづくりと販売（待合旅館）、水田耕作・案山子づくり（稲作農家）、病院長（医院）、新聞記者（新聞社）、校長先生（中学校）、蔵人（酒造店）、写真技師（写真館）等



復元された医院で院長に扮したボランティア

(3) 文化財保存の意識の醸成

各建造物、グループで設定した「むらびと会議」（家族会議、町内会）で、むらびと（ボランティアと一般登録者）と職員が共に取り組む活動としては次のとおり。

例：建造物内外の清掃と資料クリーニング、グループ学習を通じた仲間づくりの形成、建造物を活用した事業の企画、建造物保存の意義や活用方法の学習

(4) 地域住民の居場所づくり

こうした活動に取り組む過程で、いずれの事業も子どもを対象としておらず、むらびとと登録した子どもたちの居場所が整備されていないことが表出された。また、超高齢社会を迎えているなか、地域の老若男女の居場所を整備することが課題となった。

7. 社会的な意味を問う活動の構築

ワーキンググループでは、子ども相互、子どもとその家族が楽しみや学びを共有する事業の構築が緊要であるとともに、進行する少子化の中での児童層と保護者の取り込み、継続的、将来的な開拓の村のファン層の確保と増加も検討することが必要であるとし、親子協働参加型事業の開発を2010年度（平成22）より着手し、翌年度に開拓の村キッズクラブ「昔の暮らし・しごと体験」を具現化した。

この事業は、開拓の村を一つの地域社会と設定し、子どもたちは社会で昔の暮らしや仕事を体験し、大人から知恵や技術、社会生活等様々なことを学ぶ。単に体験ではなく、子どもたちが携わった仕事が社会（開拓の村）に役立つことを成果として体得させる。さらに、仕事の対価を受け取って消費活動を行い、社会性を身につけさせる趣旨で企画され、むら



浦河支庁庁舎にむらびと登録しているボランティアが支庁長に扮し、任命書を子どもたちに手渡す

任命書
開拓 太郎 殿
あなたを開拓の村キッズクラブ「昔のくらし・しごと体験」において、開拓期の生活や文化、歴史を楽しみながら学ぶことを命ずる
平成二十三年七月三十日
浦河支庁庁舎支庁長 三春 秀雄



子どもたちは、村内で使うことのできる通貨「ムラン」を手に、昔の駄菓子を買ったり馬車鉄道の乗車等を楽しむ。

びと（ボランティア）は地域に暮らす大人としての役割を担う。事業終了後、幾つかの課題を導出されたが、実施者間で解決に取組み、2012年度（平成24）の事業実施案では改善策を講じている。

今回報告した開拓の村の取組みは、野外博物館の無限の可能性とボランティアに代表される地域の高齢者の社会経験と技術、継続的な博物館学習の成果を結合させ、同世代では意識の共有を育み、未来の北海道、日本を担う世代にはその英知を提供した事例であるが、方法としては博物館等施設では先駆的な事例ではない。しかし、ボランティアを事業推進の補助者ではなく主体者として位置づけ、自らの活動が社会的意味を成すこととしてとらえ、自らを一層成長させようとする高齢者集団の取組みは、今後の超高齢社会における博物館の社会的使命を考えるうえで、一つの方向性を示していると思われる。

8. 課題

歴史的建造物を活用しながら保存の意義を唱える本事業の実施に際しては、建造物の保全状況が悪化しないことが前提となり、今回報告するソフト分野の開発も建造物等資料が整備されていてはじめて具

象化される。言うまでもなく、開拓の村では建造物等資料を介して機能的な博物館活動が展開されているが、資料の劣化とインフラ設備の老朽化が顕著となっている。当施設を運営するうえで最大の理解者で支援者であるボランティアも、この現状と施設自体の存亡を懸念しており、当施設が存在する社会的な意味を地域社会全体で確認することが緊要であると考えている。今後も皆さんのご指導と情報提供を仰ぎたい。

地域と共に発展する場の形成をめざして

—滋賀県平和祈念館の事例より—

滋賀県平和祈念館
北村 美香

1. はじめに

平成24年3月17日、滋賀県東近江市に滋賀県平和祈念館（以下、平和祈念館）が開館した。平和祈念館は、平成3年に基本構想の議論が始まり、平成5年からは県民の戦争体験談の聞き取り調査や、体験談にまつわる資料収集が始められた。しかし、建設候補地の変更や、県の財政難から新規に建設することが困難になるなどの理由から、開館までには構想から約20年の月日がかかってしまった。

そのような中で、何度か計画の見直しを経たのち、市町合併により空いた旧町役場等の既存施設の活用が検討されるようになった。それを受けて、平成22年初めに東近江市より候補施設として推薦された「東近江市愛東支所（旧愛東町役場）」を活用することが決定し、開館に向けた「平和祈念館（仮称）整備プラン」が平成22年8月に決定した。同年10月から翌年3月までは、改修工事設計業務および展示設計業



写真1 滋賀県平和祈念館外観 筆者撮影

務を実施し、約1年間の準備期間を経て開館を迎えることとなった。

2. 3つの理念

平和祈念館は、3つの理念から活動をしている。ひとつめは「住民参加型で育ててもらおう平和祈念館」である。「モノと記憶の継承」をキーワードに、戦争体験者をはじめそのご家族などから収集した体験談や資料を通して、事業を展開している。利用者一人ひとりが、戦争体験者の思いや願いを感じることで、現在の身近な問題へと置き換えて次の行動へつなげるきっかけになることを目指している。また、「モノと記憶の継承」実現に向けて、幅広い住民が利用し、展示や様々な事業を通して新たな行動へとつなげることで、館と住民が共に発展し育てていく「住民参加型」の運営を目指している。ふたつめは、来館してもらうことを待つだけの「待ち」の館ではなく、自ら地域に「出かけていく館」である。さまざまな理由で来館が困難な団体や場所に対して、こちらから資料を持ち、時には語り部の方とも一緒に学校や公民館などに出かけていく。資料や体験談に触れる機会を増やし、学習プログラムと組み合わせることで、双方向の学びを導き、自らできることのきっかけづくりの場を提供していく。みつめは、「地域との連携、まちづくりに貢献できる館」である。平和祈念館の周辺には、道の駅や地元の農産物直売所、環境学習施設があり、農業、環境とともに平和な暮らしについて学び、考える拠点のひとつとしても参画していく。

この3つの理念を軸に、過去の史実を知り、そこで得た経験や知識から、現代の視点に置き換え、各個人が平和な暮らしについて学び、考える拠点を目指している。

3. 平和祈念館の取り組み

これまでの取り組みの中で、約20年間の調査活動の成果として1,300人以上の体験談と、体験談に関連する約25,000点が収蔵されている。集められた資料（以下、体験談を含む）は、これまでも戦争体験談集「記憶の湖1～9巻」の刊行や、巡回展示、学校をはじめとする平和学習の支援として活用してきた。しかし、時間や場所の制約があり、利用者が資料とゆっくり接する機会を提供することは困難であった。そこで開館後は、利用者一人ひとりが資料と向き合うことに重点を置き、資料を介したコミュニケーションの場づくりを目指した。

平和祈念館の展示は、戦争体験者の資料や言葉を通して戦争のさまざまな面を紹介している。それは、利用者が資料を通して、戦争体験者の記憶に接してもらい、地域であったことを知ることで、そこからは各自が自分の意見を持ってもらいたいためである。そして次のステップとして、自分の意見を言語化し、他の利用者等へと伝えることでコミュニケーションが生まれることを目指している。資料と接する時間を長く取るための環境づくりとしては、展示室内の照明を明るくし、年配の方でもゆっくりと過ごせるようにテーブルと椅子を多く配置した。また、悲惨さだけが強調されるような演出は、第一印象としてのインパクトはあるが、ねらいの達成に相応しいものではないため今回は採用しなかった。利用者の年代や性別によって、展示や活動に期待する内容や求めるテーマに違いがあるため、展示に対しての多様な意見が寄せられている。万人が満足することは困難だとしても、利用者の多様性を意識した活動は必要である。今後は、平和祈念館でのコミュニケーションをきっかけに、平和について現在の身近な問題へと置き換え、「モノ」と「記憶」の継承とともに次の行動へつなげていきたい。

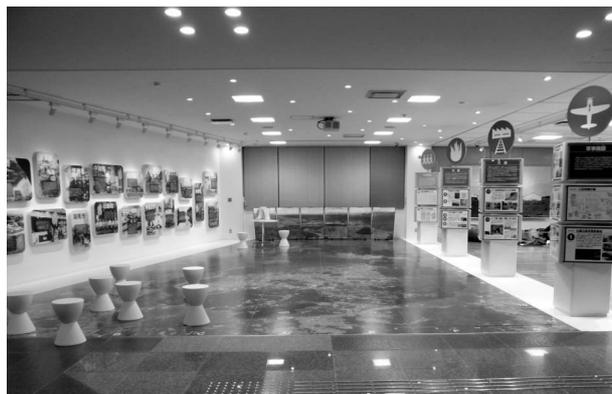


写真2 基本展示風景 筆者撮影



写真3 企画展示室風景 筆者撮影

4. 開館後に見えてきた課題

開館してから約3ヶ月ではあるが、日々活動を行っていく上で課題がいくつか見えてきた。平和祈念館では、開館の半年前からボランティアを募集し、自主的な活動が行われている。ボランティアは、「住民参加型で育ててもらおう平和祈念館」の実現にとって欠かすことの出来ない重要な要素のひとつである。ボランティア各自が、それぞれの興味関心別に自分の時間を使って活動しており、館からの活動に対する制限は「活動理念に賛同すること」「一般常識の範囲で活動すること」以外は特に設けておらず、自由度の高いものとなっている。自由度が高い分個々の対応が求められるのだが、館側での受け入れ態勢が出来ていなかった。原因としては、ボランティアの活動に対して職員の中でも共通認識が持てておらず、活動に対しての計画も立てられないまま開館を迎えたことが問題である。そのために、ボランティアへの対応にも職員によってバラツキがあり、混乱してしまっている。まだ開館して間もないため、館内での活動に留まっているが、早急に解決する必要がある。

また、平和祈念館の取り扱っているテーマが、「地域との連携」に対してハードルを上げていることも考えられる。これまで立地地区になかった「戦争と平和」というあまり馴染みのないテーマに対して、どのように連携を取っていけばいいかの戸惑いがあるという意見をよく聞く。これらは、取り扱いにくいと思われがちなテーマであり、暗いイメージや生々しい悲惨さだけが先行してしまっているのが要因のひとつだと考えられる。また利用者の年代によっても、平和祈念館の展示や活動に期待することにも違いがあるため、利用者の多様性を意識した取り組みが必要になってくる。

5. 今後の展望

これまでの体験談と資料から展示や交流事業を構成し、資料としての「モノ（資料）」と「コト（出来事）」が共存でき、それが「心」と「祈り」につながることを目的とした活動が始まったばかりである。まずは見えてきた課題に取り組み、館と住民が共に発展し育てていく「住民参加型」運営の実現を目指していきたい。

博物館の社会的役割について

三重県立博物館
布谷 知夫

これまで博物館の社会的な役割は、資料を保管し、研究し、教育学習事業や展示を通してその情報を発信するという博物館の基本的な事業を行なうことにあると考えられてきた。そして個々の事業に対する程度の差はあるものの、おそらくこれらの事業を行なっていない博物館は、いずれかの事業だけを行うことを目的としているごく少数の博物館を除けば、存在しない。しかし、博物館の側が努力している割には、また熱心な支持者が周辺にいるにもかかわらず、日本の博物館の社会的な地位は低いと言わざるを得ない。

その理由の一つは、日本の博物館はほとんどが規模の小さい博物館であり、学芸員が日常的に資料整備、研究、展示、教育学習という博物館のすべての事業を行なおうとすると、学芸員だけでは十分に行うことができず、日本の博物館の際立った特徴である身近な利用者の手を借りて、共同調査、共同研究を行いながら、そういう利用者と共に事業をしてきたということがあげられる。このことは非常に熱心な利用者に囲まれながら博物館の運営ができるという面はありながら、逆にそういう人たちへの対応だけで手がいっぱい、それ以外の人たちに対して博物館が持つ情報を広げていくという努力をしてこなかったということがあげられる。積極的に来てくれる人だけを対象とし、それ以外の地域の人たちに対しては、目を向ける余裕はなかったということだろう。

こういう活動をしてきたために、博物館が好きな人、博物館を使って楽しんでいる人にとっては、非常に有益な場であり、結果としては博物館の情報や資料の蓄積も増えるという状態になっているが、それ以外の人たちにとっては、展示を一度見たら終わり、あるいは、博物館とは何をしているのかわからず、自分とは関係のない場所というイメージを持たれ、それが定着してしまったのではないかと思う。

このような状態の中で、博物館は社会から何が期待されているのか、博物館という場が地域の中でどういう役割を持つのか、ということについては、ほとんど議論がされておらず、またそういう立場での発言をしてこなかった。そしてバブルの崩壊、低成長、不況の継続の中で、大学や公立の施設などの独

立行政法人化が行なわれ、指定管理者制度が広がってきても、それに対して博物館の側からの意思表示はほとんど行われない状態があった。

しかし近年は社会状況が変わり、博物館の役割には新たな点が付け加えられていると感じる。現代社会を表現すると、将来への不安、自己実現や達成感の喪失、連帯感やコミュニケーションの不在などの暮らしにくさ、生きにくさがあげられ、反対に人々が期待する社会として、豊かさを感じることができる社会、安全で安心できる暮らしを実感できる社会などがあげられるだろう。このような社会状況の中で、そのような社会的課題に対して、実は博物館はもっとも適切な対応が可能な機関なのではないかと考えている。

多くの人たちが今求めているのは、自己実現ができ、自己の再発見が実感できることであり、それを通じて、他の人たちとのコミュニケーションの拡大、さらにはそういう人とのネットワークを通して、地域社会の安定ということではないかと思う。そのような活動の基礎になるのは、個人の学びが実現できる場の確保であり、人のネットワークを確保する場であるが、それこそ博物館が最も得意としている活動であり、そういう活動を進めるために必要な資料と情報を持っていてもいい。博物館は研究者が内部におり、多くの資料と情報を蓄積しているため、それらの資源を使って、上記のような暮らしにくさ、生きにくさに対して意識的に対応し、またその内容を博物館の側から主張することで、新たな社会的な位置を確保することができるのではないかと。現在博物館を活用している人たちはすでにそのような立場を達成しておられることが多く、そのような人とのネットワークを広げていくことがこれからの方向であろう。博物館のそのような社会に対する役割を博物館の側から主張することで、地域住民にアピールできるのではないかと考える。

そのような一つの事例として三重県立博物館の例を紹介したい。

三重県立博物館は1953年（昭和28年）に開館した古い博物館で、来年（2013年）には開館60周年を迎える。これまで何度かリニューアルの動きがあったが、結果としては計画が見送られてきた。そして建物の老朽化により4年前（2009年）から展示室を閉めて、移動展示や他の博物館事業を継続してきた。展示室を閉めた同時期に県知事の指示で新博物館を建設することが決まり、現在は県立博物館を維持し

ながら、新博物館整備推進プロジェクトチームとして新しい県立博物館の開設準備をしている。

2011年の4月の選挙で当選した新知事は、防災や医療を第一に挙げ、開設準備中の博物館の計画はゼロベースで見直す、ということを目指して当選された。新知事の当選直後から、博物館では知事に、どのような博物館を作ろうとしているのか、なぜ博物館が必要なのか、博物館が新しくできることで、三重県にとってどういう影響があるのか、などについて博物館の考え方を説明した。新知事からの質問や意見を受けながら、博物館の社会的な役割について説明をして、十回程度の説明機会の後、最終的に知事から、博物館は必要であることを認めていただき、新博物館の開設事業を続けている。

この一連の知事との議論の中で、博物館の側が意識したのは、現在の三重県立博物館が持つ資料や情報、人脈を活用すれば、知事が政策としてあげていた暮らしやすい三重県、成熟した時代の豊かさを実現できる三重県、という主張を実現するための具体的道筋を実現できるということであり、その事業を発展的に進めるには、新しい博物館を建設し、多くの県民の皆さんに活用してもらうことによって可能であるという主張であった。そしてその根拠は、これまでの博物館の役割についての先行研究などから整理して、考えたものであった。

博物館の役割については、それほど多くの研究があるわけではない。博物館現場ではさまざまに議論がされているが、文化経済学分野からのホールや地域文化の議論を除けば、ほとんど公表されていない。

そうした中で博物館の役割を考える上での前提としては、

- 1 博物館は社会の公共財と考えて議論をすすめるべきである
- 2 博物館が地域社会に貢献できるのは、博物館が持つ基本資源があり、その資源を活用することができるということが社会から信頼されているからである
- 3 博物館は社会からどういう存在として認められたいのか、ということ整理して、博物館の側から主張することが必要である
- 4 従来の博物館の支持者・利用者だけではなく、博物館を知らない地域住民や行政にとっても役に立つことが実感できるようにすることを意識する

というような点があげられると考えている。

三重県の現在の博物館は、規模も小さく、県内に大きなアピールができる状態ではなかった。新しい博物館を計画するに当たっては、どのような目的で、誰に何を届ける博物館なのか、その役割は何か、などの課題を時間をかけて議論を行った。その結果として、新博物館の理念として「ともに考え、活動し、成長する博物館」、その使命として「1 三重の自然と歴史・文化に関する資産を保全継承し、次世代に生かす」「2 学びと交流を通じて人づくりに貢献する」「3 地域への愛着と誇りを育み、地域づくりに貢献する」の3点を決定した。60年近くかけて蓄積してきた資料群と情報網を活用しながら、学びの場として人づくり、その学びの成果として地域に目を向けることで地域づくりにも貢献できる博物館を作る、という意思表示である。

このような議論を済ませた段階で、新知事からの博物館に対する意見を受けて、三重県立博物館では、一方では新博物館をどのような博物館にするのか、ということ県内の利用者やマスコミなどで取り上げてもらえる機会ととらえ、また一方では新知事の、行政として必要性がないのであれば、建設は中止するという政策に対して必要性を訴え、また行政の立場にも説得力のある博物館の姿勢を出す機会と考えた。

そういう立場で、博物館の必要性あるいは役割として次の5点をあげた。

「1 県民にとって精神的なバックボーンとなる三重のアイデンティティを保存継承する。」「2 博物館は未来への投資である。」「3 博物館は人が育つ場である。」「4 新しい豊かさのモデルを作る。」「5 産業振興や観光のために。」

1は博物館の基本的な資料や情報を利用者に提供することで、地域の中の自然や歴史、文化や伝統に目を向ける機会となり、地域を好きになり、個人のアイデンティティの確認の場となることであり、地域社会に対する博物館の伝統的な役割の確認である。地域社会の中の自然や歴史・文化の情報の蓄積を生かすことで、地域の住民は自分の暮らす地域への愛着と誇りを身に着けることになる。2は、特に子供たちにとって、学校とは異なる自由な学びの場であり、三重県について総合的に学ぶことができる場であることである。特に学校では総合的に自分が暮らす県や地域について学ぶ機会はなく、博物館は唯一の場となっている。3は基本的な博物館の教育学習活動の力をさしており、4は博物館の1～3の働きによって、自立した個人を育て、その結果として自

立した地域を作り、地域の中のネットワークやコミュニティを作りあげていく力となるということであり、そのような社会は新しい豊かさを示す社会のモデルとなるだろうという考え方である。そして5は、以上のような博物館の資料や情報、そして人のネットワークは、そのまま産業や観光に対しても意識的・効果的に使うことができる、ということである。

このような博物館からの主張に対して、知事からはご自身の言葉でこれらの内容を整理・表現されたのち、新博物館建設の継続を決めていただいた。三重県の場合には突然の知事からの疑問に対して応える形で、改めて議論を行ったが、内容的には知事の、こんな三重県にしたい、という意向に対して、新博物館の役割にはそういう県にすることを含まれていることを説明することで、知事にそれを支持していただくことになったと思う。博物館が何をしようとしているのかを明確にすることで、利用者である地域の人びとにも、そして行政の内部にも、理解してもらい、支持してもらえるような議論と意思表示が必要であると感じている。

ミュージアム・ボランティアの 学びに関する研究

—美術館ボランティアの 語りからみる活動に注目して—

東京大学大学院教育学研究科 博士課程

都甲友理絵

1. はじめに

知識基盤社会といわれる今日、多元的かつ流動的な「知」の在り方が問われている。人は学ぶことなくして十全に生きることはできず、公的に保障する機関として社会教育施設の一つである博物館が考えられる。

本報告では、博物館の持つ価値を、展示資料のみならず、人と人との関係性のなかで生じる学びにも焦点を当て、特に、博物館と来館者をつなぐ、ミュージアム・ボランティアの学びの諸相を実証的に明らかにすることを目的とする。

博物館におけるボランティアを主題とした先行研究としては、例えば、博物館ボランティアの位置付けと導入の意義について論じたもの（布谷 1999）や、ボランティア受け入れの意義と課題について論じたもの（大木 2009）などがあげられる。これら

は、ボランティアの本質や適切な職員配置について論じることによって、活動を推進し、保障しうるものと捉えることができる。しかしながら、あらゆるボランティアが市民の参加型社会として評価される一方で、その活動の基盤となる構造を分析する視点を持つことが必要ではないだろうか。

そこで、本研究では、対話を用いた鑑賞活動の担い手として注目されている美術館のボランティアに焦点をあて、インタビュー調査による「語りからみる活動」から「学び」とされる要素を抽出し、考察を加えていく。

なお、本稿における「ボランティア」とは、各々の博物館の中で活動をする個人を示し、その他について示す場合には、その都度言及するものとする。

2. 研究の視点と分析の枠組み

「学び」とは、口まねをすることが原義の「まねぶ」や「真似る」と同源とされている。社会教育学・生涯学習論における議論では、佐藤一子は、「学習者の参加と協同はおとなの学びの基本的な要素」であるとし、また、牧野篤は、生涯学習における学習の本質について、「事後性」を基礎とした「贈与＝交換のオーバーアチーブな関係」という用語を用いて、個人的な趣味活動とみえる実践こそが社会の基盤となる人と人とのつながりを支えているとしている。

本研究では、「学び」という概念を、学習を捉え直す言葉として、一人ひとりの主体性と他者との関係性を基盤とし、学んだことに後から気づき、さらに学びたくなるという、事後性と過剰性という概念を含むものとして用いる。

インタビュー調査における分析の枠組みとしては、次の二つを、学びを捉える視座とする。

第一に、「ボランティアらしさ」という、博物館の利用者でありながら、鑑賞活動を担うという両義性を持つなかで、自己の立ち位置を認識していくことである。ボランティアの役割に気づき、固有の意義を認識しうるということが、本研究で示そうとする学びを捉える第一歩であると考えられる。

第二に、「ボランティアとしてのかかわり」とは、鑑賞活動の主体として参画することに加え、その活動を省察することによって、自己の認識を変容させるとともに、さらに活動を展開していくことである。また、ボランティアと来館者との差として、ボランティアが所属する組織を基盤に人のかかわりを持つ機会に恵まれ、その関係性のなかでボランティアという役割を意識しながら活動することがあげら

れる。これらの過程を通して、さらに活動に対する意識を強めていくことが、本研究で示そうとする、事後性と過剰性という概念を含んだ学びである。

この二つの視座をもとに、ボランティアの「語りからみる活動」の特徴について言及すると、活動の当事者が語ることによる視点の二重性として、ボランティア自身が語る内容の「主人公」となりうるとともに、「語り手」として筆者のような存在を意識しながら伝えようとするということがいえる。本研究では、インタビュー調査によってボランティアが自ら行う活動を第三者に語ることを通して、つまり、活動を俯瞰しながら自己を対象化することで、「活動」から「学び」への転換をはかるということを試みる。そのため、ボランティアによって語られた内容は、「ナラティブ（物語、語り）」という、人々の主観的な世界を扱うアプローチの概念によって学びの範疇に含めることができると考えられる。

ナラティブ・アプローチによる「視点の二重性」

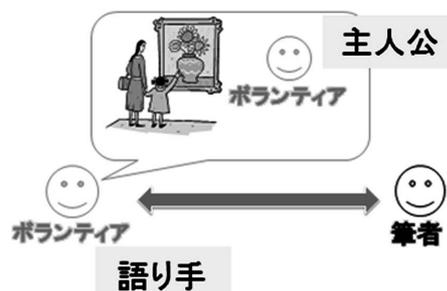


図1 「語りからみる活動」の特徴（筆者作成）

3. 調査概要

本調査では、美術館ボランティアの語りからみる活動から「学び」を抽出すべく、世田谷美術館、豊田市美術館、兵庫県立美術館の3館の、合計14名のボランティアを対象にインタビュー調査をおこなった。

調査方法としては、一対一の半構造化インタビューとして、ボランティア登録から現在に至るまでの具体的な思い出や、活動の様子などを伺う10項目のインタビューガイドをもとに、1人あたり約40分お話を伺い、音声をテキスト化してコーディング作業をおこない、類似性の高いキーワードにまとめる作業をおこなった。

4. 主な調査結果

4.1 ボランティアらしさ

「ボランティアらしさ」としてコーディングしたものは、活動のための準備や研修、活動に取り組む際

のボランティアの意識であり、いずれもボランティアを鑑賞活動の担い手として捉えたものである。

「学芸員さんではないので、違う、学術的なことというよりは、自分たちの生活から出てくる言葉っていうんですか、そういうものは大切にしたい…」

「ここの特に現代アートなんかは自由にみてもいいんだなと思っていただければいいなあというのは思ってますけど、そのためには自分も勉強していきなきゃいけないし、それなりの、その方に失礼じゃないような言葉がけとかしななきゃいけないので…」

上記の語りは、ボランティア自身が「主人公」として語られるのみならず、「語り手」として初対面である筆者に伝わるような言葉を選びながら、適宜構成し直し、語るものである。そのため、活動の準備段階のなかでも、来館者との対話に関連のあるものが語られるということは、実際の活動からは時間的経過があるものの、特に大切なことと感じているからこそ、それが語りへと反映されている。

4.2 ボランティアとしてのかかわり

「ボランティアとしてのかかわり」としてコーディングしたものは、活動を通して来館者やボランティア仲間との関係を認識しながら、自分自身が改めて「ボランティア」として活動することについて語られ、その活動を発展させていこうという意識を持つ過程である。

「子どもの視線じゃないと見つけれられないのも絶対あるっていうのがわかってきたので。自分が美術館慣れしちゃっているんで、っていうか、すれちゃっている部分もあるので、新鮮さの反応がおもしろい…」

「ボランティアはボランティアで、週のうちのパーセンテージとか、半分超えるとやばいぞと思ったほうが。メインがあって、特に〇〇のガイドの性格として、学生さんだったり仕事を持ってたり、主婦としてちゃんと主婦の仕事をやるとか、それでいいと思うんです。何かあって、そっちの生活がちゃんとあってそれがそのままボランティアのガイドに生きる気がする…」

ボランティアが、活動を通して来館者とともにボランティア自身も学び、来館者やボランティア仲間

との対等な関係のなかでこそ発する言葉や、かかわりを持つことで誘発され、さらに、自己の立ち位置をふり返りながら現在まで活動を続けているといえる。これらの活動は、ボランティアが来館者への学習支援者という位置付けのみならず、学習者であるという認識を持つことによって、学びが駆動され、この学びを通じた活動によって、ボランティア個人の活動と組織の継続性をも保障しうる。ここで語られたことを契機としてさらに生成される学びを捉えていくためには、経年変化的なインタビュー調査が必要となり、本調査の限界がみられる。

5. 考察

インタビュー調査の結果、本調査において捉えうる学びと、本調査を契機に生成する学びという二つの点を明らかにすることができた。

前者の、本調査において捉えうる学びとは、ボランティアが利用者として美術館に身を置き、その経験をもとに来館者に活動をおこなうという自己を、いかに捉えるかというところの変容する過程である。さらに、活動によって来館者やボランティア仲間との関係性を意識しながら活動を発展させていこうとし、ボランティアとしての自己の立ち位置をふり返ることでさらに活動を展開しようという一連の過程である。

その一方で、後者は、ボランティアと筆者という関係性による、まさに本調査を契機に生成される学びである。語りの展開に伴い、初対面である筆者に対してわかりやすく伝えるべく、印象的なエピソードとともに喜びや戸惑い等の感情を垣間見せ、語りを続けていくことで自ら答えを見出だしていくような姿がみられ、ボランティアをする自己形成の一面を伺うことができた。本調査では捉えることができなかったが、この語りを契機に、さらに、活動が展開していくことが期待される。

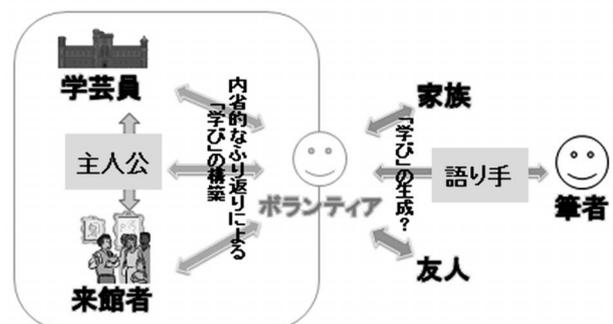


図2 ミュージアム・ボランティアの学び（筆者作成）

この二つの点の異同については、美術館に内在／外在する関係性として、活動を繰り返す時間的経過の差が考えられる。前者が、活動における学芸員や来館者、ボランティア仲間といった美術館に内在する関係性のなかで生じる学びであるのに対し、後者は、目の前にいる聞き手である筆者という関係性のなかで改めて活動を省察するという状態である。そのため、活動についての内省的なふり返りを経ることで、自らのボランティアの学びとして構築されるのである。

今後の課題としては、ボランティアの学びの経年比較、及び、学芸員や来館者にどのような影響を与えているのかについて、さらなる調査を進めていく必要がある。

謝辞 本研究を進めるにあたりご協力いただいた、世田谷美術館、豊田市美術館、兵庫県立美術館の学芸員、ボランティアのみなさまに心より御礼申し上げます。

参考文献

- ・布谷知夫「博物館を活動の場とするボランティアの位置付け」, 博物館学雑誌, vol. 24, no. 2, 1999, pp. 19-28.
- ・大木真徳「博物館運営におけるボランティア受け入れの意義と課題」, 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, vol. 13, 2009, pp. 1-8.
- ・佐藤一子『生涯学習と社会参加—おとなが学ぶことの意味—』東京大学出版会, 1998.
- ・牧野篤「[無償=無上の贈与]としての生涯学習—または、社会の人的インフラストラクチャーとしての生涯学習—」, 生涯学習・社会教育学研究, vol. 33, 2008, pp. 1-12.
- ・立田慶裕, 井上豊久, 岩崎久美子, 金藤ふゆ子, 佐藤智子, 荻野亮吾『生涯学習の理論—新たなパースペクティブ』福村出版, 2011.

ミュージアムをつなぐ試み

～生涯学習センターが

ハブ機能を発揮する～

三重県生涯学習センター所長

河原 孝

1. 試みの背景

三重県にはミュージアムが官民合わせて106館存在する。(登録18館、相当3館、類似85館)。県立ミュージアム相互の連携は県当局の指導によって、この10年来さまざまな取り組みがされてきた。しかし、取り組みは個別的、単発的で各ミュージアムを横断する効果的で継続的な事業や仕組みは生まれていない。市町や民間のミュージアムにおいては連携の動きはほとんどない。連携や協働が進まない理由は何だろうか。連携を模索する際によく指摘されるのは次の理由である。

- (1) 各ミュージアムは専門性を異にし、それぞれが所蔵するコンテンツを活用した事業を展開するため、事業内容で連携することが難しい。
- (2) 県立施設間では共通の広報や利用券などによって幅広い学習や集客を意図したが、肝心の学習ニーズに共通性がなく、立地や交通アクセスもばらばらなため成果を挙げられなかった。
- (3) 各ミュージアムにはそれぞれ類似施設間で協議会が設置されているが、これらの協議会は施設同士の情報交流や研修に重点が置かれ、県民対象の事業を目的としていない。ジャンルを越えて県民の生涯学習を目的とした事業を行っている協議会は存在しない。

こうした困難は確かにあるのだが、もっと大きな問題は現場のスタッフ、リーダーが連携を本当に必要と感じているのかどうかである。異質でコンセプトの異なるミュージアムが連携するためには、自分たちの方法論にこだわってはいけないうまくいかないのは当然である。連携を進めるには自分たちの方法論を変えたり譲歩しなければならない。この協議や調整の困難が連携をためらわせるのではないだろうか。そうだとすると、ミュージアムのトップのリーダーシップが不可欠であるし、中心となるスタッフの情熱も必要になる。私たち生涯学習センターが連携を呼びかける際に、もっとも重視したのがこの点である。

2. 三重県生涯学習センターの事業スタイル

三重県生涯学習センター事業の柱は、学習情報の提供と学習機会（講座やセミナー、ワークショップ）の開発や実施である。この柱自体は全国どここの生涯学習センターでも大きな違いはない。ただ、私たちはこれらを数量ともに充実させ、多くの県民が参加して高い満足度を得られるようにするために、事業の進め方として次の方法を重視してきた。

- (1) 多方面との連携、協働をすすめること。たとえば県内すべての大学等との連携による講座「みえアカデミックセミナー」を継続して実施している。
- (2) 主体的に参画するボランティアや中心となる人材を育て、支援し、一緒に取り組んでいる。（学習情報の入力作業は情報入力ボランティアによる、講座の企画・運営も講座ボランティア、また所蔵の視聴覚ソフトを活用した名作映画会の上映もボランティア、その他県内の諸団体によるネットワーク事業など県民の参画は多岐にわたる）
- (3) 県内各地への展開。アウトリーチ活動は全事業の約4割に達している。
- (4) マネジメントを強化し、品質を向上させる。（ISO9001や経営品質の手法を導入して継続的な改善を組織的におこなっている）
- (5) 指定管理者として事業目標の達成と、次期指定管理の獲得に向け新事業モデルの開発をおこなっている。

今回のミュージアムセミナーへの取り組みは、私たちの事業スタイルにふさわしいものといえるだろう。では、ミュージアムセミナーに取り組むメリットは何だろうか。

3. ミュージアムセミナーを実施するメリット

生涯学習センターにも各ミュージアムにもメリットがなければ長続きしない。それぞれにどんなメリットがあるだろうか。

- (1) 生涯学習センターのメリット
 - ◆ミュージアムセミナーはセンターの新しい事業モデルや柱になる。事業目的をはっきりさせ、中長期の目標や計画を立てて実施することで、継続性が生まれ、より質の高い学習機会を提供することができる。
 - ◆各ミュージアムのコンテンツ、情報、人材を活用できるため講座開発コストが少ない。

(2) 各ミュージアムのメリット

- ◆集客増と広範囲の宣伝
各ミュージアムが実施する企画展の見どころ講座や、プレ展示などを実施することによって、各ミュージアムの広報と集客につながる。
- ◆セミナーの会場費用、広報、集客などはセンター業務となるので、各ミュージアムの負担が軽くなる。

(3) 県民にとってのメリット

- ◆専門性や設置者の枠にとらわれず、ミュージアム横断的にセミナーに参加することができる。美術、歴史、文学、自然などの専門性のジャンルも、県立、市立、私立など設置者の違いも無関係に講座に参加することができる。
- ◆遠方のミュージアムを知る機会になる。三重は南北に長く、遠くのミュージアムへの認知が進んでいない現状を改善できる。

(その他)

- ◆三重県では2014年に新県立博物館がオープンする。この時、新県立博物館だけに話題が集中するのではなく、三重のミュージアム全体が活性化するように物事を進めるには今が良いタイミングである。
- ◆このような新規事業を継続して実施できるのは私たち三重県生涯学習センターの他にはなく、センターの存在感を高めることができる。

4. 事業目的と方法の明確化

多様なミュージアムが連携する場、すなわちプラットフォームが用意され、相互に自由に連携、協力がすすむ状態が理想だが、現状はほど遠い。しかし「つなぐ」こと、すなわち生涯学習センターがハブ機能を発揮することは可能だ。どんなハブ機能を目指すのか。

(1) センターが果たすハブ機能

- ◆地域のミュージアムを他の地域の人々につなぐ試み……広範囲の認知と集客
- ◆美術、歴史、文学、自然などジャンルを越えてつなぐ試み
- ◆ミュージアムと生活をつなぐ試み……ミュージアムを巡る旅やレジャーへの展開
将来的には観光とつながり、ミュージアムツーリズムへ展開したい。また、生涯学習センターが仕掛

事業企画について(これまでとの違い)

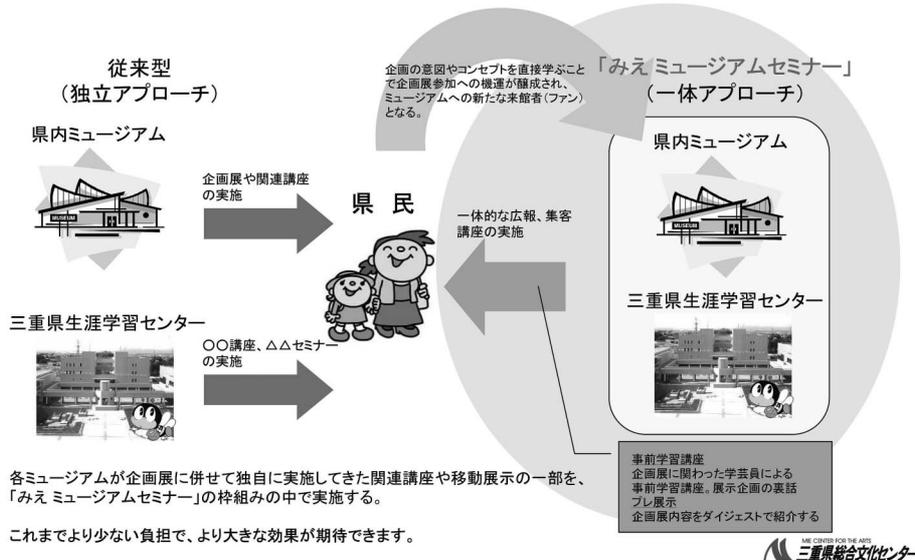


図1 提案資料

けるミュージアム連携は、生涯学習ツーリズムという新しい分野へ進むきっかけになる。

(2) 事業の進め方

◆参加館への呼びかけ

すべてのミュージアムの参加は想定してはいない。このセミナーは県内初のため、当面はさまざまな可能性を試していく。したがって制約となりかねない常設の組織や協議会はつくらない。ミュージアムの館長などトップのリーダーシップや職員の情熱が不可欠で、各ミュージアムで新規企画に意欲的に取り組んでいることや、目玉となる一押し企画やコンテンツがあること、実施後に入館者が増えるなどの効果が期待できるなどが決め手になる。

◆センターとミュージアムとの役割分担

センター：事務局を担当する。各ミュージアムによる講座をプロデュース。講座、展示場確保、県全域への広報、集客、受付等。
各ミュージアム：講座の実施、講師派遣、展示実務

5. 構想会議 館長の思い入れや夢を語り合う

2012、2013年度を試行の年と位置づけ、2012年は次のミュージアムとスタートさせることにした。

- ◆パラミタミュージアム (三重県北部、美術、民間)
- ◆本居宣長記念館 (三重県中部、文学、民間)、
- ◆海の博物館 (三重県南部、自然、民間)

◆斎宮歴史博物館 (三重県南部、県立) の4館と実施。

2011年の秋から個別に館長を訪ねてセミナーの趣旨を直接説明し、賛同を得た。これらのミュージアムは意欲的な企画や運営の工夫、あるいは館長がポリシーを明快に発信しており、ジャンルや地域を考慮して決定した。

2012年当初に関係ミュージアム館長、企画責任者出席によって「構想会議」を開催し、専門性や設置者の違い、地域を越えたミュージアム連携の可能性、三重県のミュージアムの現状などを率直に議論した。各ミュージアムを牽引しているだけあって、前向きで大胆な提案が相次いだ。たとえば集客のためのインセンティブの提案や4館合同のプレイベントの実施などがどんどん決定された。やる気のある館とキーマンが勢揃いした効果である。

6. 実務体制の整備

……各館実務担当者会議の立ち上げ

構想会議を受けて実務的な具体化の作業に入った。生涯学習センターではミュージアムセミナー担当者を決定し、2012年度の分掌に位置づけた。

(1) 担当者会議

構想会議を受けて急遽実現することになったのであるが、実施するからにはインパクトのあるプランを提案しなければならない。各ミュージアムに担当者の選出を依頼。担当者会議で次の事項を決定した。

(2) 事業名称

「見る・知る・巡る！ みえミュージアムセミナー」各館のセミナー日程、展示期間の決定

(3) 各館で提供可能なインセンティブの協議

セミナー参加者を来館者にするための手立てとして、入館料の割引、グッズ（図録）、特別の案内員配置など各館ごとに可能なことを自由に設定。

生涯学習センターは特製バインダーを制作してセミナー参加者に提供。

(4) プレイバント「先ドリ！セミナー」の実施計画

ミュージアム活性化を仕掛けている著名人による講演と各館のプレゼンテーション、4館合同のミニ展示を実施する。2012年8月25日（土）生涯学習センター会場

I部 メインスピーカーとして

中村 元氏

（水族館アドバイザー、三重県出身）

「観覧者の通になる

～集客できるミュージアム～」

II部 4館によるリレーセミナー

III部 「先ドリ展示」への案内

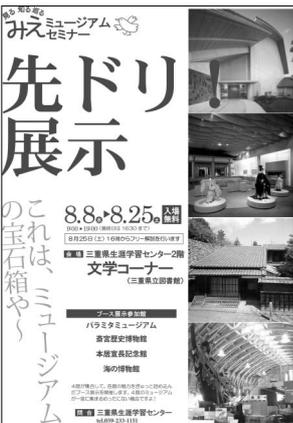


図2 先ドリ展示ポスター



図3 先ドリセミナー様子

7. 広報計画

県民への周知が重要。今回の計画は三重県初のため認知度を上げる必要がある。また、県生涯学習センターが官民を越えたミュージアムのハブになることは全国的に見ても例がないと思われる。こういう「初物」のセールスポイントを発信する。

チラシ、ポスター等はセンターが制作して県内各所に配布、配架した。参加館もそれぞれの地域やつながりを活用して連動効果を発揮する。また、マスコミ等のメディアに対してはセンターのパブリシティ活動として「初物」を強調していく。ここではセンターと参加館が連動して発信力を強めることをねらう。



図4 ミュージアムセミナーチラシ

8. その後の経過

(1) 県立図書館の協力「ブックリスト作成」

県立図書館の協力によって、各館のセミナーに沿った参考図書リストを配布することができた。これによってセミナー参加者は図書館でさらに学習を深めることができる。図書館ではリスト掲載書籍のコーナーが設けられて配架されている。その結果、リストの書籍の貸し出し件数が増えている。

(2) 商工会議所の協力

「海の博物館」が立地する鳥羽市の商工会議所から、セミナー参加者対象のバスツアーの費用補助が得られた。新たに「巡る！うみはく」というバスツアーを企画したところ、満席での実施となった。

(3) セミナー参加者

4館によるセミナーが終了し、その後各館の入館者を集計したところ、セミナー参加者の約2割が入館していることがわかった。

小学生向け古文書解読プログラムの開発・実践とその意義

山梨県立博物館 学芸員
高橋 修

1 小学生向けだから必要とされる古文書解読プログラム

筆者が専門とする江戸時代の歴史資料、とりわけ古文書は当該地域の歴史を知る上で不可欠の歴史的遺産である。山梨県立博物館（以下「当館」）では、これら古文書類を約19万点収蔵し、当館全収蔵品約20万点の中、約95%を占めている。かかる事実に基づくなら、全国的には恐らく「億」単位の数量でそれらが存在することは想像に難くない。当館のような歴史系博物館にあっては、古文書とは収蔵資料の中心であり、調査・研究や展示等の各種博物館活動にあっては、その主役となり得るものといえるであろう。

しかしながら、歴史系博物館における利用者の展示観覧動向を観察すると、古文書展示のコーナーは敬遠され、素通りにされてしまうのはよく見られる光景である。古文書解読のためにはある程度の専門的な知識・素養を必要とすることから一般には馴染みにくく、利用者には心理的な抵抗感が生じてしまうのであろう。社会全体という観点からすれば、古文書に対する興味・関心はかなり薄いのが現状である、とまずは捉えなければなるまい。

一方で、東日本大震災に代表される大規模災害とその後の文化財レスキュー活動に見られるとおり、古文書類の保全は急務であり、またそのためには博物館界だけでなく社会全体の理解が求められている。古文書は博物館等の資料保存機関が中心的役割を担いながら、社会全体で保存する体制を構築する必要がある。そのためには古文書の有する重要性について広く社会全体に対して喚起する策を講じるのは歴史系博物館の第一の使命といえよう。

こうした課題への対応の一環として、既に全国各地の歴史系博物館において社会人向けの古文書解読講座が実施されており、当館にあっては原則毎月開催し、常時、高齢者を中心として会場が満席になる程の人気を誇っている。だが、従前の博物館教育の世界では古文書とは大人向けという先入観があり、子どもを対象として体系的に教育プログラムを構築する事例はあまり見られなかった。歴史系博物館の利用者層のうち、その大半を占めるのは高齢者と小中学生である。博物館の利用者層という「量」の視

点に注目するならば、小中学生を対象とした古文書解読講座プログラムを構築することが必要である。

古文書解読の基本とは文字のくずし方の基本パターンを覚えることにあり、パズルの要素が極めて強い。こうした形状認知的な作業は大人よりも小中学生位の子どもの方が優れた素質を有しており、くずし字解読はむしろ子ども達にこそ相応しい学習内容といえる。事実、江戸時代の寺子屋にあって、くずし字を学んでいたのは7～12歳程度の子どものみであり、これは丁度、現在の小学生と同じ位の年齢に相当する。江戸時代の子ども達がかずし字の読み書きが可能であったのだから、現在の小学生でもそれは十分に可能と考えられるのである。

したがって「小学生だから読める古文書」という視点からの教育プログラムの開発は、社会全体で古文書をはじめとする地域の貴重な知的資源を保全することにつながるのみならず、ミュージアムリテラシーの涵養という視点からも喫緊の課題といえるだろう。

2 「小学生向け古文書解読プログラム」の開発と実践

小学生向けの古文書解読プログラムを実施するにあたり、専用の授業セットとして次に掲げる①～③の3点を用意した（写真1・2）。①古文書解読にあ



写真1 古文書解読プログラムの授業セット。出前授業・貸出教材としても対応できるように、移動用整理箱の中に全て一式が収納されている。



写真2 専用の古文書講座テキスト

たり不可欠の書籍である『古文書辞典』を1学級40人分(40冊)、②A6判41頁の古文書講座テキスト、③②の内容に沿って授業を進めるためのパワーポイントデータが保存されたCD-ROMである。

上記の中、主となるのは②のテキストであり、その編集にあたっては次の諸点に配慮した。第1に段階を追って、対象学年と難易度を向上させるよう配列したこと、とりわけ上記①の古文書辞典を独学で使いこなすことが出来るように考慮して順次、難易度を向上させる配列としたこと。第2に自由に学習コースを選択できるよう配列したこと。第3に大人向けの古文書講座でも使用できるよう配列し、事实上、誰もが古文書の5割程度は読めるように工夫したこと。第4に古文書解説をとおして、地域の歴史・文化に興味関心が抱けるよう配列したこと。第5に単に古文書を解説するだけでなく、くずし字をなぞる体験的要素も加味し、そのことを通して、くずし字で文書が作成されたことの歴史的意味についても解説するといった工夫を施したことである。

以上の編集方針を踏まえ、次に留意すべきはテキストにおける解説古文書(資料)選定のための視点である。具体的には『甲斐国四郡村高帳』(当館蔵、写真3)という甲斐国(山梨)全村の石高(生産高)が記された資料を学習対象の中心に据えた。その理由として、まず、同資料は大半が数字で構成されていることから、古文書初学者、とりわけ小学生にとってもすぐに文字判別と内容把握が行い易いという利点がある。次に江戸時代の山梨全村の石高が統一の様式の下に掲出されていることから、各学校所在地の歴史情報がピンポイントで記されているという利点があることである。大人と異なり、日常的な移動手段が限られている子ども達にとっての「地域」

とは、自転車等で動くことの出来る通学圏がその範囲であろう。本資料は山梨県内のどの地域で授業実践をしても子ども達に身近に感じることが出来る内容となっている。3点目として、本資料は「石高」という教科書に記載されている歴史的にも重要な事項を取り扱っていることから、子ども達が自分達の住む地域の石高を知ること、他地域との比較や全国の中での位置づけを探るきっかけにつながり得るという利点があることである。

以上、本節で述べた意図に留意しつつ、出前講座・貸出教材としても使用可能となるよう古文書授業のセットを開発し、授業実践を行った。具体的には次の2校における「総合的な学習の時間」の枠で御協力をいただいた。

- ・平成24年1月20日：昭和町立押原中学校1年生215名を対象
- ・同年1月30日：笛吹市立石和東小学校5年生37名対象

石和東小学校ではアンケートを実施し、生徒からの回答では「本やドリルなどで勉強しています。でも古文書などはのっていないのでとても勉強になりました。とっても楽しかったです。(中略)博物館にもいって米俵など見てみたいなあーと思いました」とあり、担任の教諭からも「子どもたちの感想にもあるように、とても楽しい時間になりました。普段全く学習することがないことを、直接、学べるところに博物館の良さがあるように思います」とあり、本プログラムは小学生だからこそ短時間に古文書解説が可能ということ、また古文書解説をとおして博物館・地域に対する興味・関心を喚起し得ることを実証したといえるであろう。

3 「小学生向け古文書解説プログラム」開発の意義

古文書学習は、日本史(社会科)はもとより古文・漢文・書道等にも関連し、既存の教科の枠組みを超えた横断的な新教科に発展する可能性を秘めている。まさに博物館の生きた資料を用いた新学習の構築に向けて有益な素材といえる。

また、古文書は当館の収蔵資料の大半であるという現実から、展示資料の中でも数量的にある一定の割合を占め、本学習プログラムをきっかけとすることで小中学生によるミュージアムリテラシーの向上にもつながり得るものである。当館の場合、学校の教育課程による利用実績は全体の1割を占めることから、彼等の博物館に対する興味・関心を高めることは博物館運営上でも重要である。

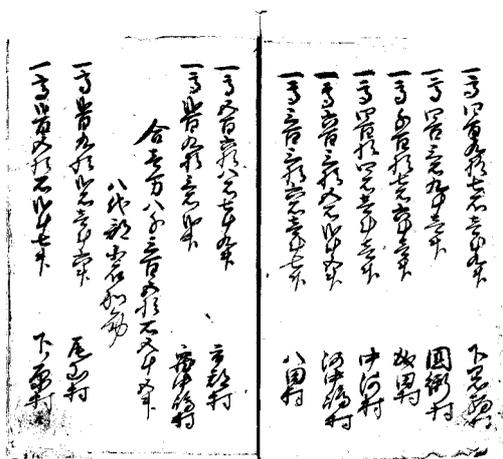


写真3 『甲斐国四郡村高帳』(当館蔵)の一部

本稿冒頭に述べたとおり、古文書は当該地域の歴史を探る上で唯一無二の知的資源であり、その意味・内容を伝えることは、平成18年の新教育基本法で謳われている郷土愛の涵養にも資する先駆的な博学連携事業となり得るであろう。

本研究は資料保存機関としての博物館が持つ社会的役割を鮮明にする上でも意義を有する。江戸時代の古文書について述べるなら、1980～90年前後頃から資料保存機関としての文書館側からは独自の資料論が提起され、社会の中における文書館の位置づけを明確にしていった。具体的には文書を「単体」ではなく「群」として捉え、その文書を作成・伝存させた組織体の特質を復元するために、現状維持原則・原秩序復元原則による資料整理論・保存論を展開した。

現在は、こうした文書館側からによる資料論の優れた達成を前提とした上で、博物館界側からも固有の資料論を構築すべき時期にあるといえる。こうした点から博物館の進む方向性を模索するに、その特質として、幅広い世代に開かれた施設であることに着目したい。資料保存機関としての博物館は生涯学習機能に重点が置かれ、その主要対象として「子ども」が含まれることにはなお一層の自覚が必要である。かかる観点からすれば、「資料の教育論」こそ博物館界にとって今後、ますます重要になるといえるであろう。子どもの時代から古文書解読授業を受けることで、資料保存に対する意識を高めることは、社会全体で古文書をはじめとする資料保存意識を醸成していく上で重要な階梯となり得る。資料保存のための意識面を育む「資料の教育論」と実際に資料を未来に伝えていくための物理面での「資料保存論」とを密接に絡めた事業展開は博物館固有の資料保存の在り方として、今後、論理的にも深めていくべきである。

本研究はその入り口の一端を示したものであり、また、山梨以外の他地域でも応用が可能である。本稿で述べた留意点を踏まえ、全国各地で子ども向けの古文書読解授業が実践され、理論的に深められることを願ってやまない。

※本研究は公益財団法人 日本科学協会から平成23年度笹川科学研究助成を受けて実施しました。同財団に記して謝意を表します。

被災地の心を伝える展示をめざして

「震災からよみがえった東北の文化財展」の概要と展示のポイント

「震災からよみがえった東北の文化財展」実行委員会
若月 憲夫

「震災からよみがえった東北の文化財展」は、東日本大震災の被災からレスキューされた文化財等を一堂に集めて、集客力や情報発信力の高い東京で公開することによって、被災地への支援を呼びかけ、地域社会における文化財の大切さを再確認していくことをねらいとして開催された。この展示会では、被災地の心を伝えるとともに、文化財レスキュー活動を支えた学芸員をはじめとする専門家の様々な人間ドラマを来場者に伝えることをねらいとした様々な展示の工夫がなされている。

本年度のJMMAの大会テーマは、「社会のためのミュージアム ―心に残る新たな表現―」であるが、それを具体化した展示の事例として、この展示会の概要について報告する。

■遠野市の文化財レスキュー活動

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、多くの人命や、生活・産業の基盤を奪い去った。同時に、地震や津波によって、数々の貴重な文化財も失われた。こうした文化財を守るための「文化財レスキュー活動」が、文化庁の指導の下で、いち早く開始され、全国の博物館関係者が、その活動に参加した。

岩手県遠野市は、古くから三陸沿岸各地と関わりが深く、このたび震災で大きな被害を受けた、陸前高田市や大槌町とは、車で1時間～1時間半程度の距離にある。日頃から学芸員間の交流も盛んであり、遠野文化研究センターや遠野市立博物館の職員が津波の被害を受けた文化財を回収して応急処置を施すレスキュー活動に取組んだ。そして、こうした活動とその成果をいち早く市民に紹介するための企画展が、遠野市立博物館の夏季テーマ展として開催された。

平成23年度遠野市立博物館夏季テーマ展

「文化財を救え！」

東日本大震災と文化財レスキュー展

日時：平成23年7月22日(金)～9月29日(木)

場所：遠野市立博物館企画展示室

震災から半年もたたない7月に、津波の被害こそ無いものの被災地のひとつである遠野で、こうした企画展が開催されたのは、その当時、遠野が災害ボランティアの拠点であったことに起因する。瓦礫と一緒に、文化財が捨てられてしまうこと避けるために、ボランティアの方々や被災者の方々に、「文化財レスキュー」という活動があることを知って頂くとともに、文化財の価値を知っていても、泥まみれだったり、壊れているので諦めかけている人びとに対して、ひょっとして「文化財レスキュー」で救えるかもしれないということを伝えるというねらいがあったという。

■「震災からよみがえった東北の文化財展」の概要

この遠野市立博物館の企画展がきっかけとなって、震災後一周年となる平成24年3月11日前後に「文化財レスキュー」によって救いだされた東北の文化財を一堂に集めて、東京で展示会を開催してはどうかという計画に発展した。遠野市〔遠野文化研究センター・遠野市立博物館〕を中心としながらも、全国的な情報発信としていくために、日本ミュージアム・マネジメント学会が加わり、三陸沿岸の自治体も含めた「実行委員会」が組織された。また9月には、文化庁の「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 ミュージアム活性化事業」という補助金を受けることも出来た。そして会場は、企画から開催まで半年にも満たないなかで、幸運にも都立中央図書館にお願いすることが出来た。

このような経緯で開催された展示会の概要は、以下の通りである。

「震災からよみがえった東北の文化財展」

日時：平成24年2月26日(日)～3月11日(日)

場所：都立中央図書館

(4階企画展示室及び多目的ホール)

内容：岩手県を中心に、宮城県や福島県の被災した文化財等を救出・修復にまつわるエピソードとともに展示するほか、平成23年3月11日の地震発生当時を記録映像や報道資料等で振り返る。

主催：「震災からよみがえった東北の文化財展」実行委員会

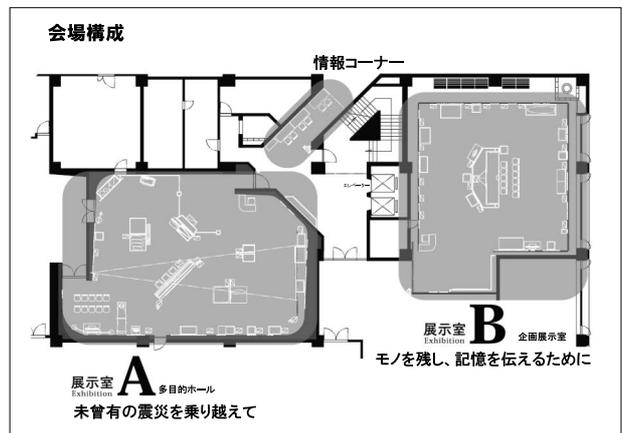
遠野文化研究センター・遠野市立博物館、陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町、宮古市、東京都立中央図書館、日本ミュージアム・マネジメント学会、NPO法人日本子守唄協会

■会場構成と展示のポイント

会場は、都立中央図書館の4階であるが、多目的ホールを展示室A、企画展示室を展示室Bとした2室の構成とし、それぞれにテーマを持たせた。

展示室A(多目的ホール)では、「未曾有の震災を乗り越えて」をテーマに千年に1度ともいわれる大津波の被害に直面する中で、文化財を救い出すために尽力してきた三陸沿岸の人々の姿を、救い出された文化財とともに紹介することをねらいとした。

一方、展示室B(企画展示室)では、「モノを残し、記憶を伝えるために」をテーマに、記録資料、埋蔵文化財、仏像や美術品、動植物標本、剥製など、資料の特性に応じた文化財レスキューの取組を分野別に展



展示室A（多目的ホール）未曾有の震災を乗り越えて



展示室B（企画展示室）モノを残し、記憶を伝えるために

示構成した。都立中央図書館の資料保全技術も紹介するなど、会場館とのコラボレーションも意識した。

展示は、遠野と関わりの深い三陸沿岸を中心としながらも、東北全体にも視野を広げること。モノ（文化財）の背景にある物語（ドラマやエピソード）を浮き彫りにすること。解説パネルやケース、映像は、巡回展として再利用できるようにすることなどをポイントに制作した。その概要を紹介する。

■導入展示

津波に呑み込まれ瓦礫と化した陸前高田市博物館の室内にノートの切れ端のようなメモ書きが残されており、そこには「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然・歴史・文化を復元する大切な宝です、、、」と書かれてあった。誰が書いたのかはわからないのだが、遠野市立博物館の学芸員は、それを見たときに、亡くなった博物館職員の声のように感じ、その言葉を胸に、文化財レスキュー活動に精力的に取り組んだという。この「瓦礫の中のメッセージ」を展示全体のスタートとした。

また、震災後1年が経ち、その記憶の風化が懸念される中で、震災当日「あの日を忘れない」ために、津波の様子を刻々と映し出す大型映像や震災を伝える新聞記事、そして、津波が襲ったであろう時間で止まった時計を展示した。

■エピソード展示

レスキューされた文化財の背景にある物語を興味深く伝えていくための方法として採用したのが、エピソード展示である。

解説サインは、メッセージコピーを読むだけで展示の意図が判るようにし、英訳や詳細を解説したキャプションも用意した。この解説サインと展示ケースや写真パネルをワンセットにしたものを、一話完結型の展示＝エピソード展示とした。

たとえば、壊れていたためビニール袋に入っていた土（つち）人形が、奇跡的に津波の被害を免れたという話や“漫画は昭和の浮世絵”が口癖だった亡くなった学芸員の気持ちを考えて、漫画をレスキューの対象にしたという話。また、資料タグが付いていたお陰で、瓦礫の中にあっても博物館資料と判別できたという話など、文化財を救った人間ドラマの数々を紹介した。また、津波の猛威を物語る話として、半分は海に流され半分だけ残ったオオシャコ貝の話や津波石の話などを取上げた。さらに陸前高田の「奇跡の一本松」など、34のエピソード展示を実

現した。

また、これに加えて、「民俗芸能は心のよりどころ」「よみがえれ奇跡の海」「津波を語り継ぐ」「復興した三陸のまち」など特徴的なテーマを物語るテーマ展示や文化庁、岩手県、宮城県、福島県の文化財レスキュー活動の現状を紹介する展示等を設けた。

■地域社会における文化の大切さをアピール

この展示会の効果だが、震災から一周年を契機に、国民全体があらためてその犠牲者に哀悼の意を表する一方で、被災地以外では、ややもすると被災の痛みを思いを馳せる心が薄れていく中であって、文化財のレスキュー活動を通じて、あらためて地域社会における文化の大切さをアピールすることができた。

津波等の被災から文化財を守る活動は、緊急的な救出活動に加えて、その後も続く息の長い取り組みが必要である。そのためには、文化財保護への社会的な理解を深めていくことが必要不可欠である。

会場となった都立中央図書館は、知的水準が高い層の人々が集まるところが特色であるが、2週間で5千人近くの人々に展示をご覧いただけたことは、文化財を守る活動に対する理解を深める上で大きく役立ったと考えられる。また、図書館を会場に博物館が中心となって企画した展覧会を実施することは、展示におけるMLA連携ともいうべき新たな試みであり、その実績を残すことができた。

そして会期中に、秋篠宮同妃両殿下、眞子内親王殿下にご来場頂けたことは、この展示会が予想以上の社会的反響をもたらしたことを物語っている。さらに、テレビや新聞で取り上げられるなど、展示会に来場できなかった人々に対しても、文化財を守る活動の意義をアピールすることができたと考える。

■東京から遠野へ、そして全国へ

さて、東京での展示会が終了した後、展示は、遠野へと運ばれ、遠野会場での展示会が開催された。企画展示室が小さいので、廊下も使って展示構成し、東京での展示会の9割近くを展示した。

「震災からよみがえった東北の文化財展」遠野会場

日時：平成24年3月16日（金）～3月28日（水）
場所：遠野市立博物館企画展示室

これで平成23年度の活動は、終了したが、遠野会場での展示会の成功は、「震災からよみがえった東北の文化財展」が、巡回展としても成立することを実

証した。

その成果をもとに、平成24年度は、静岡会場（平成24年10月26日～11月12日、静岡県庁別館21階展望ロビー）、大府会場（平成24年11月15日～12月5日、大府市横根公民館ホール）、神戸会場（平成24年12月11日～平成25年1月27日、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター東館3階）の3会場で開催した。

このように遠野市立博物館での企画展をきっかけに始まった「震災からよみがえった東北の文化財展」は、全国へ向けての巡回展へと発展していった。震災から間もなく2年となる中で、文化財を救済する重要性をアピールすることに加えて、今後は、震災の記憶を後世に伝えていく活動や新しい地域文化の振興活動が重要になると考えられる。

その意味で、震災と復興を体験した神戸で展示会を開催できたことは、被災の経験を共有する地域同士がより深くつながっていくためのきっかけとして、大変に意義深いと考えられる。

「震災からよみがえった東北の文化財展」実施報告 来場者アンケート調査からみる 効果測定

文化環境研究所

高橋信裕・鈴木和博・山城弥生

1. はじめに

本発表では、都立中央図書館で行われた展覧会「震災からよみがえった東北の文化財展」の来場者アンケート調査結果について報告する。このアンケート調査は、震災から1年が経過したタイミングという時間性に加えて、公共図書館を会場としたことによる場所性といった視点から、来場者の反応を把握することをねらいとした。展覧会の効果測定とともに、今年度（平成24年度）に継続展開を予定している同展覧会へのフィードバックポイントについて考察する。

2. 展覧会の開催経緯

被災ミュージアムの実態及びレスキュー活動の社会化を目的として、遠野市（遠野文化研究センター・博物館）、岩手県沿岸部被災自治体（陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町、宮古市）、JMMA、NPO法人日本子守唄協会、そして開催会場の東京都立中央図書館が構成メンバーとなり実行委員会が結

成された。文化庁の「ミュージアム活性化支援事業（文化芸術振興費補助金）」に申請し、認定されたことで、3会場（代官山ヒルサイドギャラリー、都立中央図書館、遠野市立博物館）を巡回する移動展として開催された。

展示では、レスキューされた博物館資料や地域文化財の実物とともに、文化財を守る地域の人々や、レスキューに協力し連携する人々のエピソード等が、パネルや映像で紹介された。

また、震災の記録・記憶を先人はどのように伝えてきたのかについて、「遠野物語」や博物館の所蔵する明治・大正・昭和の調査記録資料等が紹介された。

3. 調査の概要

本調査は、東日本大震災の発生から1年を経過する2012年3月11日にあわせて都立中央図書館で開催された「震災からよみがえった東北の文化財展」の来場者を対象に、任意に基づく記入アンケート形式で行った。

- ・会場：都立中央図書館
4階企画展示室及び多目的ホール
- ・会期：2012年2月26日（日）～3月11日（日）
14日間 ※3/1は休館日
- ・来場者数：4,529人
- ・アンケート回答者数：493名（全体の11%程度）

3-1 アンケートのフォーマットとシステム

アンケート用紙の作成とデータの集計には、慶應義塾大学が開発したオープンソース・ソフトウェアSQS（＝Shared Questionnaire System）を使用した。SQSの導入により、約500サンプルのデータ化に要した時間は、約20分弱であった。集計時間を大幅に短縮することができ、作業負担を軽減するとともに、早い段階で結果を共有することができた。定量的な数値による展覧会の効果把握とともに、直筆のままの自由回答は参加者の生の声として、開催者の間で共感を生み出した。

3-2 アンケート配布・回収方法

アンケート用紙を展覧会受付でハンドアウト資料とともに配布することで、来場者全員にアンケートのご協力を呼びかけた。観覧後にアンケートを記入していただけるように、専用のコーナーデスクを設置し、アンケートはその場で回収した。

3-3 アンケートの項目

主なアンケートの項目は、次の通りである。

- ①来場者属性、②満足度、③印象に残った展示、④来場目的・きっかけ、⑤自由感想

3-4 アンケートの結果

・性別について

アンケートの回答にご協力いただいた方は、来場者全体の11% (493名)であった。そのうち、男性が60% (299名)、女性が37% (182名)である。

・来場者の居住地について

東京都にお住まいの方が一番多く65% (325名)、その他の関東地方 (千葉・埼玉・神奈川・甲信越)が26% (131名)、東北地方からの来場が2% (11名)であった。

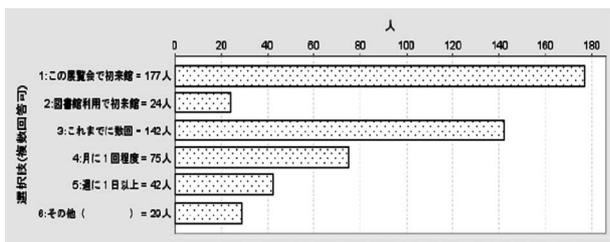
・年代について

40～50代が35% (177名)と一番多く、次いで60歳以上が31% (154名)、20～30代が27% (136名)であった。

・一緒に来館された方について (複数回答可)

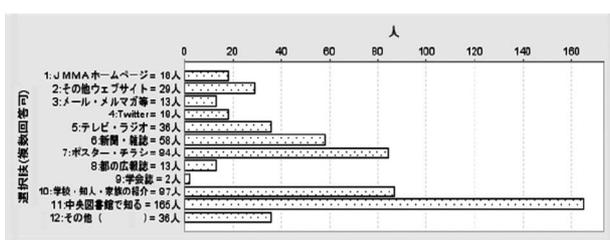
「ひとり」と回答した方が、69% (343名)と多い。次いで、「家族・親戚」が15% (76名)だった。

・都立中央図書館の利用経験について (複数回答可)



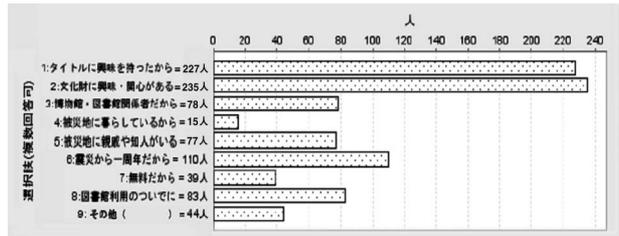
「この展覧会で初来館」と回答した方は、35% (177名)と多いことが分かる。また、「これまでに図書館を利用したことがある」と回答した方は、51% (259名)だった。

・この展覧会を知ったきっかけについて (複数回答可)



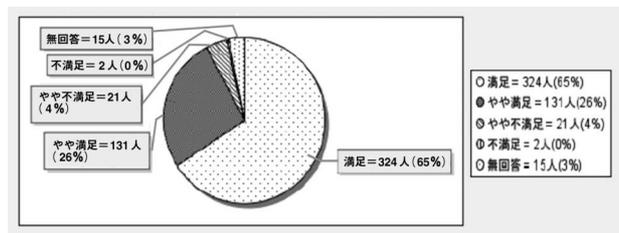
「中央図書館で知る」と回答した方が、全体の33% (162名)と一番多かった。次いで多かったのが、「ポスターやチラシ」と「学校・知人・家族の紹介」でそれぞれ17% (85名)程度だった。

- ・この展覧会を見ようと思ったきっかけについて (複数回答可)



一番多かったのは「文化財に興味・関心がある」で47% (235名)、次いで、「タイトルに興味を持ったから」が46% (227名)、「震災から一周年だから」が22% (110名)だった。

- ・この展覧会の満足度について



「満足した」と「やや満足した」を合わせた91% (445名)の方に「満足」との回答をいただいた。

- ・印象に残った展示について (複数回答可)

結果を報告する前に展示内容について、簡単に紹介する。

都立中央図書館の同一フロアにある2つの展示室を使用し、「未曾有の災害を乗り越えて」(A展示室)、「モノを残し、記録を伝える」(B展示室)の2つのテーマで展示が行われた。

「未曾有の災害を乗り越えて」(A展示室)では、主に、三陸沿岸部の津波の被害を受けた地域(気仙沼市、陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町、宮古市)の文化財やレスキュー活動、施設の被災状況等について、地域ごとに展示された。

「モノを残し、記録を伝える」(B展示室)では、化石、昆虫・貝・植物などの標本資料、剥製資料、行政文書及び古文書、絵画、土器、刀剣、仏像など、専門家によるレスキュー活動の展示と、明治・大正・

昭和の津波の記録資料や、明治地震津波に遭遇した男性の一年後の心境について描かれた「遠野物語99話」が、映像とナレーションで紹介された。

《A展示室 展示》

一位は、「瓦礫の中のメッセージ」59% (291名)。陸前高田市立博物館の瓦礫の中から見つかった一枚のメモ書きが、学芸員の心を動かし、レスキュー活動を始めるきっかけとなったのだが、展示室の導入部に置かれた本展示は多くの人の印象に残ったようだ。

《A展示室 エピソード展示》

A展示室で人気のあったエピソード展示は、「再び現れた津波石」が41% (205名)、次いで「学芸員の意志を受け継ぐために」が37% (186名)、「瓦礫と資料を分けるもの」が33% (167名) だった。「再び現れた津波石」は、昭和8年の津波の際に流された巨石の拓本を展示した。甚大な津波の威力を伝えるとともに、人々に忘れられて、いつしか埋められてしまった津波石が今回の地震で再び現れたというエピソードである。また、「学芸員の意志を受け継ぐために」と「瓦礫と資料を分けるもの」は、博物館職員や学芸員の日常の地道な業務を伝える展示であった。

《B展示室 展示》

一位は、「文化財レスキュー活動」43% (215名)。博物館資料や文化財をレスキューする専門的な取り組みを、被災した資料とともに紹介した展示である。一時的な処置が取られたものの、水浸による被害を生々しく伝える資料が展示された。

《B展示室 エピソード展示》

B展示室で人気のあったエピソード展示は、「子ども達も文化財レスキュー」が30% (151名)、次いで「執念の発見と保存」が29% (146名)、「明治の三陸津波を見た男」と「残った昭和三陸津波の記録」と「後世に伝えたい津波の記憶」がそれぞれ28% (140名程度) だった。

「子ども達も文化財レスキュー」では、レスキューされた土器片を地元の子供たちが洗浄するエピソードを紹介した。「執念の発見と保存」は、津波により被災した博物館の瓦礫の中から重要文化財であった蕨手刀を発見したエピソードと鉄製品の保存の難しさを紹介したものである。また、「明治の三陸津波を見た男」と「残った昭和三陸津波の記録」と「後世に伝えたい津波の記憶」は、その時代の方法（明治には紙、昭和には写真、現在は映像）で記録された、地震津波の被害とまちの再生についての資料である。

・展覧会の感想や文化財レスキューについての意見等の自由記述

回答者の約4割(202名)という大変多くの方から意見や感想が寄せられた。「東北の文化財について知った」また、「文化財レスキュー活動について知った」、「何か手伝いたい」、「感動した」、「多くの人にこの活動を知ってほしい」、「全国で展覧会を開催してほしい」などである。

「瓦礫の中のメッセージ、学芸員の言葉が印象に残りました。過去と未来をつなぐべく博物館の使命の一つなのだと感じます。」

※自由記述欄をSQSで読込んだ画像の一つ。この画像がまとめて一覧に表示される。

3-5 まとめ

一都立中央図書館で開催したことについて一日頃、一般の方が使い慣れている社会公共施設の「利用のついでに来場」51% (259名) といった効果があった一方で、アンケート回答者の内、図書館に「初来館した」方が全体の36% (177名)、その内、来場の動機を「文化財に興味・関心がある」と回答した方が21% (104名) と多かった。

4. 「震災からよみがえった東北の文化財展」の今後に向けて

文化財レスキュー活動がもたらしたものは、1. 文化財レスキュー活動が地域社会や現代の日本の社会に「文化財」の存在意義を強く認識させた、2. 「文化財」が、人々の精神的な基盤形成に深くかわり、コミュニティの融和と発展に寄与してきたことに対する気づき、3. 「文化財」が実は身近なところに存在していることへの驚き、であると言える。

レスキューされた「文化財等」の帰属機関の縦割り構造 (M=博物館 (美術館、資料館、科学館など)、L=図書館、A=公文書館) があるものの、いわゆる文化財とともに図書、公文書、標本など、レスキューされた地域の歴史遺産や資源等を一堂に会した本展覧会では、保存、継承、活用を担う施設、機関の見直しの必要性や、震災以前からではあるが、行政の財政難という人為的な津波がもたらす問題等を改めて考える機会となった。

また、都立中央図書館で、本格的な博物館資料 (文化財、民俗資料、化石、昆虫・貝・植物などの標本資料、剥製資料、文献、土器、刀剣など) を用いた展覧会を開催することは初めての経験であり、普段は多目的ホールとして使用される会場が博物館の展

示室ようになったことは、図書館の関係者にとっても、驚きだったようだ。震災後に、「被災地を応援したい」、「何か協力したい」、という気持ちを多くの方が持っており、そのような中で、図書館とのコラボレーションが実現したのだと思う。

展覧会の内容について、都立中央図書館ならではの提案があった。都立中央図書館には、図書の修復を行う部門があり、同建物内に専用の設備がある。これは、震災や火災で被害を受けた文化財（特に書籍や卷子）の保存や修復にも関係する事業である。本展覧会では、古書の修復技術や緊急時の対応等についても紹介した。

また、同図書館では各都道府県の地方紙の閲覧が出来るのだが、展覧会では、震災直後の東北3県の報道（河北新報、福島民報、岩手日報）を紹介し、都立中央図書館で47都道府県の新聞を閲覧できることをご案内した。

今年度（平成24年度）も4会場（静岡県静岡市、愛知県大府市・安城市、兵庫県神戸市）で、移動展が予定されている。移動展の会場は、富士山展望ルームや、公民館など、住民にとっては馴染みのある公共施設である。このような移動展の取り組みをきっかけにミュージアムと図書館、公民館等の双方にとって良い相乗効果となり、垣根を越えて連携が深まるように今後も務めたいと思う。

科学系博物館における継続型教育・学習プログラム実施状況の実態調査

公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館
小林 みか・田代 英俊
中村 隆・木村かおる

1. 目的

今回筆者らは、全国の科学系博物館における教育・学習プログラムの実施状況について実態調査を行った。調査内容として、博物館の展示を通じた学びは一過性のもとなりがちであるため、その対策として、1回限りで完結する講義や講演、実験、観察、工作の実施（以下、1回完結型・学習プログラム）と、数回にわたり継続する教育・学習プログラムの実施（以下、継続型教育・学習プログラム）が、どのくらい頻繁に行われているのかを調べた。

またこれとあわせて、友の会などの会員組織を設けることにより、教育・学習プログラムの運営の円

滑化がはかられているのではないかと考え、会員組織の運営状況についても調査した。

これらの事業は博物館活動として各館で当然行われていると考えられるが、その頻度や内容については、全国レベルで必ずしも明らかになっていないことから、先行研究に加え、その実態を明らかにしたいと考えた。

2. 調査方法

日本博物館協会に加盟している理工系博物館177館、及び、全国科学系博物館協議会や科学系博物館連携協議会に加盟しているが、日本博物館協会のデータから漏れている科学系博物館を加えた合計225館を選び、アンケート票を送付した結果、125館から回答を得た。

アンケートの主な質問内容は次の通りである。

- ・自館の属性
- ・1回完結型・学習プログラムの実施状況
- ・継続型教育・学習プログラムの実施状況
- ・会員組織の実施状況
- ・各プログラムの担当者の状況
- ・学習塾との連携

3. 調査のポイント

本報告では、筆者らが立てた調査ポイントのなかから、以下の3点について報告する。

- ① 継続型教育・学習プログラムを実施している館がどれくらいあるか
- ② 学校教育に準拠した教育・学習プログラムがどれくらい提供されているか
- ③ 会員組織を整備している館は、継続型教育・学習プログラムをどれくらい行っているか

①は、学習プログラムへの興味や関心がある場限りの学びで終わらないようにするためには、継続した内容の教育・学習プログラムが必要ではないかとの観点から調査した。②は、我が国の場合、地方自治体が設立した館が多いことから、実施カリキュラムの学校教育準拠の度合いを調査した。③は、継続型教育・学習プログラムを効率よく維持しながら運営するためには、会員組織を整備するのが望ましいのではないかとこの観点から調査した。

4. 調査結果

①の結果について

1回限りで完結する講義や講演、実験、観察、工

作などを実施している館は、図1のように全体の88.8%、実施していない館は11.2%と、多くの館が常設展示以外に1回完結型・学習プログラムを実施していることがわかった。一方で、図2のように継続型教育・学習プログラムを実施している館は30.3%、実施していない館は66.4%、無回答3.2%との回答を得た。

1回完結型・学習プログラムは、9割近くの館が実施しているのに対し、継続型教育・学習プログラムの割合は大きく落ち込んでいる。それでも3割の館は継続型教育・学習プログラムを実施していることがわかった。

1回完結型・学習プログラムの実施に関する設問と、実験・工作室などの「場」があるかとの設問をクロス集計してみると、教育・学習プログラムを実施していない館は、その多くが実施場所として「場」のインフラが整備されていないことがわかった。

また、継続型教育・学習プログラムを実施していない館について、その理由を自由回答でみると、「講師・スタッフがいない」「資金がない」、あるいは設置目的の遂行により「特定の小人数に対するイベントよりも、不特定多数に向けたイベントに力を入れたい」との回答を得た。

②の結果について

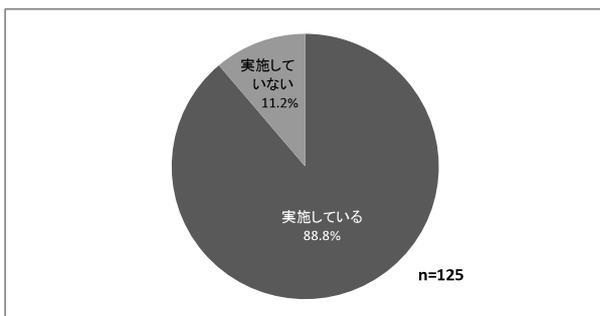


図1. 貴館で1回完結型・学習プログラムを実施しているか？

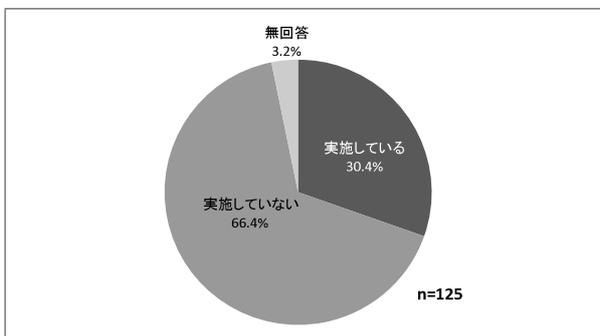


図2. 貴館で継続型教育・学習プログラムを実施しているか？

各館が提供している教育・学習プログラムは、「学校教育準拠」より「学校ではできない体験」を重視した館の比率が非常に高いという結果が出た。

1回完結型（図3）、継続型教育（図4）、それぞれのアンケート結果をみると「学校教育準拠0%：学校ではできない体験重視100%」の割合がどちらの図も1番高いという結果になった。また更に、1回完結型（図3）より、継続型教育（図4）の方が、学校ではできない体験を重視している割合が高くなっている。これは各博物館が、博物館としての特性を売りとしたカリキュラムにウエイトをおいているためと考えられる。

③の結果について

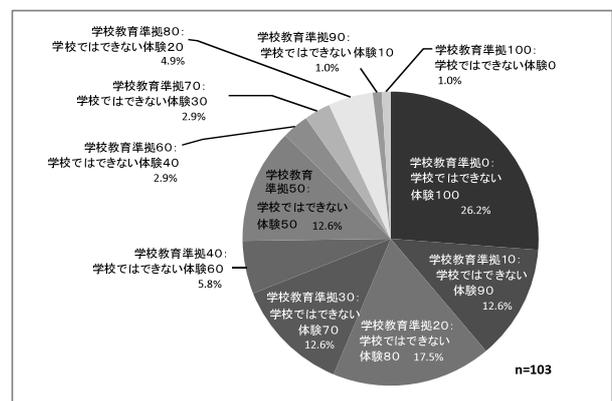


図3. 1回完結型・学習プログラムでの「学校教育準拠、または学校ではできない体験の割合」

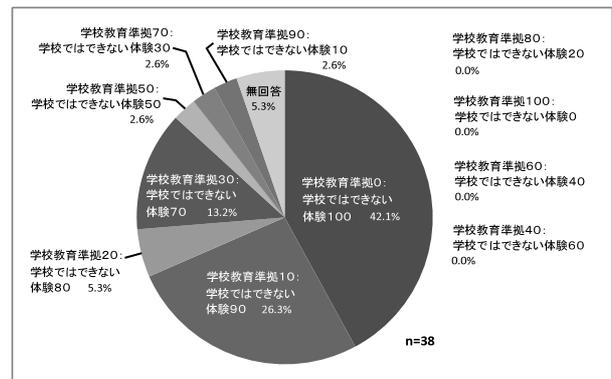


図4. 継続型教育・学習プログラムでの「学校教育準拠、または学校ではできない体験の割合」

会員組織を実施している館は、図5の通り、全体の32%（40館）である。実施していないと回答した館は66.4%、無回答1.6%との結果となり、図2の継続型教育・学習プログラムを実施している館の割合と非常に類似していることがわかる。

会員組織を持つ館について教育・学習プログラムの実施状況を見ると、1回完結型・学習プログラムについては、会員組織を持つ40館全てで実施されて

いた。しかし、そのなかで継続型教育・学習プログラムを実施している館は14館のみという結果が出た。会員組織を持っていても、あとの25館は継続型教育・学習プログラムの提供を実施しておらず、1館は無回答という結果であった。会員組織を持っているからといって、必ずしも継続型教育・学習プログラムを実施しているというわけではないということがわかった。この原因は、会員組織設立の目的が、会員サービスとしての入館フリーパスや入館料の割引、イベントへの優先参加などを主軸とする館が多いことによると思われる。

図6は、図5で会員組織を実施していると回答した40館に対し、教育・学習プログラムの実施内容について質問したのだが、これも図3、図4と同様に「学校教育準拠0%：学校ではできない体験重視100%」の割合が1番高い（ほぼ半数に近い割合）結果となっている。

5. まとめ

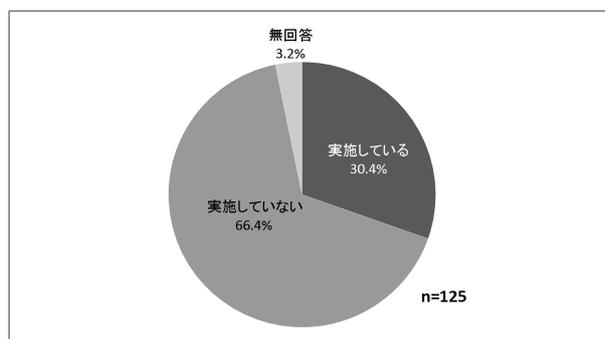


図5. 貴館で会員組織を実施していますか？

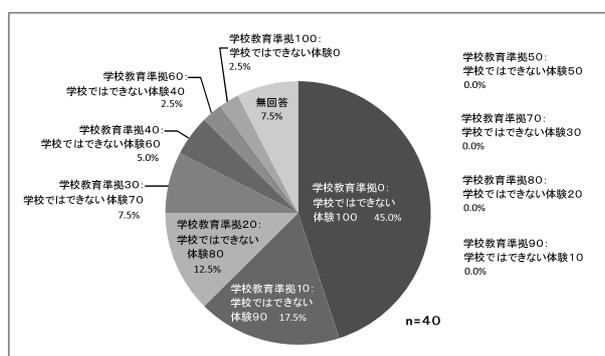


図6. 会員組織・学習プログラムでの「学校教育準拠、または学校ではできない体験の割合」

今回のアンケート調査を通して、全国の科学系博物館で行われている継続型教育・学習プログラムの実施状況を明らかにすることができた。また、結果として筆者らが想定していたほど活発な活動状況ではないということがわかった。

しかしながら、継続型教育・学習プログラムを実施している館について、いくつかヒアリング調査を行ったところ、非常に高い効果をあげている実例があることもわかった。加えて、当財団が運営する、科学技術館の会員組織「サイエンス友の会」の調査からも、会員に対して継続型教育・学習プログラムを提供することにより、科学に対する興味や知識の蓄積だけではなく、一定の期間継続する活動を通じて、会員の興味や関心の方向が多様化することや、家族間で学習した内容を話題にすることが増えるなど、良好な親子関係が生まれるといった効果もあることがわかっている。

今回のアンケート調査結果では、全国の科学系博物館で継続型教育・学習プログラムは全体の1/3の館しか実施されていないという現状を把握したが、筆者らは、継続型教育・学習プログラムの有効性を踏まえたうえで、またその活動を効果的に運営するための会員組織のあり方についても考えながら、今後も科学系博物館における継続型教育・学習プログラムについて調査・検討を進める予定である。

※この調査研究は、一般財団法人新技術振興渡辺記念会の平成23年度科学技術調査研究助成（上期）を受けて実施したものの一部である。

科学コミュニケーターとしての勤務経験による職業観への影響について

—日本科学未来館の事例より—

江水 是仁・濱 亜沙子
山本 広美・竹内 恵

【要約】本研究では、科学館職員のキャリア形成に着目し、特にOJTの観点から勤務経験がどのような影響を与えるかについて、日本科学未来館（以下未来館）の科学コミュニケーター職を対象に質問紙法による調査分析を行った。中でも科学コミュニケーターの存在意義と役割についての設問（自由記述）について、それぞれの回答内容を、働きかける対象（「非専門家（一般市民）」「専門家（研究者）」）と目的（「情報伝達」「合意形成」）との2軸でクロス分析を行ったところ、働きかける対象としては非専門家を想定する回答が多く、また目的としては情報伝達に重きを置く傾向が見られた。

また科学コミュニケーターの社会における存在意義と、未来館における役割を同一視する傾向が見られた。これらの結果、未来館のコンセプトである、社会と科学の関係を意識した活動が、勤務経験者の職業観の醸成に大きく影響していることが考えられる。またこれらは、社会を意識した未来館勤務経験者の職業観の醸成に大きく影響を与えているものと考えられ、社会に寄与する人材の育成にも大きく貢献できる結果となった。

・研究の背景

従来、博物館利用者として、博物館来館者の学びに関する調査・研究は見られるものの、博物館職員が博物館での諸機能を駆使することにより学んだことに関する調査・研究はほとんど見られない。博物館職員だった人たちが、現在のキャリアを形成するにあたり、博物館での勤務経験から何を学び、何が活かされているのかを明らかにすることは、博物館の社会的な機能を明らかにすることであり、また2012年度より始まった学芸員養成課程において、講義を通してその成果を還元することで、将来の博物館職員育成のための教育に大きく資することができるだろう。

ここでは、博物館職員の中でも、特に来館者と展示との間で展開する学びを支援する役目を持つ展示交流員やコミュニケーターと呼ばれる博物館職員が、来館者の充実した博物館体験をもたらすことで、彼ら自身にも大きな変化があると考えられる。そこで、本研究では、展示交流員やコミュニケーターといった役目を持った博物館職員である、日本科学未来館（以下、未来館）における科学コミュニケーター職を対象に、未来館での勤務経験により、何を身に付けたのか、またそれがキャリア形成にどのような影響を与えているのかを調査分析を行った。

・研究の方法

調査対象者は、2001年度から2010年度まで、未来館常勤非常勤科学コミュニケーター勤務経験者のうち、2011年3月末時点で科学コミュニケーター職を離れており、かつ未来館との連絡が取れる者（127名）を対象者（2001年から2011年6月迄の未来館科学コミュニケーター勤務経験者は常勤非常勤合わせて約170名）とした。そして対象者には、エクセルで作成したアンケート調査をe-mailにて添付ファイルとして送り、記入したものを未来館までe-mailで送信する方法で行った（期間は2011年4月～6月）。

回答者は50名であった。調査項目は、基本的属性（入社年、退社年、最終学歴、専門分野、資格等）を把握する項目、博物館活動や人々の学び、科学技術に関する興味・関心、理解、能力、行動の変化などを未来館勤務前と勤務後で振り返り、高まりの大きさを5段階で評価する項目（設問は31項目）、科学コミュニケーターが果たす役割を自由に記述する項目、合計48項目で構成されている。

今回、「科学コミュニケーターが果たす役割を自由に記述する項目」（科学コミュニケーターの存在意義、科学コミュニケーターの役割）を、KJ法により分類、分析したものを報告する。

・結果

「科学コミュニケーターが果たす役割を自由に記述する項目」（科学コミュニケーターの存在意義、科学コミュニケーターの役割）を、KJ法により分類、分析した結果、科学コミュニケーターが働きかける対象として「研究社会（専門家）」と、「一般社会（非専門家）」という軸と、科学コミュニケーターの目的として「情報伝達」と、「合意形成」という軸に分類できることがわかった。そこで、科学コミュニケーターが働きかける対象をX軸、科学コミュニケーターの目的をY軸と設定（図1）し、それぞれの象限にどのような記述内容があてはまるのかを分類、分析した。

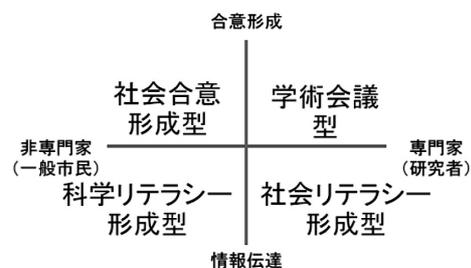


図1 科学コミュニケーターが働きかける対象と目的

まず科学コミュニケーターの存在意義を分類、分析した結果、第一象限である学術会議型に該当する回答は2、社会合意形成型（回答内容：社会と科学界と行政をつなぐ、触媒かつハブ機能を持つ人材）、社会合意形成型と科学リテラシー形成型（回答内容：コミュニケーションギャップを見極め、対等に対処する（橋渡しやコーディネート、通訳等を行う）こと、人々の不要な不安や混乱を防ぎ、人々が未来を冷静に前向きに考えることができるように寄与すること）にも含まれる回答であった。

第二象限である社会合意形成型に該当する回答は11、そのうち10は科学リテラシー形成型（回答内容例：科学技術にもたらす功罪について伝えることで、それらを一般社会が議論する場をつくることで、未来の社会づくりに貢献すること等）にも含まれる回答であった。

第三象限である科学リテラシー形成型に該当する回答は42、そのうち23は科学リテラシー形成型のみ（回答内容例：多種多様な人々に、科学に興味を持ってもらい、理解を深めてもらうこと等）に該当する回答であった。

第四象限である社会リテラシー形成型に該当する回答は9、すべてが科学リテラシー形成型（回答内容例：人々の科学の興味を広げること。専門家を社会との交流に引き込むこと等）に該当する回答であった。

次に、未来館の科学コミュニケーターが果たす役割を分類、分析した結果、第一象限である学術会議型に該当する回答は1、その回答は社会合意形成型、科学リテラシー形成型、社会リテラシー形成型（回答内容：科学館において、専門家・関係者から収集した科学的情報を一般市民（来館者）に提供したり、一般市民（来館者）の意見を専門家・関係者に伝えたり、ある議題について一般市民（来館者）と専門家・関係者が一緒に考える環境をつくりだす存在）に該当する回答であった。

第二象限である社会合意形成型に該当する回答は8、そのうち7は科学リテラシー形成型（回答内容例：来館者または館外の人たちが最先端の科学技術について考えるための工夫や場を生み出す等）に該当する回答であった。

第三象限である科学リテラシー形成型に該当する回答は36、そのうち21は科学リテラシー形成型のみ（回答内容例：未来館の特徴は最先端科学であり、未来館の科学コミュニケーターは最新の科学と市民をつなぐこと。科学者・技術者はヒーローであることを伝えること等）に該当する回答であった。

第四象限である社会リテラシー形成型に該当する回答は10、そのうち9は科学リテラシー形成型（様々な立場の人々が、科学的な共通理解の上で互いの違いを受容し交流できる場を構築することで、グローバルかつ中・長期的で取り組む課題解決へ貢献すること等）に該当する回答であった。

・まとめ

社会における科学コミュニケーターの存在意義の

分析から、専門家側から非専門家側への一方的な情報伝達にとどまらず、非専門家側の意見や要望のフィードバックを専門家側へ行き、よりよい社会のための合意形成を目指す傾向が見られた。勤務経験を通して学んだことは、未来館活動の基本姿勢である内容—科学コミュニケーターの存在意義は、専門家側から非専門家側への一方的な情報伝達にとどまらず、非専門家側の意見や要望のフィードバックを専門家側へ行き、よりよい社会のための合意形成を目指す—と一致している場合が多いことがわかった。一方で、働きかける対象として研究社会（専門家）の象限の回答が少なかったのは、未来館の業務において、専門家を相手にすることが少ないことに起因していると思われる。

未来館の科学コミュニケーターが果たす役割についての分析から、科学コミュニケーターの存在意義と同じ傾向が見られた。したがって、回答者にとって、科学コミュニケーターの存在意義と、未来館における科学コミュニケーターの役割を同一視しているものと思われる。

これらの結果から、未来館科学コミュニケーターとしての勤務経験から、社会と科学の関係を意識した未来館の活動コンセプトと一致する回答内容が多くみられたことから、未来館の使命を勤務経験により学び、現在未来館とは違う環境においてその使命を果たそうとしている回答者が多いことがわかった。

今後、異分野の博物館職員の方々に対し、同様の調査を行うことで、博物館勤務経験者にとって博物館の勤務経験がどのような影響を与えているのかを分析していくことが課題である。

博物館と学校をつなぐ人材の養成 ～教員のための博物館の日を通じて～

独立行政法人国立科学博物館

小川義和・渡邊千秋・永山俊介
岩崎誠司・久保晃一

日 時：平成24年6月3日(日) 9:30～14:30

場 所：東京家政学院大学

(第2会場「学習プログラム・人材育成」)

学校と博物館が継続的に連携し、学習活動を展開するには、異なる二つの機関を理解した「つなぐ人材」が重要な役割を果たす¹⁾。つなぐ人材は博学双方に在って、互いが窓口となることでより綿密な連携が可能となる。

欧米では、学校と博物館との間に第三の学習の場を設け、両機関をつなぐケースも見られるが、日本の博物館が置かれている現状を考えると、学校に対して割ける職員数や時間、予算は圧倒的に少ない。

そこで、国立科学博物館では、学校と博物館それぞれの機関に両者をつなぐ人材を見出し、養成するモデルを想定して取り組んでいる。図1は、その養成モデルを図式化したもので、学校なら教員、博物館なら博物館スタッフと、もともとその機関に属している人の中からつなぐ人材を養成し、互いが両機関の窓口・仲人になるというイメージを表している。人を模したマークの色の濃淡は一方の機関とのつながりの度合いの強弱を示している。この図では、様々なつながりの段階があり、つなぐ度合いの高い段階にいたっては、周囲を巻き込みながら両機関の連携を深めていくという側面まで想定している。

国立科学博物館では、教育ボランティアを博物館側のつなぐ人材として位置づけ、研修や実践モデルの試行を重ねている²⁾。学校側のつなぐ人材として

は学校教員を対象とした「教員のための博物館の日」の開催により、博物館と学校の橋渡し役となる人材の養成に取り組んでいる。

本大会では、学校側のつなぐ人材の養成に焦点を当て、「教員のための博物館の日」開催までの経緯、事業の概要、これまでの成果と今後の展開について発表を行った。

〈開催の経緯と事業の概要〉

「教員のための博物館の日」は、博物館にあまり足を運んだことのない教員を主な対象としている。これは、国立科学博物館における博学連携の課題でもあった「特定の教員による継続的な利用があるが、それ以外の教員による利用が広がらない」ことが開催の契機となったためである。

子どもたちが博物館で学ぶ喜びを体験するためには、その教育を担う教員自身が日頃から博物館に慣れ親しむことが重要である。本事業では、教員が自発的に博物館を楽しみ、博物館を活用した「体験的な活動」について理解を深めることを目的としている。

学校側のつなぐ人材育成にあたっては、教員の博物館利用形態にいくつかの段階があることを想定し(図2)³⁾、本事業が対象とすべき教員のタイプを検討した。前述の課題を踏まえ、理科に苦手意識のある教員や理科以外の教員にも博物館を身近に感じてほしいという思いから、「博物館に関心がない」タイプの教員をメインターゲットとした。まずは博物館へ気軽に足を運んでもらい、教員自身が博物館を楽しみながら授業で使える学習資源を、博物館の中から見出してもらうことをねらいに、教員のためのプログラムと各種特典を用意した。

博物館活用にあたっては、「(まずは博物館に)来てもらう」「親しんでもらう」「(授業で)使ってもらう」という三つのステップを念頭に、それぞれ「来やすいしくみ」「親しんでもらうしくみ」「使っても

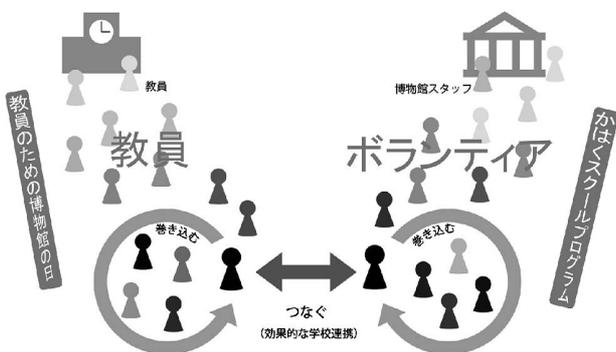


図1. 国立科学博物館が考えるつなぐ人材

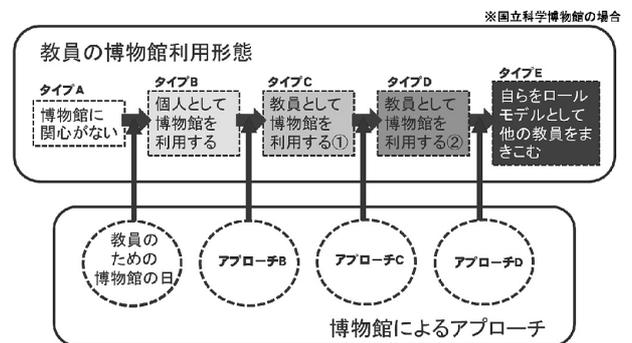


図2. 教員の博物館利用形態とつなぐ人材の育成モデル

らうしくみ」を検討し、開催形態や内容に反映させた。無料入館や事前予約不要のシステムにより、足を運びやすい条件を整えたり、近い距離で「互いの顔が見える」ブース出展形式のプログラム実施により、博物館職員と教員が相互理解を深め、より親しみやすい場の設定を行った(写真1)。



写真1. 研究部職員による教材・展示解説「ヒトの骨と人類の進化の話」

プログラムは、学習指導要領と博物館の学習資源活用を意識して近年開発した「科学的体験学習プログラム」や既存の学習資源(展示・ワークシート・貸出標本等)の体験・紹介が中心となっている。いずれも「先生が学べる・楽しめる」「学校で使える」「博物館で使える」という三つの視点で整理を行い、来館する教員それぞれのニーズに応じて自由に選択・参加できる構成になっている。従来の教員研修とは異なるアプローチで企画されたこれらのプログラムは、本事業の大きな特徴となっている。

〈成果と今後の展開〉

本事業における参加者数は、第一回目開催時(2008年)の215名から411名(2011年)と大きく増加している。2010、2011年の参加者アンケートでは、7割以上が「教員のための博物館の日に初めて参加した」と回答しており、新たな参加者が当館の学習資源について知る機会となっている。また、運営側にとっても、出展者や参加者の間で新たなつながりが生まれたり、博物館職員が学校について考える機会となっており、博物館側の「つなぐ人材」化にも成果が見られた。

今後は、「教員のための博物館の日」の参加をその後の継続的な学校利用に結びつける方策が必要になると考えられる。教員が博物館を「個人的に楽しむ」

段階から「教員の立場で活用する」段階へ実際に移行する足掛かりとなるような仕組みを検討し、つなぐ人材の養成システムの充実を図っていきたい。

(文献)

- 1) 小川義和(2003) 学校と科学系博物館をつなぐ学習活動の現状と課題, 科学教育研究, 27(1), pp.24-32
- 2) 島絵里子, 岩崎誠司, 吉田聡宏, 永山俊介, 小川義和(2011) 学校と博物館を「つなぐ人」の養成—国立科学博物館における教育ボランティア活動の新たな展開—, 日本ミュージアム・マネジメント学会会報No. 62 Vol. 16 No. 3, pp.2-4
- 3) 国立科学博物館(2010) 文部科学省委託事業環境学習プログラムの体系的開発に関する調査研究, pp.93

「子どもが博士と出会う体験」の一考察

—コドモ to サイエンスカフェの事例を通して—

坂倉 真衣

1. はじめに

近年、研究者と公衆との双方向性対話の必要性から、サイエンスコミュニケーションの重要性が強く叫ばれるようになった(渡辺 2008)。大学等の研究機関でもアウトリーチを目的としたサイエンスコミュニケーション活動も多く行われるようになってきている。そして、その手法の一つとして、盛んに行われている試みがサイエンスカフェである。サイエンスカフェは、1997年以降に英国、フランスで始まったものであり、喫茶店などの気軽な雰囲気の中で飲み物を飲みながら、研究者と市民が一緒になって科学技術をめぐる話題について語り合おうとする取り組みである。「人々が日常的に利用するカフェのような場が会場となり、対面的な対話や双方向的なやりとりが重視され、基本的には小規模で行われる」という特徴を持ち、新しいスタイルで科学を語り合おうという試みとして、世界的にも幅広い関心を集めてきた(中村 2008)。日本では、「サイエンスカフェ元年」と中村(2008)が呼ぶ2005年以降、全国に急速に普及し、現在では実施主体、開催場所、内容、参加人

数など極めて多様に行われている。

このようなサイエンスカフェの「対面的な対話」、「双方向的なやりとり」、「基本的には小規模」などといった特徴は、博物館における利用者主体、利用者の体験を軸としたワークショップ、野外観察会、ミュージアムトークなどの教育普及活動とも繋がるものであると筆者は考えている。

2. コドモ to サイエンスカフェ開催報告

2-1. 開催の背景

筆者がコドモ to サイエンスカフェを行うこととなったきっかけは、『子どもたちにとって、博物館は知らないもの、珍しいものを見るための場所というだけでなく、「すでに知っているものを確認するための場所」でもある』（坂倉ら 2011）という知見である。これは、2009年8月～2010年9月まで北九州市立自然史・歴史博物館をフィールドとして発話採集・行動観察を行うことによって得られた。2011年度以降、子どもたちにとってより身近な場所にある「公民館」を拠点とした活動を行ってきており、コドモ to サイエンスカフェは、子どもたちの住む地域に博物館が çıkかけて行く試みとして、2011年8月から始め、2012年6月までに四回開催をした。

・第一回「貝博士に聞いてみよう」

【日 時】2011年8月11日（木）17時～18時半
【参加者数】子ども10名、大人10名（計20名）
【演 者】松隈明彦先生（九州大学総合研究博物館）
【会 場】箱崎水族館喫茶室

・第二回「虫博士に聞いてみよう」

【日 時】2011年11月13日（日）17時～18時半
【参加者数】子ども10名、大人12名（計22名）
【演 者】丸山宗利先生（九州大学総合研究博物館）
【会 場】箱崎水族館喫茶室

・第三回「隕石から見る宇宙のヒミツ」

【日 時】2012年1月29日（日）16時半～18時
【参加者数】子ども9名、大人12名（計21名）
【演 者】中牟田義博先生（九州大学総合研究博物館）
【会 場】箱崎水族館喫茶室

・第四回「子どもが見つけた科学の種」

【日 時】2012年3月17日（土）
【参加者数】子ども50名、大人32名（計82名）
【演 者】大野照文先生（京都大学総合研究博物館）
【会 場】アクロス円形ホール

2-2. 特徴

コドモ to サイエンスカフェは、親子を対象とすること、大学博物館教員を演者として迎えることを大きな特徴とする。プログラムは、アイスブレイク（10分）⇒演者からの話題提供である「おはなし」（20分）⇒標本を顕微鏡などで実際に見たり触ったりしてもらう「体験」（30分）⇒会場全体を含め、出た質問を元に構成をする「質問、おしゃべり」（20分）⇒演者からの「メッセージ」（10分）という合計90分で行っている（図1参照）。以下に、第一回「貝博士に聞いてみよう」を例としてプログラムの特徴について述べる。

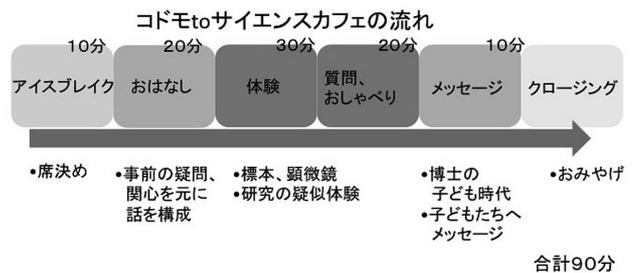


図1. コドモ to サイエンスカフェの流れ

2-2-1. アイスブレイク

最初に行っているアイスブレイクとは、文字通り「氷を砕く」という意味で、教育や市民活動の場などにおいて、初対面の人々の緊張をほぐす出会いの演出法として行われている（今村 2009）。今回は、「貝合わせ」（図2）を用いて、受付の際に一組の親子に対して一つの「右の貝」を渡し、それに合う「左の貝」の席に座ってもらうという席決めアイスブレイクを行った。これにより、参加者と主催者、参加者同士の会話を生み出し、本番で話がしやすい雰囲気を作り出した。



図2. 貝合わせ

2-2-2. おはなし

公民館に来る子どもたちへの聞き取りや、募集の際に寄せられる疑問・質問、前回のサイエンスカフェで挙げられた要望などを元に、演者からの「おは

なし」は構成をしている。今回は、「美味しい貝は何ですか」「貝掘りができる場所はどこですか」などの疑問が多かったため、「食べ物としての貝」をテーマとした。

2-2-3. 体験、おみやげ

今回は、貝の菌の顕微鏡観察、生きたジャンボタニシ、あさりの観察、水槽にオウムガイの標本を浮かべることができる体験してもらった。サイエンスカフェでは、「双方向性対話」が出来るような場作りが大切にされるが、今回は、親子を対象としているので、演者である博士と気軽に「おしゃべり」が出来るような雰囲気作りを心掛けた。

最後には、アイスブレイクに使った貝合わせを「おみやげ」とし、家に帰ってからも、親子でサイエンスカフェであったことについて話ができるための工夫を行った。

2-3. 当日の様子

おはなし（図3）から、体験の時間（図4）をはさむことで、質問、おしゃべり（図5）、では、参加者と博士との距離もぐっと縮まった。子どもたちが



図3. おはなしの際の様子



図4. 体験の時間の様子



図5. 質問、おしゃべりの時間

ら積極的に博士に質問をする姿も見られた。イギリスなどのサイエンスカフェでは対話を生み出す工夫として休憩時間を組み込んでいる（中村 2008）。本サイエンスカフェの体験も、演者と参加者の対話を生み出すきっかけの1つとなっていた。

3. 「子どもと博士が出会う体験」としての考察

サイエンスカフェは、一般的なカフェとは違い、用意された特別な場所で行われる非日常的なイベントである。一般的なカフェにおける個人的な関係性に対し、サイエンスカフェはファーストネームで呼び合うなど対等な立場を目指しながらも、「演者」「参加者」といった役割もある。筆者は、今回のような子どもが参加をする場合のサイエンスカフェを「子どもと博士が出会う体験」をする場所であると捉え、そこでどのようなことが起こっているのかを参与観察によって得られたエピソードを考察した。

貝博士を迎えて行った第一回目のコドモ to サイエンスカフェも終盤を迎え、「子どもたちが科学することについての先生のお考えや子どもたちへのメッセージをお願いします」という主催者の私の問いかけに、貝博士が答えたときのことである。

「以前、子どもたち向けのワークショップをした際に、“アンモナイトは絶滅したのに、どうしてオウムガイは絶滅しなかったの（形は似ているのに）”と聞いてきたお子さんがいました。私は、これまでそういう視点で考えたことがなかったので、本当にはっとさせられ、答えに困ったんですけどね。」

「私がこれから五年、十年と考えていかなければならない研究のテーマを頂きました」

この言葉を貝博士が穏やかな口調で発せられたとき私には、会場の雰囲気がからっと変わったように思え、よりしっかりとした表情で貝博士を見る子どもとその親の姿があった。深いため息と目を丸くしてという表現がぴったりかは分からないが、そこには、「研究ってそんなに長い時間がかかるんだ」という驚きと、その研究と向き合っている貝博士に対して、あらためての尊敬の念が感じられたようだった。

(第一回「貝博士に聞いてみよう」

18:20頃の参与観察の記録より)

このエピソードでは、貝博士が「本当にはっとさせられ、答えに困ったんですけどね。」と子どもたちの発想への驚きや感動を率直に口にしている。その発言を聞いた子どもたちは、より真剣な表情で研究者である貝博士の話の聞いているようだった。このサイエンスカフェの後には、内容をまとめた自由研究(図6)を筆者に見せてくれた子どもがおり、そこにはプログラム内容だけではなく、貝博士自身に対する感想も書かれていた。それは、博士の発言を受けた子どもに、博士が自分たちの質問に共感してくれた喜びがあったからであると思われる。その後、貝博士が何気なく発した「私がこれから五年、十年と考えていかなければならない研究のテーマを頂きました」という言葉により起こった会場の雰囲気の変化は、その言葉を受け取った参加者(この場合は特に親)が、研究にかかる年月の長さから、研究者の自然と向き合う姿勢への敬意を感じたことによるものだろう。

上述のように、博士と子どもたち、また親たちには、お互いに驚きや発見があり、演者と参加者という立場を越え、ともに敬意をもって出会えた場になっ



図6. 参加者がまとめた自由研究

ていたと考えられる。このような場となった90分間のプログラムでは、アイスブレイクや体験の時間を組み入れたことによって、自然に対話の出来る場が醸成されていった。さらに、子どもたちの積極性に影響され、様々な話が繰り広げられたことで、対話の中での相乗効果があった。これらのことから、演者と参加者の関係性の深まり、お互いに尊重し合える関係になったと考えられる。日常ではほとんど会うことがない者と出会い、そこに互いの敬意が生まれることこそ、「子どもが博士と出会う」という体験であり、サイエンスカフェの場で起こるのに相応しいことではないか。

以上のように地域で子どもたちが博士や標本と出会う場所をつくることにより、子どもたちにとって博物館が徐々に身近な場所になっていく。そして、2. で述べた坂倉ら(2011)の知見により、「博物館のことをすでに知っている」という気持ちがあることで、博物館に行くきっかけをつくる事が出来る。博物館に行った後も、身近になっていることで、より知りたいという気持ちの広がりになる可能性がある。このようなサイクルが上手く作用することにより、博物館と連携をさせたサイエンスカフェの新たな価値を見出すことが出来るであろう。今後は、博物館に来ることと繋がりを持ったサイエンスカフェを模索していきたい。

引用文献

渡辺政隆 2008:「科学技術理解増進からサイエンスコミュニケーションへの流れ」『サイエンス・コミュニケーション 科学技術社会論研究5』玉川大学出版部, 10-20.

中村征樹 2008:「サイエンスカフェ 現状と課題」『サイエンス・コミュニケーション 科学技術社会論研究5』玉川大学出版部, 31-43.

坂倉真衣・真鍋徹・三島美佐子 2011:「子どもたちの博物館体験 —北九州市立自然史・歴史博物館における発話採集, 行動観察を通して—」博物科学会口頭発表, 2011. 6. 24.

今村光章 2009:『アイスブレイク入門』解放出版社.

共創概念に基づく博物館経営の考察 参加型プラットフォームの構築における 主体の差異を中心として

共栄大学国際経営学部 専任講師

平井 宏典

公益施設である博物館は、その機関的性質から地域社会と深く結びつくことが求められるが、今日の社会環境の変化から、従来の博物館学の文脈における「地域連携」の意義や役割を超え、さらにその重要性が強調されている。このような状況の中で、博物館の地域連携は新たな展開を迎えていると想定できるが、博物館経営論においてその実践を導く理論基盤の蓄積はいまだ浅い。

このことから、本研究は、経営学において近年注目される「共創」概念を適用し、今日求められる地域連携の形を探求する。共創概念の研究は多義的・多面的であり、字義通りの「共に創る」という広義の枠組みにおいて、経営学の様々な分野でそれぞれの視点に立脚した理論が展開されている。本研究は、それらの研究群の中から Prahalad and Ramaswamy を嚆矢とする経験に立脚した企業と顧客の価値創造プロセスから、幅広いステークホルダーを包摂的に新たな経験を生み出すプラットフォームへ参加させる、企業成長までも視野に入れた共創概念を博物館に適用する。

博物館における新たな展開としての地域連携では、当該地域における市民と博物館の相互作用のみではなく、地域が抱える様々な課題に対して多様なステークホルダーと共創的に取り組むことが求められている。このことから、共創概念における参加型プラットフォームに着目し、博物館の地域連携に関する新たな展開について考察する。

1. 博物館経営と地域連携

公立館が大多数を占める日本において、地域連携は博物館の存在意義として重要な位置づけにあり、公益施設として博物館という機関が成立した創成期より常に模索されている経営課題であるといえる。しかし、近年になって殊更「地域連携」が協調され、その重要性はますます高まっている。なぜ、地域連携が現代的な経営課題として取り上げられるのか、その背景として博物館経営の観点から以下の2つの要因を挙げることができる。

第一は、バブル経済崩壊による冬の時代と呼ばれ

る博物館の経営危機に起因する「補完的役割としての地域連携」である。1990年代、博物館は設置主体である地方公共団体の財政危機から運営費が大幅に削減され、コレクション機能の停止や展覧会の規模の縮小あるいは回数の削減等の事業活動を縮減せざるをえない状況に直面した。この状況に対応するための地域連携の主眼は「欠如した経営資源をどのように補完するのか」に置かれている。

第二は、博物館の社会的役割の多様化による「地域活性化の担い手としての地域連携」である。この社会的役割は、創造都市理論におけるビルバオ効果に代表されるような観光・まちづくり等の地域活性化に資する博物館への新たな期待と表現できる。この創造都市論における博物館は当該地域の創造性を喚起する主要な役割を担っており、博物館は欠くことのできない存在であるといえる。

社会環境の変化の下、この2つの異なる志向性を有する要因を同時に追求しなければならないことから、現代における博物館の地域連携の問題を複雑化させ、注目を集めることになったと推測できる。

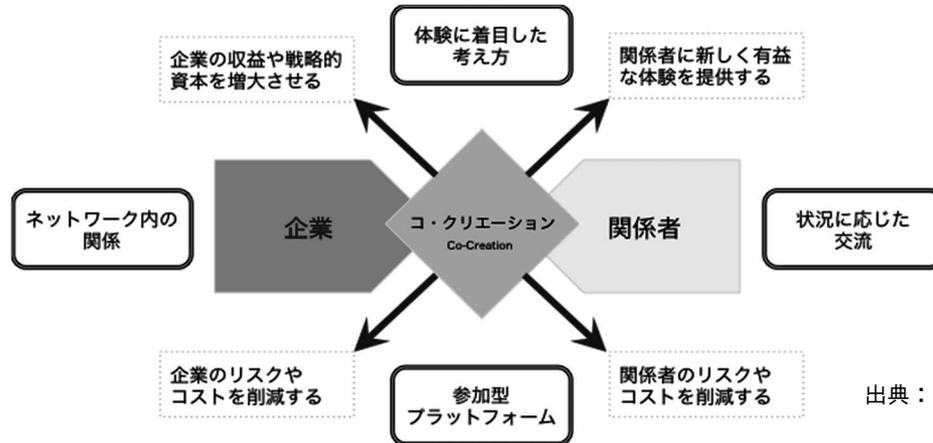
2. 共創概念

本稿が着目する共創理論は Prahalad and Ramaswamy (2003) を中心に、Ramaswamy and Gouillart (2005) がさらなる理論的枠組みを提示している Co-Creation である。Ramaswamy and Gouillart の共創理論は価値創造プロセスを基盤としながら、サプライヤーやパートナー、従業員等の関係者を包摂的に共創のプラットフォームへ参加させることを中心的課題としている。Ramaswamy and Gouillart は共創型企業への転換における基本原理を「価値ある体験を生み出す作業に関係者を参加させ、ネットワーク経済を強化すること」とし、以下の4つの要素を提示している。

- ・体験に着目した考え方
- ・状況に応じた交流
- ・参加型プラットフォーム
- ・ネットワーク内の関係

この4つの要素において「参加型プラットフォーム」は、他の3つの用を支える土台として非常に重要な位置づけにある。そして、参加型プラットフォームは Web サイト、対面会議、直営店、ハードウェアやソフトウェア、モバイル機器、コールセンター、非公開・公開コミュニティ空間等、様々な形態を想定される。参加型プラットフォームを土台とする4つの要素の関係性は図1のように図示すること

図1 コ・クリエーションの基本原則



出典：Ramaswamy and Guillard, 2011, p.52

ができる。

Ramaswamy and Guillard の共創概念は博物館の地域連携を考察する上で、非常に示唆的な知見を提供している。そこで本研究は共創の基本原則の中でも土台として重要な役割を果たす参加型プラットフォームに焦点を絞って博物館の地域連携について考察する。

3. 共創概念に基づく博物館の地域連携

共創において顧客とは、価値の消費者でもあり生産者でもある。このことは、博物館でも同様であり、博物館とボランティアの関係性はまさに共創であるといえる。共創の4つの原理に当てはめて考察すると、「博物館という場」は参加型プラットフォームと換言することができる。また、ボランティアの自己実現の機会は「個人的」なものであり「記憶に残る」ものとして体験という価値である。そして、博物館はボランティア希望者との交流によって、その活動を実験的・反復的に行ない、共創型生態系の一部としていく。その際に、ネットワーク内の関係性を調整するためにボランティアを組織化したり、研修を行ったりすることでプラットフォームを精緻化していく。

企業経営における共創では、企業と顧客は新しい体験の創出という点で協働するが、基本的に参加型プラットフォームを構築し、そのネットワーク内の関係の構築・調整も企業であり、顧客は状況による交流をするという形である。博物館の地域連携において「地域活性化の担い手としての地域連携」という要因を指摘したように、観光を例にすると参加型プラットフォームを構築する主体は地方公共団体の関連部署、観光協会、観光事業者である場合が多いであろう。この際は、博物館はむしろプラットフォ

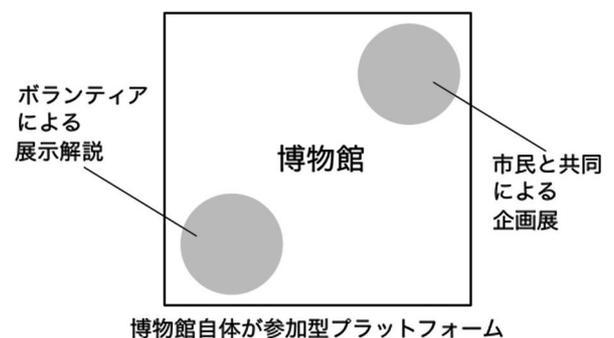
ームに参加する関係者となることが想定される。このことから、博物館の地域連携の文脈において共創概念を適用すると参加型プラットフォームの構築主体という違いから2つの型に分類することができる。

(1) 博物館主導型

参加型プラットフォームの構築主体が博物館であるケースを博物館主導型と定義する。博物館主導型は、前述のボランティアのように、博物館が自館の経営資源を基盤として参加型プラットフォームを構築し、市民を中心とした多様なステークホルダーを参加させ、価値創造を試みる型であり、図2のように表すことができる。

博物館主導型は自館の経営資源を基盤とすることから、基本的に従来の博物館活動の延長線上に体験の創出があり、その体験の場も館内が中心であると想定できる。さらに、その活動は関係者による業務の補完もしくは代替といった性質を有している。しかし、業務の補完や代替が、博物館の非金銭面を含む管理コストの低下につながっているというわけではない。

図2 博物館主導型概念図



出典：筆者作成

(2) ステークホルダー (SH) 主導型

博物館の地域連携にて考察したように、「地域活性化の担い手としての地域連携」という視点に立てば、その志向性は外部である。つまり、参加型プラットフォームを構築し、共創型生態系を形成して戦略的資本を創出し、成長を目指すのは博物館ではなく地域である。

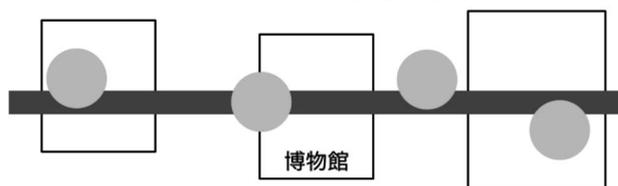
このことから、地域全体がどのような共創を目指すのかによって博物館の役割は大きく異なってくる。例えば、文化的都市というブランドを形成するために複数の社会教育施設で参加型プラットフォームを形成するケースを想定すると館種・規模・立地等の点から博物館が構築主体となることもあるだろう。一方で、前述のように観光のケースでは主要な観光施設のひとつとして参加型プラットフォームの構成要素のひとつとなることはあっても主体となる可能性は低いであろう。このように、地域活性化を主眼とした地域連携の場合、その主体が博物館ではないことから意思決定における重要度には幅がある。

図3はSH主導型の概念図である。地域活性化を目的として連携体制を構築する場合、その多くは対象や地域がひとつの機関で対応することが困難であるために担い手となるSHは2者以上であることが想定される。例えば、過疎地帯であった新潟県越後妻有で開催されるトリエンナーレはその広大な会場に点在する博物館も重要な役割を果たしているが、それ以上にNPO・ボランティア・地域のお年寄り等の力が大きい。

また、参加型プラットフォームが複数間にまたがることから、博物館主導型はその取組が自館を基盤として想定されるが、SH主導型の場合は他主体を基盤もしくは地域の任意の場等で取組が実施されることもあるだろう。このことから、SH主導型の場合、博物館が主導的役割を担うことがなくとも、ステークホルダーの数や性質の多様性が増せば、それに比例して取組の規模や範囲も増大する可能性を有している。

図3 ステークホルダー主導型の概念図

ステークホルダー (SH) 主導型



2者以上の複数間にまたがる参加型プラットフォーム

出典：筆者作成

結論

近年、ますます重要性が高まる博物館の地域連携について、経営学における共創概念を適用し、参加型プラットフォームの構築主体に着目することで博物館主導型とSH主導型の2つの類型を導出した。博物館経営において地域連携が重要視されることになった背景を鑑みれば、博物館の社会的役割の多様化に伴いSH主導型による参加型プラットフォームの構築が重要性を増してくると考えられる。

SH主導型の構成要素となる博物館は其中で何を成し遂げるのか、社会の博物館に対する期待が高まる中で博物館はその可能性を顕示することができるのか、このことについては博物館が顕在化した顧客ニーズだけではなく、地域社会の潜在的なニーズを見つけ出し、インキュベーターとして育てていくことができるかが重要になる。この文脈から共創概念における参加型プラットフォームを構築し、市民との交流の中で実験的・反復的に取組を行なうことが求められる。

主要参考文献

- 上山信一・稲葉郁子『ミュージアムが都市を再生する』日本経済新聞社、2003
- Pralhad, C. K and Venkat Ramaswamy, “the Future of Competititon: Co-Creating Unique Values with Customers”, Harvard Business Press (有賀裕子訳『価値共創の未来へ —顧客と企業のCo-Creation』ランダムハウス講談社、2004)
- Ramaswamy, Venkat and Francis Gouillart, “The Power of Co-Creation: Build It with Them to Boost Growth, Productivity, and Profits”, Free Press a division of Simon & Schuster, INC, 2010 (尾崎正弘・田畑萬監, 山田美明訳『生き残る企業のコ・クリエーション戦略 —ビジネスを成長させる「共同創造」とは何か』, 徳間書店, 2011
- 高階秀爾・蓑豊編『ミュージアム・パワー』慶応義塾大学出版, 2006

共通チケットによる複数の博物館への関心の喚起についての考察

—東京都におけるぐるっとパスの事例を用いて—

慶應義塾大学 システムデザイン・マネジメント研究所
研究員 本間 浩一

1 はじめに

文部科学省が3年おきに行っている社会教育調査によれば、博物館および博物館類似施設の数には平成8年度から20年度の12年間で28%も増加しているにもかかわらず、施設利用者の総数は横ばいで推移している。非営利で運営される博物館においてもその経営を継続的に行うためには、直接の顧客である利用者や納税などを通じて経営基盤を支える市民などを意識したマーケティング活動が必要とされている。

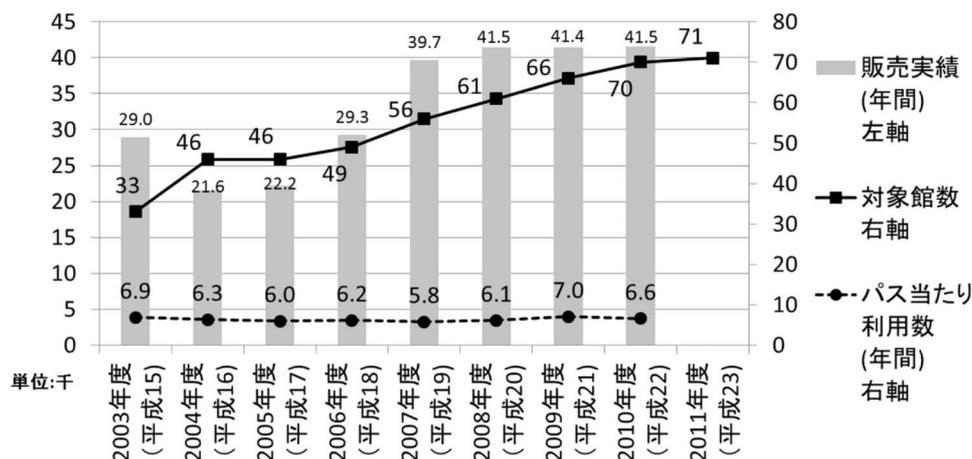
この環境下で、個々の施設は自館の利用を増やすべく様々な手立てを講じており、単独の館としての独立した活動だけでなく複数の館が協力する施設横断的な試みも出現している。施設横断的な施策の代表例として、複数の博物館を対象とした共通チケットの発行・運営があり、購入者が個々の館を利用する際には利用料は無料ないしは割引になる。具体的な事例の一つが「東京の美術館・博物館等共通入館券実行委員会」（以下、実行委員会）が主催し、2012年現在、公益財団法人東京都歴史文化財団に事務局を置く「東京・ミュージアム ぐるっとパス (TOKYO MUSEUM GRUTT PASS)」(以下、『ぐる

っとパス』と表記)である。初年度の2003年度は価格1,800円(税込)で有効期間は1か月であったが、2004年度以降は価格2,000円(税込)で有効期間2か月となり2012年度までこの設定が踏襲されている。東京都において、最も利用されている共通チケットの一つであり、参加施設数も71施設(2011年度)と多い。この事例における利用状況を示し、さらに複数の博物館に対して特定の個人の関心がどのように喚起されているかの分析を試みた。

運営側の公開情報(東京都歴史文化財団 2003—2010)に加えて、実行委員会から協力を得て利用状況に関する基礎的なデータの提供を受けチケットの販売や入場という実際の行動に関する情報を入手した。一方、市民の側の視点から見た情報としては、インターネット上のブログで博物館に関して言及している市民とその記述内容を収集し、市民が個々の博物館に対して持つ関心がこの共通チケットによってどのような影響を受けたかを分析した。

2 『ぐるっとパス』の利用状況

実行委員会の公開情報に基づき、『ぐるっとパス』の販売実績、対象施設数、パスあたりの利用数(個々の博物館で把握したパスの利用実績の総数を販売実績で除したもの)の年度別推移を図1に示す。前年度に計画された販売予定数に対して、2007年度までは実績が上回っており、2008年度以降も安定して40,000パス以上が販売されている。対象施設の数も毎年増加している。



(『事業実績報告・財務諸表・収支計算書 財団法人東京都歴史文化財団』平成15年度—22年度)

図1 『ぐるっとパス』の販売実績、対象施設数、パスあたりの利用数の年度別推移

『ぐるっとパス』利用者のプロフィール

『ぐるっとパス』の利用者のプロフィールに関しては、スタンプラリーという名称のプレゼント企画に応募した利用者が任意のアンケートへの回答を集計した情報を参考にできる。含まれる情報は、性別、都道府県レベルの居住地、博物館や美術館の年間利用回数、『ぐるっとパス』の累積利用回数、認知媒体、購入経路である。

この企画は、対象施設に入場する際に各施設のスタンプをパスに綴じ込まれた台紙に押印し、一定数を集めることで応募資格を得るものである。表1に毎年度の販売数、応募数、アンケートの調査項目への回答数を示す。2005年度以降、全販売数の4%以上がこの企画の応募につながっている。ただし、応募には規定回数の入場を行う必要があるため、応募者の集合は利用者全体からの無作為抽出ではない。この企画は2004年度から実施されているが、アンケートの質問項目は順次拡張されているため、項目が今回経年比較をした項目が2010年度と同じ内容になった2006年度以降のデータを用いることにする。

まず、性別は男女ほぼ同数であり、おおきな偏りは見られなかった。年代の分布については、徐々に50歳以上の占める比率が増加しており、特に60代の比率の増加が目立つ。

居住地を見ると、60%以上が東京都内であり、関東まで含めると90%以上を占める。『ぐるっとパス』は、短期間（2004年度以降は2か月間）に複数館を訪れることで利用者へ便益を与えるプログラムなので東京近郊の居住者が多くなることは容易に予想される。関東以外、あるいは外国からの旅行者による利用はわずかである。

アンケートの質問項目「年に何回ぐらい博物館や美術館を訪れますか？」への回答の分析からは、『ぐるっとパス』の購入者の多くは、もともと訪問予定がある施設群の入館料抑制のためにではなく、より多くの博物館に訪問したことがわかる。

3 『ぐるっとパス』および参加施設に対するブログ上での言及状況

次に、特定の個別の施設については分析するために、インターネット上の記述データを利用した間接的な調査を行った。博物館に関係した記述を含むブログに関する分析のために本間らが収集したデータを使用した（本間・西村 2011）。そのデータの中から、『ぐるっとパス』という名称および対象施設の名称に言及しているブログ記事を識別・抽出して分析に用いた。

(1) 『ぐるっとパス』および対象施設名称への言及

把握できた“博物館ブログ”13,855個中『ぐるっとパス』に言及しているのは74個で比率は0.5%だった。ただし、『ぐるっとパス』に言及し、かつ“博物館ブロガー”の住所が把握できた15人中、東京都および隣接する3県は14人と大半を占めている。また、この地域の1,021人の“博物館ブロガー”中『ぐるっとパス』に言及している比率は1.4%だった。この結果は、第2章で挙げたアンケートの結果とも整合性がとれており、『ぐるっとパス』という名称は必ずしも今回研究対象とした東京都の博物館を対象としたものとは限らないが、本調査で識別した『ぐるっとパス』への言及は、大半は東京のプログラムに関する東京近郊の在住者によるものであると判断した。

次に、“博物館ブログ”のデータを収集した2009年度・2010年度の両年度に『ぐるっとパス』の対象施設となった博物館から、その博物館の名称に言及している“博物館ブログ”の数が100個以上のものを18施設識別し、『ぐるっとパス』および、対象施設のいずれかに対して言及をしている64個のブログを抽出した。言及施設の平均値は6.3施設である。

(2) 複数の博物館の間の関係

個々の“博物館ブロガー”が言及している博物館名称の組み合わせを集計することで、複数の博物館

表1 『ぐるっとパス』スタンプラリー応募者数、質問回答数

	年間販売数 ※	スタンプラリー 企画概要		応募者数	応募比率	質問項目別回答者数			
						居住地	年代	年間の博物館・美術館利用回数	ぐるっとパス利用回数
2005年度	22,156	20施設以上 フリー押印		985	4.4%	981	973	未調査	未調査
2006年度	29,311			1,560	5.3%	1,556	1,550	1,508	1,512
2007年度	39,665	10施設 フリー押印 7エリア設定・各エリア1 + エリア間わないフリー3 の合計10施設	隔月抽 選で50 名にプ レゼント	4,335	10.9%	4,331	4,300	4,208	4,218
2008年度	41,480			2,344	5.7%	2,342	2,335	2,261	2,265
2009年度	41,397			2,488	6.0%	2,486	2,483	2,400	2,405
2010年度	41,521			2,377	5.7%	2,376	2,362	2,299	2,309

※は、『事業実績報告・財務諸表・収支計算書 財団法人東京都歴史文化財団』（平成15年度～22年度）。他は、「東京の美術館・博物館等共通入館券実行委員会」提供資料に基づく。

表2 最尤法による因子分析 (有意水準5%で検定)

		因子負荷				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
東京国立博物館	上野周辺エリア	0.68	0.16	0.18	0.09	0.53
国立新美術館	目黒・港エリア	0.79	-0.05	0.07	-0.13	0.65
国立西洋美術館	上野周辺エリア	0.59	0.25	-0.08	0.29	0.50
東京国立近代美術館	東京・皇居周辺エリア	0.65	0.12	0.18	0.12	0.48
世田谷美術館	世田谷・新宿・池袋エリア	0.65	0.17	0.18	0.19	0.51
東京都現代美術館	両国・深川エリア	0.51	0.51	0.24	0.08	0.58
損保ジャパン東郷青児美術館	世田谷・新宿・池袋エリア	0.59	0.17	0.07	0.33	0.49
国立科学博物館	上野周辺エリア	0.25	0.53	0.03	0.16	0.38
日本科学未来館	臨界エリア	0.29	0.93	0.16	-0.08	0.97
船の科学館	臨界エリア	0.10	0.70	0.14	0.03	0.52
葛西臨海水族園	臨界エリア	-0.08	0.57	0.05	0.24	0.39
東京都庭園美術館	目黒・港エリア	0.09	0.22	0.96	-0.02	0.98
江戸東京たてもの園	多摩エリア	0.21	0.37	0.13	0.62	0.58
東京都江戸東京博物館	両国・深川エリア	0.32	0.21	0.39	0.37	0.43
科学技術館	東京・皇居周辺エリア	0.07	0.47	0.11	0.20	0.28
三井記念美術館	東京・皇居周辺エリア	0.49	0.11	0.38	0.26	0.46
出光美術館	東京・皇居周辺エリア	0.36	0.10	0.49	0.39	0.53
東京都写真美術館	目黒・港エリア	0.31	0.45	0.41	0.25	0.53
	因子寄与	3.667	3.056	1.871	1.21	

の間の言及の相関を分析できると考えた。これにより、特定の個人がどのように複数の博物館に関心を持つのかを解明する材料が得られると考えた。

相関の構造を分析するために、18施設に対する言及状況に関して最尤法を用いて因子分析を行った結果、主要な因子として美術系博物館を中心とする第一因子、科学系博物館中心とする第二因子等を識別することができた(表2)。『ぐるっとパス』の利用によって、それぞれの因子で示したような特定の博物館の組み合わせのパターンにしたがって関心が広がったと考えられる。なお、『ぐるっとパス』には言及していない博物館ブロッガーではこのような構造は識別できなかった。

4 おわりに

今回の調査の結果、『ぐるっとパス』の購入者は、購入以前に比べてより多くの博物館に足を運んだこと、その際には、関心ある領域の館種を横断的に訪れていることを示した。これは、共通チケットが一般的に生み出す効果についての示唆になりえると考えられる。

また、今回試みた手法は、マーケティング活動のPDCA サイクルにおいて Check のプロセスをインターネット上の記述情報に基づき事後分析できた事例であり、活用の可能性は幅広いと考えている。特定の個人が、複数の博物館や展覧会に対して訪問した、または関心を持った、というデータが系統的に収集できれば、今回と同様の分析によって、関心の

喚起のパターンについて分析が可能である。博物館と市民との関係を示すデータは、日々インターネット上に蓄積されており、明確な意図をもてそこから様々な知見を得ることができる。引き続き、新しい調査・分析手法としての活用の方法を探りたい。

謝辞

『ぐるっとパス』の利用状況に関するデータは、「東京の美術館・博物館等共通入館券実行委員会」の事務局にご提供いただいた。ここに謝意を示す。

引用文献、ウェブ

- 本間浩一、西村秀和 2011「博物館に関心を持つ市民に関する調査手法の提案 —ブログの解析—」日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 第15号 pp.15-24. 日本ミュージアム・マネジメント学会
- 東京都歴史文化財団 2003-2010「事業実績報告・財務諸表・収支計算書」, 平成15年度~平成22年度

【参考ウェブサイト】

- (1) 丹青グループ 「インターネットミュージアム」(博物館・美術館・イベント情報サイト) <http://www.museum.or.jp/> (2010年11月検索)
- (2) 株式会社きざしカンパニー 「ブログランキング & 成分解析」サービス “blogram”, <http://blogram.jp/> (2010年3月検索)

地域資源を活用した暮らしのデザインミュージアム構想

—一年の暮らしを彩る知恵の出会い
みんなが主役になれるコンテンツ開発研究—
常磐大学 塚原 正彦

1 社会的背景と事業の意味 富の源泉は家庭のデザインを学ぶこと

情報革命がもたらした地球大交流社会では、政治や産業に代わって、人々を幸せにする富の源泉として、家庭へまなざしが向けられている。家庭は、自然と共生する暮らしの知恵や人と人との絆を学び、自ら暮らしをデザインする場で、生きる起点となる場である。東日本大震災は、人を幸せにする社会の仕組みは、家庭を起点に発想されなければならないことを私たちに教えてくれた。

それゆえ、産業からの発想を切りかえ、家庭を起点に衣・食・住のあり方を見直し、そのデザインを学ぶためのサービスと学びの成果を供する新しい仕組みをつくるのが求められている。

以上の問題意識にたって、私は“ふるさと力”と家庭に密着した“地場産業”を縁結びした未来ミュージアム構想に取り組んでいる。茨城県桜川市で実施した実証実験について報告するものである。

2 暮らしのデザインを学ぶミュージアムとは

今回の研究で構想するミュージアムは、全国の地域資源を活用し、日本のそして地球社会のあらゆる人々が、“暮らしのカタチ”にふれ、家庭を幸せにするデザインを学ぶための活動を核にしたミュージアムである。

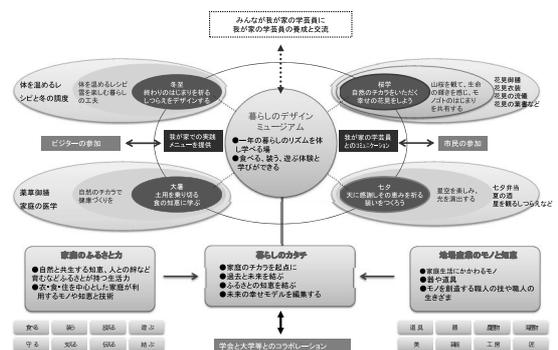
(1) ミュージアムのテーマ

ミュージアムの学びを、五節句+1、二十四節という一年の暮らしがテーマとして設定する。ここでは、過去と未来、地球上のあらゆるふるさとのモノと知恵を持ち寄り、未来の暮らしがデザインされる。ミュージアムでは、誰もが、「食べる」「装う」「遊ぶ」など“暮らしのカタチ”が体験でき、“我が家の学芸員”とのコミュニケーションをとおして、“暮らしのデザイン”を学ぶことができる。

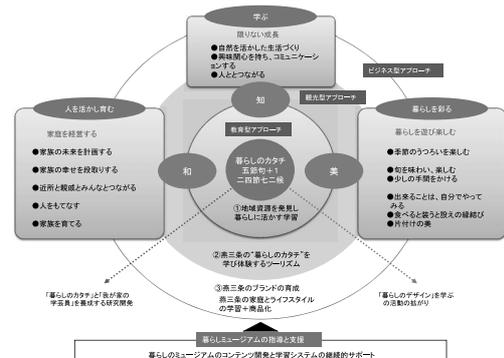
(2) 学びと交流のミュージアム

“暮らしのデザインミュージアム”は、人と人を結び、家庭を幸せにするまちづくりを支援する学びの

場と交流の場であると位置づける。プロジェクトのキーパーソンは、“暮らしのカタチ”を実践し、人々にコミュニケーションすることができる“我が家の学芸員”である。プロジェクトを起動するにあたって、未来への“暮らしのカタチ”を実践する“我が家の学芸員”を養成する“学びのプログラム”から事業をスタートさせながら、市民の暮らしを支援する。“暮らしのデザインミュージアム”の活動をとおり、「ふるさと力」と「地場産業」が「家庭の暮らし」を糸口に編集され学びに生まれ変わることによって、「滞在型の観光・学習のまちづくり」が実践され、新しい富が持続的に育まれることをめざしていく。



図表1. 暮らしのデザインミュージアムの事業イメージ



図表2. 「暮らしのカタチ」から「暮らしのデザインミュージアム」へ進化する概念図

3 事例研究 サクラからひろがる学びの世界を遊ぶミュージアムプロジェクト

さくらのふるさとミュージアム
—櫻川のサクラ保存育成研究会—

(1) さくらのふるさとミュージアムとは

“櫻川のサクラ”は、古代から日本の桜の代表的な名所とされ、歌枕として、歌に詠まれ、曲に表現されてきた。“隅田川のサクラ”“小金井のサクラ”など、江戸の桜の名所とされてきた桜の木は、“桜川のサクラ”から持ち寄せられたもので、“櫻川のサクラ”は、

まさに日本人にとっての桜のふるさとであった。

“櫻川のサクラ”の発祥の地、“櫻川磯部稲村神社”には、千年の時を超えて、ふるさとの人々に愛され、守られてきた11の固有種の山桜がいまも元気に花を開かせている。

千年前の輝きを失わないで、いまも花を開かせる「11種固有種の桜とそれを守ってきたふるさとの人々の桜への愛情の物語」を糸口に、日本人の心のふるさとであり続けてきたさくらを楽しく学び、未来を育むためのミュージアムを創設することにした。

“さくらのふるさとミュージアム”は、“櫻川のサクラ”とサイバースペースを縁結びして、過去と未来を結び、人と人を結び、未来デザインに挑戦する。

(2) さくらのふるさとミュージアム その活動

①守る

- a) “櫻川のサクラ”を保全し、未来に育成するための活動を実践する。
- b) “櫻川のサクラ”を育むための環境保全と次の世代に継承するための種や苗木の育成に取り組む。
- c) “櫻川のサクラ”を守ることが出来る人材の養成に取り組む。

②学ぶ

- a) 日本人の心のふるさとの桜を楽しく、ひろく、深く学ぶ

「“櫻川のサクラ”から地球の未来と幸せな暮らしがみえる」を目標に、日本人にとっての心のふるさとである桜をテーマに、誰もが、楽しく、ひろく、深く学ぶことができる学びのサービスを展開する。

- b) 桜からふるさとがみえ、地球がみえる

歌枕に詠まれてきた桜のふるさと“櫻川のサクラ”を糸口に、ふるさとの桜の物語、桜と景観などそれぞれのふるさとの桜にかかわってきた人々の思いを再発見し、桜と自然環境、地球環境とのかかわりなどを楽しく学ぶことができるサービスを提供する。

- c) 桜から暮らしがみえる

桜は、古来より物語のテーマであり、日本人の暮らしと深くかかわってきました。暦、衣・食・住そして歌や流行などふるさとの暮らしやデザインを中心に、桜を楽しく学び、暮らしを豊かにすることができるサービスを提供する。

d) 本物体験とバーチャル体験の縁結び

いまそこに生きている“櫻川のサクラ”と季節毎に変化し続ける“櫻川のサクラ”が記録されているサイバースペースの“櫻川のサクラ”を効果的に組み合わせながら、五感を刺激し、知の成長をはたらきかける新しい学びのサービスを提供する。

③歩く・みる・きく・そして謡う（“櫻川のサクラ”観桜の会）

日本人は、古来より、桜を愛で、自然からチカラをいただき、生命を育み、歌に謡い、交流し、文化を創造してきた。

先人の知恵を継承し、桜を歩く、みる、聞く、そして謡いついできた遊びと学びを振り返り、未来と縁結びした桜を楽習するフィールドツアーのプログラムを開発し、実践し、社会に提起する。

「桜を守り、桜に学び、桜を暮らしに活かし、みんなが幸せに」を目標にした新しい桜を歩いて、みて、きいて、謡う未来の花見を開発する。

④暮らしを楽しく（“櫻川のサクラ”のミュージアムグッズ）

日本人に桜のふるさと“櫻川のサクラ”から、人々の学びを育み、暮らしを彩る桜のミュージアムグッズを開発・紹介し、桜とともにある、ふるさととともにあるライフスタイルを提案し、ライフスタイルを育む学びのプログラムを提案する。

a) 桜を暮らしに活かした暦、b) 思いを伝える桜の手紙セット、c) ふるさとの桜を食べるメニュー、d) 桜を装うファッション、e) 桜を活かすインテリアなど、身近な暮らしを楽しむことができる各種のグッズを開発する。

⑤交流する（物語を共有する）

「さくらのふるさとミュージアム」は、みんなでつくるミュージアムを目指す。ミュージアム活動を通して得た桜への思いや学びの成果を物語に表現し、その共有し、人と人を結びつける交流プログラムをサイバースペースに設定するとともに、実際の“櫻川のサクラ”を舞台に、物語を共有し、交流するための交流会を開催する。

⑥人を育む（さくらのふるさと学芸員）

“櫻川のサクラ”観桜の会の企画・運営する「さくらのふるさと学芸員」を養成し、その活動や成

果は、ミュージアムのキャリア・カルテに記録され、それぞれの資質に応じて、ライセンスを付与する。

「さくらのふるさと学芸員」は、学びのプログラムの開発やミュージアムグッズの開発にも携わることができる。

⑦未来の“櫻川のサクラ”をつくる

ミュージアム活動に参画するみんなの知恵とチカラをあわせて、11の固有種と11の固有種が結びついて出来た新しい種を組みあわせ、未来への“櫻川のサクラ”とその景観づくりに挑戦する。

参加者がかけた手間と思いを込め、一本の苗木を“櫻川”に、植林する。毎年咲いた花を写真に記録したり、花から年賀状をつくったり、さくら餅をつくったり、桜と暮らしを結びつけた学びのメニューが提供され、参加者の体験は、サイバースペースに、物語として記録される。

(4) 地域資源調査と地域資源の物語化

植物としてのサクラの特徴とサクラの手入れから開花するまでの一年をとおしての人とのかかわりを明らかにするため、地域資源学芸員によるフィールドワークを実施し、“櫻川のサクラ”を物語化することで、サクラの物語コンテンツを創造する活動からプロジェクトをスタートした。

櫻川のサクラ博物学研究序説

人々は、桜を愛で、自然のチカラをいただき、時の移ろいを感じ、その思いを歌い、継いできました。「西の吉野、東の桜川」といわれた。この大地には、千年の時を超え、数多の物語を育み続けてきたサクラとそれを守り継いできた人々の物語が生き続けています。



櫻川のサクラを見つめながら、五感を研ぎ澄ませ、色、風、匂い、ぬくもりを感じてみてください。そうすると、時を超えて人々を魅了してきた、サクラの色や輝きが見えてきます。匂いや香りを感じることができません。桜を愛でる声、音が聞こえてくるはず。今はみえないけれども、サクラを守り続けてきた人々のチカラがみえてくるはず。時を超えてこの土地に息づいている大いなる自然のチカラと人々の絆が、きっとみえてくるはず。



櫻川のサクラにふれ、季節を感じ、命の輝きを感じた人々が、その感動を歌に詠むようになります。歌は歌をよび、人々に広まり、物語が育まれてきました。そうして、櫻川のサクラは、歌に成り、人々に語り継がれました。「つねよりも 春べになれば さくら川 波の花こそ まなくすため」紀貫之の作品です。彼もまた、遠い都から、今を盛りと咲き誇る川辺の桜を思い浮かべ詠んだものでしょう。

15世紀(室町時代)に世阿弥は、櫻川のサクラを素材に、「謡曲桜川」を創作しました。世阿弥が生涯に書いた戯曲は、『高砂』『井筒』『実盛』など50曲ほどしかありません。実際に世阿弥がこの土地を訪れたという記録は残っていません。しかし、その謡曲の中に歌われた2本のサクラは、時を超え、この神社に生き続けています。

江戸時代になると、花見という集いが誕生しました。そこから多彩な食やしつらえにまつわる桜の流行文化が育まれました。江戸の桜のふるさは、櫻川の桜です。将軍家光に時代に隔田川治(今の木母寺付近)に櫻川のサクラが植栽されました。皇居、上野公園、北区飛鳥山公園、新宿御苑、武蔵野の小金井公園などに櫻川のサクラが運ばれていきました。



櫻川の桜は、ヤマザクラの研究の対象としても注目されてきました。明治44年と大正3年の2回、植物学における桜研究の先駆けとなった三好博士が調査に訪れました。三好先生は、この土地の11種の固有種を特定し、名称をつけ、「桜花図譜」に記録しています。三好先生の学術研究成果もあり、大正13年12月9日に、櫻川磯部稲村神社は国指定史跡名勝となります。そのうち11種の固有種が昭和49年7月16日に天然記念物に指定されます。



花が咲き終わり、受粉すると桜には種がつかます。夏が訪れるころ、磯部神社にも、さくらんぼの小さいのが、たくさんできてきます。桜は、自家不和合性という特徴を持っています。同じ木のおしとめしべでは受粉できません。桜の種ができるというのは、たくさんの種類のサクラが生きているからこそ、素晴らしい特別な景観です。一粒の種が地面にこぼれ、その中のいくつかが発芽します。種からできた桜は、それぞれの固有種の性質は受け継ぎますが、同じカタチの桜は2度とできません。



元の樹と同じ樹を守り、殖やすには、手間をかけたり、接木や挿木をしたりして、守っていくしかありません。サクラの固有種がたくさんあるということは、それを人のチカラで受け継いできたということなのです。

磯部神社には、三好先生が名前をつけた11種のヤマザクラがあります。世阿弥や紀貫之が詠った桜が人の手によって守られ、千年の時を超え、受け継がれたサクラもあります。植物としての桜の性質と人がかかわってつづけてきた桜の物語に注目しながら、桜のふるさとを楽しんでみることにしましょう。

地域資源学芸員による協働作業により、これまでバラバラであった情報が編集され、次のコンテンツを製作することができた。

(5) 今後の展開

2012年度は、櫻川のサクラについての物語コンテンツを教材に、学びの視点から桜を楽しむ「観桜の会」を企画し、桜を愛で学び、楽しむためのプログラム、ミュージアムグッズの開発を実施した。それにあわせて、櫻川のサクラを語ることができる「ふるさと学芸員」の養成に取り組んだ。

それらのプログラムの成果については、2012年度内にホームページや書籍などの形態で発信し、参画者募り、共感者を増大させミュージアム活動の規模をより大きなものにしていくことを検討している。

4 課題と今後の展望

暮らしのデザインミュージアム構想はまだスタートしたばかりである。これからは、は、七夕、月見、雪見、ひな祭り、そしてさらには24節72候に至るま

桜のふるさと櫻川のサクラ「桜の友」

毎年、春はここに来る。この時期しか会えない、友が、待っている。(於：磯部稲村神社)



その友に、会わせてくれたは三好 学。三好という名付け親がいたことで、私は11人の友を得た。

その1人。大和の名を持つ、この友は、少々むねれものだが、それは生命力の裏返し。時折、花弁を増やして私を待っている。磯部、また、白山とも呼ばれる友は、のろけ上手。白い頬を、幸せ色に染めていく。



さまざまに名の付けられた、個性豊かな「友」たち。彼らの子もまた、親に似ず個性豊かに育っていく。

その個性を守るのは人。人が手をかけねば生きられない友、桜。だからいつだって、私達の側にいる。

側にゆく。桜があるから、人があつまる。

桜があるから、また、会える。桜が、私達をつないでいく。

春の陽の中を歩いた。「来年も、また」。そう、唱えて。



※1 三好 学氏：1862-1939。植物学者であり、桜・菖蒲に関しての第一人者。明治42、43及び、大正初期に桜川を調査し、特徴のある桜、11種に名前をつけた。

※2 大和桜：通常5枚より花弁が多い(6-8枚)。幹がせん状になっており、厳しい自然環境で生きる様を見せてくれる。また、呼吸のための穴(皮目)が幹にあるのが確認することができる。



※3 磯部桜(白山)：咲いたときは白い花弁だが、受粉すると中心から赤く染まってくる磯部神社固有の品種。

※4 自家不和合性：同一個体の花弁によっては受粉ができないこと。故に、同一個体が自然界に存在することはない。同一個体を増やす場合には、人間の手によってクローンを増やしていくしかない。

で多数のミュージアム事業まで想定することができる。それらの課題に対しては、「櫻川のサクラ」の実証実験を参考に、人材の養成とふるさとの宝物をさがす祖だし、物語コンテンツをつくりだすコト起こしから取り組んでいきたい。

絵本に見るミュージアム

京都国立博物館 栗原 祐司

1. 絵本と絵本美術館の重要性について

絵本は、言語が未発達段階にある乳幼児に対し、視覚に訴えることによって事物の理解と認識を促進させる役割を有しており、子どもたちが生まれて初めて触れるアートの世界であると同時に大人もともに受容しうるアート表現である。アートを生活の一部として体感し続けるための場としての社会における絵本美術館（Picture Book Museum）の役割は、大きい。我が国には多くの絵本美術館があり、絵本学会が2003年度に実施した「全国絵本ギャラリー調査」の対象施設は55館、国際子ども図書館を考える全国連絡会が2007年7月に実施した「絵本ミュージアムの状況に関するアンケート調査」では61館（十対象漏れ3館）に上る。絵本美術館の多くは、絵本を“読む”ことを目的とした図書館的機能とともに、絵本の原画を“見る”美術館的機能も有しており、館の性格によってそれら機能の割合は異なる。社会のためのミュージアムを考えた場合、幼少年期からミュージアムに対する意識を高めるためには、こうした絵本美術館のみならず、絵本の果たす役割を再認識する必要があるだろう。近年、ミュージアムが自ら企画して絵本を出版したり、展覧会にあわせて絵本を制作するなどの事例がみられるようになってきているが、ミュージアムにおける絵本の活用方策について検討すべきではないか。これが今回の発表の問題意識である。

2. ミュージアムを舞台・テーマにした絵本の分類

ミュージアムを舞台または題材（テーマ）とした絵本は、以下のように分類できる。

- ① ミュージアムの概念そのものや楽しさを学習する絵本
- ② ミュージアムの展示やコレクションを紹介する絵本
- ③ ミュージアムで働くこと（職業）や専門家を紹

介する絵本

- ④ ミュージアムを舞台として物語を展開する絵本
- ⑤ ミュージアムの収蔵品等をもとに物語を展開する絵本
- ⑥ ミュージアムの出版物としての絵本

以下、この分類に基づいて、これまで国内外で販売された絵本を概観してみたい。

- (1) ミュージアムの概念そのものや楽しさを学習する絵本

まず、デック・ブルーナーのミッフィー・シリーズには、動物園・水族館や美術館が登場する。我が国では、1960年代に石井桃子訳で「うさこちゃん」として紹介されたが（『うさこちゃんとどうぶつえん』（石井桃子訳、1964、福音館書店）など）、近年は「ミッフィー」で定着しており、『ミッフィーのたのしいびじゅつかん』（角野栄子訳、2005、講談社）では、初めて本物の美術作品に触れた幼い子どもの新鮮な驚きと感動が描かれている。また、同書をベースに、「美術館に行こう！デック・ブルーナーに学ぶモダンアート」展が、全国各地の美術館等で開催されており、関連のDVD等も販売されている。2012年に東京都美術館で「マウリッツハイス美術館展」を開催した際、特別企画としてミッフィーがフェルメール作品を解説する絵本『こどもと絵で話そう ミッフィーとフェルメールさん』（2012、美術出版社）が刊行され、「真珠の耳飾りの少女」の姿をしたミッフィーのぬいぐるみとともに販売され、話題になったことは記憶に新しい。

このほか、わかやまけんほか『こぐまちゃんとどうぶつえん』（1970、こぐま社）、福武忍『どうぶつえんにいこう』（監修：村田浩一、2001、文溪堂）・『すいぞくかんにいこう』（監修：坂本和弘、2003、文溪堂）、あいはらひろゆき『どうぶつえんにいきましょう』（2006、教育画劇）、大宮市立博物館『博物館ってたのしいな』（1987、岩崎書店）、高橋直裕『美術館ってたのしいな』（1987、岩崎書店）、小森厚『動物園ってたのしいな』（1987、岩崎書店）などがある。アメリカでは、子ども向けの入門書（写真つき絵本）で、J. M. Parramon, G. Sales の my first visit シリーズがあり、“my first visit to the Zoo”（1990）、“my first visit to the Aquarium”（1990）、“my first visit to the Aviary”（1990）、“my first visit to the Farm”（1990）が刊行されている。子ども向けの入門書は動物園が圧倒的に多く、Jonathan Webb “WHAT’S a Zoo Do?”（1995）、“My First Trip to the

Zoo” (2012)、“My Trip to the Zoo” (2002) など多数刊行されている。

(2) ミュージアムの展示やコレクションを紹介する絵本

ミュージアムの機能ではなく、博物館展示や資料(コレクション)を紹介する絵本も多い。すなわち、ミュージアムに行けばこうしたものに出会えるという内容の絵本で、ストーリー性はあまりない。

Barbara Lehman “MUSEUM TRIP” (2006) は文字のない絵本だが、我が国でも『ミュージアム・トリップ』(2008、評論社)として販売されている。学研の「ほんとおおきさシリーズ」では、小宮輝之監修『ほんとおおきさ 動物園』(2008、学研)、高岡昌江著、小宮輝之監修『もっと!ほんとおおきさ 動物園』(2009、学研)、小宮輝之監修『ほんとおおきさ なかよし動物園』(2011、学研)、『ほんとおおきさ 水族館』(2010、学研)、高岡昌江著、岡島秀治監修『びっくり!ジャンボ昆虫園』(2011、学研)等が刊行され、2012年には被災地支援のためにお小宮輝之監修『ほんとおおきさ特別編 元気です!東北の動物たち』(2012、学研)が刊行された。結城昌子『小学館あーとぶっく ひらめき美術館』(1996、小学館)は、実在する世界中の美術館にある作品を鑑賞するガイドブックで、第3館(「巻」ではない。)まで出版されている。須藤ごう『夜の音楽美術館』(2005、福音館書店)は、音楽をモチーフにした作品を鑑賞する内容で、Susan Herbert “The Cats Gallery of Art” (1990) は、名画の中のモデルをネコに置き換えた絵本で、邦訳され『猫の美術館』(1990、美術出版社)が刊行されている。

(3) ミュージアムで働くこと(職業)や専門家を紹介する絵本

アメリカには、ミュージアムでの仕事や専門家を紹介する絵本が多く、Arthur John L’hommedieu “Working at a Museum” (1998) は、ブルックリン・チルドレンズ・ミュージアムにおける Curator, Educator, Director 等の専門家の仕事を紹介している。また、同じシリーズの Bertram T. Knight “Working at a Zoo” (1998) はマイアミ・メトロ動物園における Curator, Keeper, Animal Doctor 等の専門家の仕事を紹介している。このほかサンディエゴ動物園の飼育員の仕事を紹介する Tami Deedrick “Zoo Keepers” (1998) 等があるが、残念ながら日本にはこうした絵本がほとんどない。幼少期からミ

ュージアム・リテラシーを高めていくためには、こうした企画・出版が今後必要ではないだろうか。

(4) ミュージアムを舞台として物語を展開する絵本
必ずしも実在するミュージアムではないが、ミュージアムはその収蔵品がふだん我々の生活に存在しないものが多いためか、ミュージアムを舞台として物語を展開する絵本は多い。映画化されて人気を博したミラン・トレンク『夜の博物館』(2007、講談社、原題 “Night at the Museum” (1993)) などはその典型であろう。アメリカの銅版画家であるアーサー・ガイサート作、久美沙織訳『ミステリー』(2005、BL出版、原題 “Mystery” (2003)) は、博物館でおいしい絵ばかりが盗まれ、小さな子ブタがこの謎を解決する。ロラン・ド・ブリュノフ作、せなあいこ訳『ババールの美術館』(2005、評論社、原題 “Babar’s Museum of Art” (2003)) は、フランスの「ぞうのバハール」シリーズの一つで、バハールが駅の建物を美術館にして名画を鑑賞する。『猫の美術館』の象バージョンだが、ストーリー性がある。「美術品にはね、こうでなくてはならない、なんていうルールはないんだよ。」「その人がどんなことを、どんなふうにかんじて、自由なんだ。」というセリフがうれしい。アン・グッドマン作、ゲオルグ・ハレンスレーベン絵、石津ちひろ訳『リサとガスパールの博物館』(2001、プロンズ新社、原題 “Gaspard et Lisa au musee” (2001)) は、フランスのリサシリーズで、リサとガスパールが美術館の展示品にいたずらをする。M. & H. A. レイ作、渡辺茂男訳『おさるのジョージどうぶつえんへいく』(1999、岩波書店、原題 “Curious George Feeds the Animals” (1998))、福本友美子訳『おさるのジョージすいぞくかんへいく』(2009、岩波書店、原題 “Curious George at the Aquarium” (2007)) は、映画化もされ人気を博したおさるのジョージシリーズで、動物たちに勝手に食べ物やってはいけない、悪い食べ物で病気になることがあるということなどが学べる。アン・グッドマン文、ゲオルグ・ハレンスレーベン絵、ひがしかずこ訳『ペネロペ ルーヴルびじゅつかんにいく』(2009、岩崎書店、原題 “Penelope au Louvre” (2007)) は、ペネロペシリーズの楽しいしかけ絵本で、ルーヴル美術館にある名画を学ぶことができる。けーたろう文、なかいれい絵『おぼけのマールとまるやまどうぶつえん』(2005、中西出版)、『おぼけのマールとちいさなびじゅつかん』(2008、中西出版) は、札幌を舞台にしたシリーズで、それぞれ札幌市円山

動物園、北海道立三好太郎美術館を舞台におぼけのマルが活躍する。池田あきこ『タシールエニット博物館』（1995、ほるぷ出版）は、わちふいーるどの猫のダヤン・シリーズの一つで、河口湖の木の花美術館の建物は、作品中に登場するタシールエニット博物館の絵をもとにしている。

(5) ミュージアムの収蔵品等をもとに物語を展開する絵本

ミュージアムの収蔵品等をもとに物語を展開する絵本については、(2) よりもストーリー性があり、(4) よりもコレクション中心のストーリー展開になっているものを分類した。

クリスティーナ・ビョルク作、福井美津子訳『リネア モネの庭で』（1993、世界文化社、原題“Linnea I Malarens Tradgard”（1985））は、欧米で100万部を超えるベストセラーとなったスウェーデン生まれの絵本で、リネアがパリにあるクロード・モネの庭に行き、睡蓮池の“日本の橋”に立ったり、印象派の絵について学ぶ内容である。トーマス・ブレツィナ作、越前敏弥、田中亜希子訳『冒険ふしぎ美術館 ダ・ヴィンチのひみつをさがれ！』（2006、朝日出版社、原題“Museum of adventure Who can save Vincent's Hidden Treasure?”（2005））、『冒険ふしぎ美術館 ミケランジェロの封印をとけ！』（2007、朝日出版、原題“Museum of adventure Who can save Vincent's Hidden Treasure?”（2005））は、工作キットが付録としてついており、なぞ解きをしながら名画を楽しむ内容。理論社のようなねんどわシリーズの長新太『ボンヤリどうぶつえん』、『ノンビリすいぞくかん』（いずれも1996、理論社）は、動物園の動物や水族館の魚たちも旅に出たり、町にくりだすという奇想天外な物語が展開される。西岡りき作・絵『おじいちゃんのふしぎな動物園』（2009、フレール館）は、円筒状のミラーを立てて、浮かび上がった絶滅した動物を見る、しかけで楽しむ絵本。「妖怪ホテル」シリーズの妖怪ホテル編集委員会『博物館の妖怪ホテル』（2011、ポプラ社）は、子ども向け読みで、やはり博物館のコレクションが話の核となっている。

実際にあった話を絵本にしたものとしては、井上こみち文、松成真理子絵『ハナゴンドウのノンちゃん』（2006、佼成出版社）、鈴木隆史文、山崎洋子絵『イルカのラボちゃん』（2007、福井新聞社）、葉祥明絵・文、『奇跡の樹 よみがえった大フジのおはなし』（2002、下野新聞社）等がある。それぞれ2005

年の福岡県西方沖地震で被災した海の中道海洋生態科学館（マリンワールド海の中道）のハナゴンドウ、1997年のナホトカ号重油流出事故で奇跡的に助かった越前松島水族館のイルカ、あしかがフラワーパークの園長、日本の女性樹木医第1号の塚本このみ氏による大藤の移転をテーマとしている。

(6) ミュージアムの出版物としての絵本

ミュージアムが自ら絵本を出版している例としては、九州国立博物館による「きゅーはくの絵本シリーズ」（2005～、フレール館）が圧巻であろう。研究員等が企画編集に携わり、博物館の収蔵品をより身近に楽しむことができる。もともとは職員の思い付きで始まったプロジェクトだったが、現在は10巻刊行されている。伊丹市昆虫館では、企画展をもとに構成・文：角正美雪『むしのうんこ』（2005、柏書房）、構成・文：奥山清市、角正美雪『むしのあかちゃん』（2006、柏書房）を出版した。岡本亘由『シャガール物語』は、芦屋にある私立のマイシャガール美術館のオリジナル絵本である。大阪市立自然史博物館は、来館者用ミニガイドとして『ナウマンゾウ おおさかにいたゾウのはなし』（2012）を作成した。

展覧会図録としてポップアップの絵本を作成した例としては、『オサムシが語る進化のおはなし』（2003、JT 生命誌研究館「みえてきた進化の姿-オサムシ研究からのメッセージ展」）、『東京一建築・都市伝説』（2001、江戸東京博物館・江戸東京博物館たてもの園「東京建築展」）等がある。荒井良二『スキマの国の美術館』（2007）は、絵本作家による同名の展覧会の図録がそのまま絵本になっている。このほか海外では、Philip Yenawine “How to Show Grown-Ups the Museum”（1985、MoMA）、Lois Wyse & Molly Rose Goldman “How to take your Grandmother to the Museum”（1998、アメリカ自然史博物館）、J. Otto Seibold, Vivian Walsh “Going to the Getty”（1997、ポール・ゲッティ美術館）、Shamini Flint “SASHA visits the MUSEUM”（2008、シンガポール国立博物館）、L'art En Jeuシリーズ（1989～国立ポンピドゥ・センター），“Museum ABC”（2002、メトロポリタン美術館），“Museum123”（2004、メトロポリタン美術館）、『我的動物園麻吉！』（2006、台北市立動物園）、洪金禪『空間這個搗蛋鬼』（2010、高雄市立美術館）等の例がある。

3. まとめ

絵本は、乳幼児への読み聞かせや視覚効果を通じ

て、ミュージアムに対する親近感をもたせる効果が期待できる。また、絵本の教材としての活用は、ミュージアムに足を運ばせるガイダンス機能やインセンティブ効果となり、館がオリジナルで作成する意義は大きいと思われる。乳幼児が自主的にミュージアムを訪問することはあり得ないが、乳幼児がまだ見ぬミュージアムに興味を持つことによって、両親に行くことを求めることは十分考えられ、その結果、両親がミュージアムに興味を持つようになることも期待できるのではないだろうか。また、将来の人材養成という観点から、今後、展示以外のミュージアム活動や学芸員の仕事内容等を人々に知ってもらうための絵本の開発も必要であろう。そのためのツールとしては、絵本だけでなく、前回及び前々回に発表したマンガやアニメ、映画等の影響も大きい。社会におけるミュージアムの役割を考えたときに、これらの活用も今後積極的に検討すべきであろう。

ミュージアムにおける 学びを通じた子育て支援の実践

子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会
代表 川人よし恵^{注1)}

「子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会」は、学芸員や展示プランナー、博物館教育研究者、ミュージアムコンサルタントなど、多様な形でミュージアムに関わる専門家が集まって2009年4月に発足し、「ミュージアムでの学びを通じた子育て支援の模索」をテーマに、実践的に研究を進めている（メンバーには、子育て中の人がいればそうでない人もいる）。2009年の当研究会の事例調査から見えてきた、各地のミュージアムで乳幼児連れ利用者へのプログラムやサービス面での対応が遅れている状況を受け、2010～2011年度に当研究会が取り組んできた活動より、主なものについて報告する。

1. 0・1・2歳児連れユーザーの利用実態調査 (2010年度／伊丹市昆虫館)

2009年度に当研究会が国内のミュージアム等11件にヒアリング調査をしたところ、無料ユーザーなので実数は正確に把握できないものの、どの館でも来館者の低年齢化が進み、ベビーカーやよちよち歩きの子を連れた利用者が増えていると感じていた。幼稚園・保育園等の団体でも来館する3歳児以上につ

いては、一部の館では展示やプログラム等での対応が進んでいたが、いわゆる未就園児、つまり、0・1・2歳児については、おむつ替えシートや授乳室といった設備面での対応のみで、ソフト面では対応できていない・どう対応していいかわからないといった声が聞かれた。その一方で、国内のミュージアムにおける0・1・2歳児と親の利用実態についてこれまでに調査された例は無かった。

そこで2010年度に、0・1・2歳児とその家族のミュージアム利用実態およびニーズを明らかにするための調査^{注2)}を、伊丹市昆虫館（以下、昆虫館）において、同館の学芸員である坂本昇氏および角正美雪氏と共同で実施した。0・1・2歳児とその親13組（モニター6組、育児サークルメンバー7組）を対象に、行動観察調査および聞き取り調査を通じて、昆虫館で過ごしている時の気持ちや展示に対する関わり、利用する上での問題点などについて整理した。

調査対象としては、無関心層ではなく、いわゆる“感度が高く”、機会があれば昆虫館に来ようと思う親に協力いただいた。親の内訳は、父親2人、母親11人、20代2人、30代8人、40代3人であった。子どもの内訳は、男児8人、女児5人、0歳1人、1歳5人、2歳7人であった。ちなみに、親自身、昆虫に興味がある人もいれば、そうでない人もいた。「自分は苦手だが、子どもは虫嫌いになってほしくない」という声もあった。日ごろ昆虫と接する機会としては、「子どもと一緒に観察する」、「蚊やゴキブリなど害虫対策をとる」などを挙げた人が半分強で、残りは接する機会がほとんどなかった。

4日間にわたる利用実態調査を通して、子ども達は、「館内を歩くこと」や「階段・ステップの上り下り」、「物の受け渡しによる親とのコミュニケーション」など、展示内容の理解とは別に、発達段階に応じた楽しみ方をしていることが分かった。また、親達の楽しみは、「初めて虫にさわられた等の経験を通じて子どもの成長を実感」したり、「子どもと体験を共有する喜びを味わう」など、日常生活で感じている子育ての楽しみと共通する部分が多かった。ほかにも「子どもが親から少し離れてハンズオン展示で遊んでいる間に自分は一息つく」、「家庭ではできない体験・知識を得る」など、ミュージアムならではの非日常の経験も、楽しい場面として挙げられた。その一方で、「展示位置が子どもの目の高さ合わないことによる抱っこが負担である」、「子どもから目を離せないため文字解説を読む余裕がない」等、利用にあたっての問題点が明らかになった。



0・1・2歳児の視線は極端に低い



はじめてアオムシに触れたことを母親に報告、記念撮影

これらの結果から、0・1・2歳児とその親は、館が想定した展示との関わりにとらわれない多様な形で楽しみを見出している反面、館の想定と実際の利用のマッチングがあまりうまくいっていないため、展示に十分関わっていないと言える。

そこで、0・1・2歳児とその親を、より展示に関わりやすくするための要素として、「親子一緒に見学・体験できる」「普段から慣れ親しんでいるものをきっかけにする」「文字解説を読まなくても楽しめる」「子どもの発達段階に応じた動作で楽しめる」という4つを調査結果から抽出し、展示との関わりを促す支援ツールを開発した。具体的には、歩き始めの子どもが自然に上りたくなり、抱っこしなくても展示が見られる“ステップ（踏み台）”、視線の低い子どもをステップ設置場所まで誘導する“床シール”、文字解説を読む余裕がなくても、親子一緒に歌うこ

とで楽しめる“虫のうた”の3つである。これらの支援ツールを通して展示利用が改善されるか、約1か月半にわたって昆虫館内で試行し、その効果を検証するアンケート調査を0・1・2歳児連れの来館者に実施したところ、「支援ツールにより展示を利用しやすくなった」という回答が、協力者23組のうち約74%から得られた。

2. 0・1・2歳児とその親向けのミュージアム・スタート・プログラム実施

(2011年度/伊丹市昆虫館、伊丹市立こども文化科学館、伊丹市立伊丹郷町館)

前年度の利用実態調査では、「ミュージアムは小さい子どものいる家族にとっては敷居が高い印象がある」などの意見が聞かれ、0・1・2歳児を持つ親が、昆虫館に限らずミュージアムに対して、小さな子どもを連れての利用を躊躇していることが明らかになった。

そこで2011年度は、伊丹市立こども文化科学館、伊丹市立伊丹郷町館、伊丹市昆虫館の3館と連携し、それぞれ独自のコンテンツを対象者向けにアレンジした「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」^{注3)}という体験プログラムを企画実施することで、この層にミュージアムへの来館自体を促した。

3館それぞれのプログラムの企画にあたっては、前述した、0・1・2歳児と親を展示に関わりやすくするための4つの要素「親子一緒に見学・体験できる」「普段から慣れ親しんでいるものをきっかけにする」「文字解説を読まなくても楽しめる」「子どもの発達段階に応じた動作で楽しめる」を考慮した。また、ミュージアムならではのコンテンツを0・1・2歳児とその親向けに翻訳するため、八尾詩子氏（キッズプラザ大阪プランナー）に協力を仰ぎ、「導入ワークショップ」を実施した。加えて、参加者のプログラムへの積極的な関わりを促し、自宅に帰ってか

[3つの体験プログラムの概要]

プログラム名と 実施館/各館ならではのコンテンツ	導入ワークショップ	オリジナルツール
「はじめまして、おほしさま」 こども文化科学館/星、プラネタリウム	・空をテーマにした遊び ・絵本読み聞かせ ・おほしさまランプ工作遊び	・おほしさまランプ ・星の鈴
はじめまして、おひなさま 伊丹郷町館/町家、 明治・大正・昭和の雛飾り	・春をテーマにした手遊び ・絵本読み聞かせ ・うさおひなさま工作遊び	・うさおひなさまタオル
はじめまして、あおむしくん 昆虫館/生きたアゲハ幼虫（アオムシ）	・形とさわり心地をテーマにした 工作遊び	・あおむしくんシート（子ども向け） ・あおむしくん観察記録（親向け）



伊丹市立子ども文化科学館「はじめましておほしさま」
「おほしさまランプ」を使った導入ワークショップ



伊丹市立伊丹郷町館「はじめまして、おひなさま」
「うさおひなさまタオル」でうさぎ雛づくり



伊丹市昆虫館「はじめまして、あおむしくん」
アオムシとわが子の様子を観察し記録する「あおむしくん観察記録」

らもミュージアムでの経験を再現したりふりかえったりできる「オリジナルツール」の開発・活用を組み込み、0・1・2歳児と親の日常とミュージアムでの非日常をつなごうと試みた。

これらのプログラムは、市内3館の連携によるキャンペーン的な取り組みとして新聞で紹介され、小さな子ども連れでの来館を歓迎する各館の姿勢を発信できた効果が大きく、参加申込受付開始当日にいずれも満席になるほどの人気を博した。参加者アンケート結果も、「子どもが声を出して反応し楽しんでいた。それを見ている私も楽しかった。」「帰ってからも、おほしさま見たねとか、月を見ては、プラネタリウムのことを話している」「意味は分からなくても触れさせておくのはよいことと感じる」「また家族で昆虫館に来てみようと思う」など大変好評で、この種の企画へのニーズの大きさおよび、ミュージアムの既存コンテンツのアレンジによる新たな活用の可能性が明らかになった。

3. まとめ

以上を通じて、限られた事例ではあるが、ミュー

ジウムを、子育て期の親の「家ではできない体験・知識を子どもと一緒に得たい」「子どもの成長を実感したい」等の思いを満たし、子育ての日常に活力を与える場所にできたと自負している。このことから、当研究会では、ミュージアムは子育て支援の場となる資質を十分に備えていると考え、今後も、ミュージアム活動の新たな機能としての可能性を実践的に追究していきたい。そして、これまで利用の対象として特に注目されてこなかった乳幼児連れという層に対しての教育活動のあり方についても模索し、ミュージアムの将来にわたる利用者確保と活性化に貢献したい。

注

- 1) 本稿は「こそっと研」の川人よし恵、内田みや子、黒岩啓子の3名の連名で発表登録し、川人が発表した内容をもとに追記したものである。
- 2) 「0・1・2歳児連れユーザーの利用実態調査」は、財団法人日本科学協会 平成22年度笹川科学研究助成(研究代表者 坂本昇/伊丹市昆虫館)により実施した。

3) 「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」は、当研究会が平成23年度 子育て元気アップ活動助成事業(兵庫県)に応募し、その助成金をもとに実施した。伊丹市内の3館との連携にあたっては、伊丹市文化振興財団の協力を得た。

ミュージアムにおける乳幼児連れ利用者対応に関する一考察

Learning Innovation Network 代表
子育てがもっと楽しくなる

ミュージアムづくり研究会 副事務局長

黒岩 啓子

1. 乳幼児連れ利用者に関する現状

「子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会(以下、こそっと研とする)」からの発表として、ミュージアムが乳幼児とその保護者を対象として教育普及事業に取り組む意義や課題について、伊丹市内で行った実践研究「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」⁽¹⁾の調査結果をもとに考察する。

ミュージアムにおける子どもへの対応については、学校教育との連携を考えたり、「ファミリーグループ」というカテゴリーで語られたりすることが多い。就学年齢前の子どもを対象に実践している館もいくつかあるが、多くは3歳ごろからの幼少児を対象にしている。特に、会話能力が未発達な乳幼児を連れた利用者を、具体的に教育普及プログラムの対象者・ターゲットとして設定することはまだ少ないと言える。

子ども向けに設置された展示スペース、例えば滋賀県立琵琶湖博物館のディスカバリールームやキッズプラザ大阪のようなチルドレンズ・ミュージアムなどでは、乳幼児を含む子どもたちが歓声をあげたり、自由に動き回ったりして楽しく博物館体験をしている様子が見られる。

けれども一般的に、乳幼児が泣いたり騒いだり動き回ることに對して、他の来館者から冷やかな視線が注がれたり、彼ら向けのサービスが不十分だったり、保護者が遠慮をしたりということが見受けられる。この意味において、0～2歳の乳幼児とその保護者は、ミュージアムという社会においては弱者であると言える。

このような状況の中で、伊丹市昆虫館の年間来館者数における未就学児の割合は右肩上がりが増えて

きており⁽²⁾、彼らに対するサービス向上が課題になっている。さらに、伊丹市内では毎年約2,000人の新生児が誕生しており⁽³⁾、彼らは将来ミュージアムを利用する可能性があり、ミュージアムからも利用してもらうことを期待できる、潜在的ミュージアム利用者として捉えることができる。

これらのことから、ターゲットとして見落とされていたり、まだ十分な対応が取られておらず遠慮がちな思いを抱いたりしている乳幼児連れ利用者を対象者として設定し、ソーシャルインクルージョンを具現化するための新しい取り組みを実施していくことが必要だと考える。

2. 「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」参加者アンケート調査結果

そこで、こそっと研は伊丹市立こども文化科学館、伊丹市立伊丹郷町館、伊丹市昆虫館と共同で、「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」という体験プログラムを実施し、開催後に参加者と実施館の協力スタッフに自記式アンケートを行った。

2-1. 参加者の属性

まず、参加者の属性から見てみると、22組の母子が参加し、母親22人の年齢は未記入のため不明が3名いたが、22歳から45歳で、平均33.5歳となった。居住地を見ると、伊丹市からの参加者が50%で一番多く、その後尼崎市からが27%、西宮市からが14%、川西市からが9%となっており、プログラムを実施した伊丹市の近隣市内からも参加していたことが分かる。子どもは0歳児が6人、1歳児が11人、3歳児が8人、その他2人の合計27人が参加した。「はじめまして、おひなさま」のプログラムには、0歳児の参加がほか2つのプログラムと比べて多かったという特徴が見られる。

次に、子どもの性別を見ると、全体では男の子が12人、女の子は15人の参加があった。「はじめまして、おひなさま」のプログラムには、ひな祭りが女の子のお祝いというイメージがあるためか、女の子が約86%となっている。

2-2. ミュージアム経験

これまでに親子でミュージアムに行った経験があるかどうかという問いに対して、無いという回答が約7割あり、プログラムのタイトル通り、今回の参加が親子での「はじめてのミュージアム」体験となったことが分かった。親子でのミュージアム経験が

ない理由には、「知らなかった、機会が無かった」という館側からの働きかけ不足が原因とも思われる理由や、「まだ早い、子どもがちゃんと分かるかどうか分からない」という親の判断による理由、「迷惑になりそうだ」という遠慮が挙げられた。

一方、親子でミュージアムに行ったことがある母親からも、「うるさくすると周りに迷惑かなと思う」、「ぐずって大変だった」というコメントが寄せられた。これらの理由から、館の存在をもっと広報する必要があることはもとより、0～2歳児をミュージアムに連れてきて楽しく学べる場・環境を作り、それを伝える努力をすることが大切であるということが分かる。

2-3. プログラムについて

次に、各プログラムで子どもと楽しめたかどうかや、プログラムの内容や運営についてどう思ったかに関して、参加者のコメントを4つのカテゴリーに分けて考察する。

一つ目は「出会う」というカテゴリーである。「なかなか入ることのできない建物でできた」、「男の子でおひなさまに触れることがないので、このような機会に参加できて良かった」、「意味はわからなくても触れさせておくのは良いことと感じる」、「雰囲気味わうだけでもいい影響を与えてあげられるかなと思った」というコメントから、建物も含めたミュージアムという環境やその雰囲気に出会うことや、モノに出会うことについて好感を持ったことが分かる。

二つ目は「楽しむ」というカテゴリーである。「暗いのが不安だったが、なくことなく楽しんでいた」、「まだ小さかったが楽しく参加できた」、「はじめに子どもが入りやすいように工夫していて楽しかった」というコメントから、心配をしながら参加したけれど、子どもが楽しむことができて、母親も喜んでいられる様子が見て取れる。

三つ目は「学ぶ」というカテゴリーで、「子どもが(星を)じーと見ていた」、「夜と昼の違いを体験できた」、「じっとはしてられないが、絵本、人形、折り紙と興味を持って見ていた」、「実際に(青虫)に触ってみると、また違った面白さがあった」というように、子どもがさまざまな形で学びにつながる体験をしていることが分かる。

最後は「サポート」というカテゴリーである。「騒がしくて申し訳ありませんでしたが、温かいスタッフの方にはやされました」、「スタッフがたくさんいて安心して参加できた」、「参加しやすい時間帯、長

さだった」というコメントから、我々スタッフの対応や体制が、乳幼児を連れたい利用者にとっての楽しい博物館体験になるかどうかということに影響することが分かった。

3. 関係者アンケート結果

実施館の協力スタッフ5名からのアンケート結果では、対象者にプログラムを楽しんでもらえたと思ったと全員が回答し、4名が今後もこのような取り組みを実施したいと回答した。また、これまで事業の対象としてこなかったこの利用者層に関する理解を深め、プログラムを実施するスペースやしつらえなどの環境が、この利用者の体験に大きな影響を持つこと、そして、新たな企画をする際に必要となる配慮などについても知る事ができたという、学びの体験になったことが明らかになった。さらに、乳幼児連れ利用者を対象として活動をしているということが外部へ知られるとともに、内部的にもこのような活動をする事の意義を認知してもらうきっかけになったという意見が寄せられた。

一方、各プログラムの実施規模が小さいということや、さまざまな関係者と交渉し許可を取るなどコーディネーターの負担が大きいこと、そして企画や運営など、このプロジェクトに関わるお互いのスキルをどのように共有し、どう定着させていくかということなど今後の課題も見つかった。しかし、伊丹市立こども文化科学館では、プラネタリウム投影の一部プログラムを乳幼児連れ利用者向けに改良するという館独自の動きがでてくるなど、連携事業が館の展示事業にも影響を与え始めたことは意義があると考えられる。

4. 連携プログラムから得られること

4-1. 乳幼児連れの利用者が得られること

劇的な少子化が進む現代日本社会においては、安心して楽しみながら子どもを育てられる環境づくりが強く求められている。ミュージアムもこれまであまり具体的に対応してこなかった乳幼児とその保護者への支援に取り組むことが必要である。これまで述べてきたように、乳幼児連れの利用者がそのような取り組みから得られることには、以下のようなことがある。

- ・ミュージアムの豊かな資源を親子で体験する
- ・安心して楽しみながら学べる環境
- ・情報交換の場
- ・子育て中のストレス発散の機会

- ・子どもの成長を実感する
- ・利用者としてのミュージアム・リテラシー

特に、子どもが成長していることをプログラムの中で確認し、それを記録して、父親など家族と自宅で共有するということが、この時期の子どもをもつ親にとっては大切であり、喜びを感じるところでもある。子どもも自分の成長記録として、もっと大きくなってから眺めたり親と話したりということもできるであろう。

ところで、2011年の JMMA 大会で学校教員とミュージアムに関するミュージアム・リテラシーについて指定討論で発表したのが、それを0～2歳児連れの利用者にも当てはめて考えることができる。教員としてのミュージアム・リテラシーの3つの構成要素は「知る・理解」、「出会う・把握」、「使う」であるが、それと同様に、ミュージアムは乳幼児連れでも、大人と子どもと一緒に楽しく学べる場であると理解し、どんなプログラムやサービスがあるかを把握し、積極的に活用することが必要となる。つまり「利用者側に求められるミュージアム・リテラシー」を高めなければならないと言える。

4-2. ミュージアムが得られること

一方、ミュージアムにとっても以下のようなことが得られる。

- ・プログラム企画・運営のスキル
- ・新しいネットワーク
- ・新たなミュージアム事業の可能性（自館の資源活用の可能性）
- ・新しい利用者層の理解・開拓
- ・将来のミュージアム利用者
- ・学芸員としてのミュージアム・リテラシー

乳幼児連れ利用者の要望や特性を理解し、ミュージアムの資源を利用可能にするようにアクセシビリティを考えると「博物館側に求められるミュージアム・リテラシー」も高めていかなければならない。

そして、こそっと研も連携活動を通して、実践研究の場、様々なスキル、ネットワーク、新たな実践のアイデアなどを得ることができる。

5. まとめ

たしかに、まだまだ課題もあるが、解決を図るためには、連携するパートナーそれぞれにとってプラ

スとなる連携のあり方「Win-Win Situation」を考え、ていく必要があると言える。

遠慮をしたり、他の来館者からの視線を気にしたりという状況の中で、ミュージアムとの関わりを持ちにくい、または、ミュージアムとの関わりが希薄になりやすい乳幼児とその保護者に対して、ソーシャルインクルージョンとして、新たな試みをしていく必要がある。そして、それを実現するためには、双方がミュージアム・リテラシーを育成し、獲得していくことが大切である。

「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」プロジェクトでは、乳幼児連れ利用者とミュージアムの双方がこそっと研を通してつながり、相互作用のプロセスを通して、それぞれのミュージアム・リテラシーを獲得することができたと言える。そしてこれらの3者が重なった部分が子育て支援の環境だと考える。

乳幼児連れの利用者の立場に立ったガイドブックを作成して、それを「来館のきっかけ」にしてもらうこと、また、ただ来てもらうだけではなく、ミュージアムはその独特な資源を有効に活用して「学びの環境」を作ることが大切である。この両方の活動がつながったとき、新しい利用の仕方、新しいミュージアム利用者を作り出していくことができると考える。さらに、乳幼児連れ利用者に対する理解が他の来館者からも得られるように、ミュージアムが働きかけることも必要になってくるであろう。そして、このような活動を通して、ミュージアムはソーシャルインクルージョンを具現化する「社会変革のための装置」として機能できるのだと考える。

（なお、本稿は「こそっと研」の黒岩啓子、川人よし恵、内田みや子の3名の連名で発表登録し、黒岩が発表した内容をもとに執筆した。）

注：

- (1) 「0・1・2歳児と楽しむはじめてのミュージアム」は「平成23年度兵庫県子育て元気アップ活動助成事業」にこそっと研が応募し助成金を受けて実施した事業である。
- (2) 博物館の子育て支援機能に関する研究ワーキンググループ（編）（2011）「博物館の子育て支援機能に関する研究—乳幼児連れ来館者のための展示、教育普及事業の企画手法の開発—調査研究レポート」P.4
- (3) 伊丹市役所広報課資料による。

新刊紹介

『さわっておどろく！』

点字・点図がひらく世界』

ひろせこうじろう みねしげ しん 著
広瀬浩二郎 嶺重 慎 著

2012年5月22日発行 180頁

ISBN 978-4-00-500713-4

発行：岩波ジュニア新書 定価：880円＋税



『さわって楽しむ博物館』

ユニバーサル・ミュージアムの可能性』

広瀬浩二郎 編著

2012年5月23日発行 254頁

ISBN 978-4-7872-0048-8

発行：青弓社 定価：2,000円＋税



今回は「さわる文化」をテーマとした非常にユニークな内容の二冊の本を紹介する。

まず、岩波ジュニア新書の『さわっておどろく！』は表紙の題字に点字が、口絵の白頁には「木星の点図」が施され、最初から点字と点図による豊かな触覚の世界が感じられる。

著者の広瀬浩二郎氏は、国立民族学博物館准教授で、日本宗教史、障がい者文化論を専門とする。13歳の時に視力を失ったとのこと。近年、とくに“さわる”ことをテーマとした研究も進め、それに関する講座等を多彩に企画・開催している。このほど同館に展示品に触って楽しむコーナー「世界をさわる～感じて広がる」が開設され、その展示も担当した。現在、常設化を検討中とのことである。

共著者の嶺重 慎氏は、京都大学大学院理学研究科の教授で、宇宙物理学が専門である。壮大な宇宙の姿を誰にでも理解できるよう工夫し、“点図”で表現するシステムを開発した。その一例として、天文の画像を触覚で学ぶ“点図”による学習教材があげられる。

本書は、広瀬氏が1部「したたかな創造力一点から宇宙へ」と題して、1章「ブラインドサッカーは視覚障害者文化なり!」、2章「さわる文化を育むユニバーサル・ミュージアム」、3章「“点字力”の可能性」を記し、2部を嶺重氏が「しなやかな発想力一点図の魅力」と題して、4章「眼で見え

ないものを探究する」、5章「誰もが楽しめる点図」を執筆し、参考文献等も紹介した構成である。

ジュニア新書という中高生向きの書籍ではあるが、提示された「触文化」について濃密な論理が展開されていて、大人にとっても示唆に富んだ興味深い一冊である。

次に、広瀬浩二郎編著による『さわって楽しむ博物館—ユニバーサル・ミュージアムの可能性』を紹介する。

広瀬氏は、前述のとおり「さわって、楽しめる博物館づくり」を推進し、その研究や普及活動等は周知の通りである。

本書は広瀬氏が代表者となった科学研究費プロジェクト(2009年～2011年)の活動の総括と展望を目的として企画されたシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践～博物館から始まる『手学問のすすめ』」の発表(2011年10月29日～30日)が纏められ、出版されたものである。

ちなみに、このシンポジウムの開催には、当JMMAの他、全日本博物館学会や日本博物館協会も後援し、全国から定員を超える参加者が、国立民族学博物館の会場に集った。

本書の構成は、当日の発表と同じく3部に分けられ、16章と6編のコラム等からなり、多様な論説が幅広く繰り広げられ、目を見張る。

第1部は「ユニバーサル・ミュージアム研究会の衝撃」と題され、主に日本のミュージアムにおける視覚障がい者支援の現状と課題が整理されている。第2部は「視覚と触覚の対話」で、盲学校などで行われている触覚を活かした学習法が概説され、博物館の展示に何が不足しているのかが提起されている。第3部は「目に見えない世界を触覚で探る」で、ミュージアム等が取り組んでいる触覚展示や様々なプログラムが紹介されている。

なお、2006年にも同館にて、広瀬氏が企画した国際シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムを考える “つくる” 努力と “ひらく” 情熱を求めて」が開催（9月23日～24日）され、翌年、発表を纏めた報告書『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム “つくる” から “ひらく” 現場から』が発刊（読書工房）されている。

これらの本は、“さわる” ことへの多様性と利便性を活かした編集となっており、各章に盛り込まれた内容は、“ユニバーサル・ミュージアム” の可能性を考える上で至便であり、まさに座右の書に相応しい。

最後に、“ユニバーサル・ミュージアム” を目指して取り組んできた評者の勝手な感想と意見を記したい。

今回、紹介した書籍では“ユニバーサル・ミュージアム” の目標を「誰もが楽しめる博物館」、「“さわる” ことから『感覚の多様性』を掘り起こすこと」と捉えている。

そこで、先ず“ユニバーサル・ミュージアム” の言葉の発端と概念を整理しておきたい。

この言葉は、神奈川県立生命の星・地球博物館が開館3周年（1998年3月）記念のシンポジウムを計画した際に考え出された造語で、ユニバーサル・デザインの理念が博物館においても有効と考え、ユニバーサル・デザインされたミュージアムを縮めて“ユニバーサル・ミュージアム” と表現したものである。

「誰もが楽しめる博物館」は当然のこととし、すべての人にやさしく、それぞれの機能が全体としても充実するようデザインされた博物館が“ユニバーサル・ミュージアム” としての理想の姿、目標といえよう。そして“ユニバーサル・ミュージアム” を目指した取り組みで大切なことは、すべての利用者が楽しめ、感動を共有するための快適な施設づくりであるが、最初からユニバーサル・デザインで満たすことや理想的な環境を整えることは難しい。また、ユニバーサル・デザインには決まった例がなく、最も使いやすいものを創り、

多くの人が活用することによって、さらに良いものが導き出されると考えている。

今後も博物館界において“ユニバーサル” という考え方や取り組みが一層、はかられることを望みたい。

次に「ハンズ・オンから手学問へ」と題したシンポジウムの発表と『さわって楽しむ博物館』の本の中の同表題のコラムであるが、これは逆に「手学問からハンズ・オン」と考える。観て、触って、感じて、思考する「ハンズ・オン展示（手法）」は、手学問より多くの情報を得ることができ、“モノ” を理解するうえで、より有効であると判断する。

「手学問からハンズ・オン」であることの方が理解しやすい例を、神奈川県立生命の星・地球博物館の地球展示室の岩石標本で説明したい。前述の書籍『さわっておどろく！』の5章の中でも当館のハンズ・オン手法の展示の例が紹介されているが、地球誕生の展示では、地球が造った景観を岩石標本等を用いて解説している。展示されている「縞状鉄鉱石」は、外からは縞状が見えないため縞状を判りやすくするために表面を磨いた鉄鉱石も陳列されている。磨かれた鉄鉱石は、視覚では縞状を把握できるが、触角ではツルツルした感じだけで、縞状は分かりにくい。そこで、ハンズ・オン手法を用い「縞状鉄鉱石」に磁石を当てることによって、含まれている鉄分の多少により強弱が感じられ、目を閉じても縞状が理解できる。

他に、この地球展示室の入口にある「鉄隕石」でも隕石に磁石がつき、普通の岩石と鉄隕石とが区別でき、隕石の中に鉄分が含まれていることが判る。

あるいは、人文系博物館の展示室や体験実習室等で行われている、例えば、銅鐸を鳴らしたり、火おこし等の体験学習も「ハンズ・オン手法」と同様であると考え。

博物館での様々な体験は「手学問」から発展した「ハンズ・オン」学習と言える。

今回、紹介した書籍は、博物館が抱える課題を考える上でも貴重であることを申しあげるとともに、これからもさらに広瀬氏を中心としたユニバーサル・ミュージアム研究会の活動と嶺重氏のパソコンを使った点図の学習教材の普及に期待し、心から支援したい。

奥野花代子

（神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員）

i n f o r m a t i o n

◆文献寄贈のお知らせ

- ・コミュニケーションツール研究会報告書 黒岩啓子編『展示室におけるコミュニケーションと学び』
- ・公益財団法人多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）
『多摩くらしの調査団 民俗調査報告書 第二集 下落合・山王下の生活と伝承』
- ・学文社
『新博物館学教科書 博物館学Ⅰ』
『新博物館学教科書 博物館学Ⅱ』
『新博物館学教科書 博物館学Ⅲ』

u o i t a r o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

大久保 亨 九州造形短期大学
川人 紫 昭和大学
木野 聡子 株式会社 乃村工藝社 北海道支店
栗田美由紀 奈良大学
庄中 雅子 国立科学博物館
堀 一久 株式会社 江ノ島マリンコーポレーション

松尾 美佳 国立科学博物館
村山 吾郎 (財) 日本自転車普及協会

【学生会員】

吉田 将義 和歌山大学大学院
(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・マネジメント学会法人会員 (2012年12月現在)

株式会社アートプリントジャパン
アクティオ株式会社
(財) 阿蘇火山博物館 久木文化財団
株式会社江ノ島マリンコーポレーション
独立行政法人 科学技術振興機構 日本科学未来館
カロラータ株式会社
交通科学博物館
佐賀県立宇宙科学館
財団法人竹中大工道具館
公益財団法人 多摩市文化振興財団
株式会社丹青研究所
株式会社丹青社
公益財団法人 つくば科学万博記念財団

東京家政学院大学
東京家政大学人文学部教育福祉学科
株式会社トータルメディア開発研究所
内藤記念くすり博物館
長崎歴史文化博物館
株式会社西尾製作所
株式会社乃村工藝社
株式会社文化環境研究所
ミュージアムパーク茨城県自然博物館
UCCコーヒー博物館
早稲田システム開発株式会社

(五十音順・敬称略)

学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No. 64・65 (Vol. 17 no. 2)

発行日 2012年12月31日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕・齊藤恵理・津久井真美 HP: <http://www.jmma-net.jp/index.html> e-mail: kanri@jmma-net.jp